呪をもらって魔法学園生活!!

加々美由亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪をもらって魔法学園生活！！

【Ｎコード】

Ｎ００２２Ｄ

【作者名】

加々美由亜

【あらすじ】

西暦２０１５年。人類に新たな神秘、『魔法』という物が誕生した。それは、本来人類が聞いているような非現実（オカルト）ではなく、理に適った科学（リアル）的な物。これは、そんな『魔法』を使う『魔法使い』達が集まる『魔法学園』で生活する者たちを描く物語。【現在本文全体を書き直し中。新しく設定されたものもあるので、是非最初から読み直してみてください】

第一：幕開けにケルベロス！！？

『魔法』と言う物は、この世の誰かが思っているよりも難しく、この世の誰かが思っているよりも簡単な物だ。　そんな複雑な物を扱うのが『魔法使い』。　その魔法使いを育てる機関を『魔法学園』と言う。

そんな魔法学園、『魔立如月学園（まりつきさらぎがくえん）』の中でも、最年少の生徒達が学ぶ、中等部一年校舎の一室、１年Ｃ組の教室の自席で、古びた書物を読みふける一人の少年がいた。

見たところ、かなり古い本だ。　ＲＰＧとかに出てくる古代の魔導書みたいなものを思い出させる。

そんな本を読んでいる少年の名前は篠原葉月（しのはらはづき）。　まるで少女のような顔立ちをしていて、青紫色の髪は、ルビーのように輝き、血のように深い赤色の目を隠すかのように長い。

学校が私服制なためか、彼の服装は、膝元まである黒いロングコートを赤いシャツの上にチャック全開にして着ていて、スボンはコートと同じ、黒い色のビニール製の物を履いていた。

一見、奇妙な服装だが、本人はそんなもの気にしていない。　着れれば何でもいいのだ。　ロングコートの理由は寒いから。　決して夜道に裸体で出てくる「私を見て！！」的な変態どもとは全く違う。

彼は単にボーっとしているだけで、何も見ていない様な表情でその本のページをめくる。

「葉月～！！」

葉月は自分の名前を誰かに呼ばれる同時に、パタンと本を閉じ、声のした後ろを振り向いた。　否、振り向こうとした瞬間にもう既

に横にいた。　そこにいたのは、こちらとしては残念なことに、我が双子の姉の篠原愛海（しのはらあいみ）だった。
　似ているを通り越して、まるで鏡で写したかのように葉月と瓜二つな彼女の顔は、常時ムスッとして、落ち着いた葉月とは反対に、彼女は明るく無邪気で、おてんばさを感じさせると同時に、愛らしい何かを感じさせていた。
　髪は肩口まで伸ばし、それにカチューシャをつけていて、瞳の色も髪と同じで茶色い。　互いの髪の色が違うのは、どちらかが染めたとかではなく、原因は、『魔力式色素異常症候群（Ｃｈａｎｇｅ　Ｏｆ　Ｃｏｌｏｒ　Ｓｙｎｄｒｏｍｅ）』という、まぁなんとも長ったらしいものの症状にあるわけなのだが。
　この『魔力式色素異常症候群』、通称『ＣＯＣＳ（頭文字とっただけ！）』。　別に人間の体に害があるわけではない。　ただ、魔力というのは、人間の色素に異常をもたらす効力があったらしく、当時、魔法が発明されて間もないうちに、世界中の人間の髪や目の色に異常が出たときは、すごい騒動になったらしい。　それは今からおよそ５０年も前のこと。
　そう。　そもそも魔法が一般的になったのは、そんな昔じゃない。
　それどころか凄く最近だ。　正確に言えば、２０１５年８月～１０月にかけて、正式にそういうものがあることを学界から発表されたのだ。
　それはさておき、この目の前の少女なのだが……。

「あ……」

　あまり会いたくない相手を視界に入れてしまった事を後悔して、小さく、だけど深くため息をつく。

「ま～た、それ読んでる～！　しかも私を置いてけぼりにして～！」

明らかに怒っている感じに葉月を見下ろしているそいつの服装は、何かちょっとおかしかった。　なぜなら、セーラー服を意識した彼女の服装は、私服製のこの学校には明らかに不釣合いだったからだ。
さらに、短くしたスカートのしたには黒いスパッツを履いている。
おそらくスカートは短くしたいけど、中は見せたくないという気持ちを表したものだろう。
こういう何かが矛盾しているところが、葉月には理解できない。
無論、したくもない。　再度ため息をついて口を開く。

「あのさ、僕は愛海がトイレに行って来るって言ったから先に教室に行ったんだ。　僕は悪くない」

愛海は無愛想な返事をする葉月に対して口を尖らせる。　そんな表情も愛らしいと、周りの人間なら思うのだろうが、葉月には鬱陶しい以外の言葉は浮かばない。　むしろ腹立たしい。　もちろん自分に降りかかる被害を考慮して、本人に言ったことは一度もないが。

「普通女の子を待ってあげるのが、男の子なんじゃないの？」

一瞬葉月は眉間にしわを寄せる。　何が女の子だよと、心底思ったからだ。　しかし、すぐにいつもの平然とした顔に戻る。　何時までも怒っている表情をしていたら愛海がうるさいから。

「姉に隅々まで気を使う弟が何所に居る？　姉弟愛が特別に芽生えているわけもないんだから」

溜め息交じりの葉月の言葉に「私はあるもん……！」と呟きながら頬を膨らませてる。　結構な爆弾発言をした愛海を無視して、葉月は右手首に付けてある腕時計を睨み付けた。

「そろそろか……」
「……そだね」

その葉月の言葉がスイッチだったかのように、愛海の顔が真剣になった。

「魔法名か……」

魔法名と言うのはこの学校で入学同時に貰う、学園内での仮名だと思えばいい。　この魔法名を貰うことによって始めて『魔法』という物を使えるようになる。
そう、つまり魔法の原理は、魔力という精神力エネルギーの一種で大気中の元素を操り、形を作るというだけ。　ただそれはあくまで、原理と理論を並べるのが簡単なだけであって、通常の人間では出来ない。
だからそこで、魔法名を用いる。　魔法名という一種の暗示を掛け、人間の脳の使用率を極限まで上げ、人間の体に眠る『超能力』を引き摺り出す。　そして、その超能力で、自分の体内の精神エネルギーを使い、元素を操り、形を作る。　こうして聞くと、魔法という物が、凄く科学的なものに聞える。
実際そうなのだ。　人類が数年前まで聞いていたオカルト的な魔法とはまったく違い、この世にある魔法とは、とても理に適った科学的なもの。
しかし、良い事ばかりと言う訳では無い。　この魔法名を与えられた瞬間、中学、高校での６年間はこの学校の外へ出れなくなる。
これが原因で『呪名』と呼ぶ人間も居るらしい。
だが、夏休みとかになればそのときだけ解放されて、家に帰ることができるようになる。　さらに、この学園は全域合わせてバチカン市国の４倍近い面積を持っているという位無駄に広い。
その領域内に、コンビニ的な店や、レストラン。　ゲームセンタ

ー。　お金を引き降ろす為の銀行。　私服を買うためのブティックの様なところもあるため、不便と言う点があまり無い。
だから、魔法名を貰うことに何も異論は無いはずだが、葉月は少し気に入らなかった。　気に入らないと言うよりも、何かが引っかかっていた。
そう考えていると、いきなり教室のスライド式ドアが開き、分厚い眼鏡をかけた女教師が慌てた様に顔を出した。

「時間です！　皆さん、中学用ホールへ移動してください！　席は自由に座って構いません」
「さ、行くかな……」

葉月は嫌々と立って、愛海と共に教室を出た。　ちなみに立った時の葉月の身長は、女の子の愛海よりも低かった。

葉月たちの教室がある校舎の向こう側にある、低縦横長方形の一階建の建物。
校舎とその建物の間には、生徒用の一般寮、または『生徒委員会（フォースエンジェルス）』や、『風紀委員会（ジャッジメンターズ）』の為に作られた、一際豪華な寮などが並んでいる住宅地みたいなところへと続いている道がある。
葉月と愛海はたくさんの生徒と共にそこを横切って、建物の中へ入り、地下へと続く広い螺旋階段を下る。　そして、長い螺旋階段を下りきって見えたのは、城門の様な二枚扉と、その向こうに見える、あまりにも広大なホールだった。
天井はプラネタリウムのように丸く、幾つもの証明が照らしているが、このホールはやや薄暗さが残っている。　無数の座席は映画館の座席と同じ様に平行で、下る感じに奥にある大きなステージへと伸びている。

「広っ、なにここ？　コンサート会場？」
「……とりあえず、適当に座ろうか……」

まだ少し人混む中、少し探しただけで見つけた、ちょっと下った所の空いていた座席に二人は向かい、隣同士に座った。　葉月はいつもの、周りから見たら内容がまったくわからない書物を読み、愛海は身の回りの女子達と喋り続けていた。
しばらくして、葉月がその書物を閉じるのとほぼ同時に女性の声が葉月や愛海の鼓膜に直接響いた。

『皆さん。　これより第１７回、魔立如月学園の、入学式を始めたいと思います』

『魔術的通信法（マギカテル）』だ。　放送とかでは聞き逃してしまう可能性があるから、空気中の音波の流れに伴って、対象の鼓膜を直接叩く方法だ。　これを発動させた女性はかなりの実力の持ち主なのだろう。
その証拠に、今の女性の声を聞いたであろう辺りの生徒達の話し声が止み、辺りの空気が緊張の一色に染まった。
そもそも、『魔術的通信法（マギカテル）』自体も高等術なのに、ホール内に居る生徒全員を対象に発動できるのは、相当な努力、または天才的な才能が無い限り無理だ。　この学校の教師がどの位の実力があるかを、一瞬で証明した。
それでもボーっと本を読み続ける葉月だが、今の報せで明かりが消えた訳でもないのでゆっくりと読める。　さらに教師達に見つかり辛い席を選んだおかげで、注意はされない。　我ながら実にいい場所を取ったものだ。
しかし何かが気になり、チラリとステージを見てみる。　ステージに居る教師陣の中に何故か幼い子供がいたが、誰かの子供が迷子になったのだろうと、葉月はいちいち気にしたりもせず、視線を本

へと戻した。　しかし、

（ん？　なんだ……？）

本を静かに閉じ、右方向、やや遠めの座席に座る少年を見た。
このホールに生徒は中学一年生しかいないから、同い年なのだろうが、それにしては背が高い。　おそらく１６０台前半だと思う。
瞳は氷のような水色をしていて、右側は自分の黄色の髪で隠し、もみ上げ部分は肩まで伸びている。
葉月が言えることではないが、服装もやや変わっていて、革で出来た黒のジャケットと、同じ色のサイズがピッタシな黒のズボンを履いていた。　ズボンを締めているベルトはかなり太い。
これからバイクにでも乗るような格好だ。　その少年と完全に目が合い、沈黙が生まれた。　体が潰されそうな重い空気が葉月を包む。

（っ！？　……何だ……アイツ？）

あの少年を見ているだけだ。　それだけなのに、空気が重い。
氷のような少年の目が葉月の体を凍らせる。　目を逸らそうとするが、あの少年の氷の目はそれすら許さない。
無論、他の生徒にそんなプレッシャーは与えられていない。　葉月があの少年を見て勝手にそう感じているだけだ。　アイツはマズイ、と。　何がマズイのか説明は出来ないが、少なくとも、表情には出さなかったが、葉月は恐れていた。　あの少年を。

「では、これより、魔法名授与を開始します！」

魔術的通信法での教師の声が葉月の鼓膜を叩き、同時に嫌に重い緊張を途切らせた。　正直、心底感謝した。　やっと解放された気

分になった。
精神を見えない鎖で縛られていたかのように固まっていた体の力が一気に抜ける。　それと同時に、葉月はあの少年を視界から省き、ステージのほうを見た。

（それにしても、アイツ……なんなんだ？）

葉月は俯いて悩んだ。　心底訳の解らないあの少年は一体……。
すると、愛海が心配そうに俯いた葉月の顔を覗き込んだ。

「どうしたの、葉月？　具合悪いの？」
「アイツ……」

葉月はさっき少年の事を言おうと思ったが、止める事にした。
言いたくない。　言ったら愛海は葉月をどこまでも心配する。
本人には言えないが、葉月は愛海にあまり心配かけたくないのだ。
そもそも、葉月は悩み事などを相手に直接言う人間ではないし、言ったことも無い。　だからやめた。

「いや、なんでもない……」

頭の上に疑問符を浮かせながら「そう？　なら良いけど……」と言って首を傾げるが、すぐに明るい表情へと戻る。
誤魔化せ切れただろうかと不安になるが、鈍感な愛海のことだ、誤魔化せたに決まっている。　それにしても表情と気持ちの切り替えの速いやつだ。　この切り替えの早さは、葉月も姉の数少ない長所として認めていた。

「いよいよ魔法名もらえるね！」

その言葉に反応してやっと葉月が顔を上げた。　あの沈黙の中、そんなに時間が経っていたとは思わなかった。

「それでは校長先生……」

校長先生と言われ、ステージの前へと出た人物は驚いたことに、先程まで、迷子のように教師陣に紛れ込んでいた、葉月よりも幼い子供だった。

黒い髪は爆発したようにぼさぼさで、その可愛らしい顔も寝ぼけていた。　服装もパジャマのみで、どう見てもただの寝起きの子供（自分も十分すぎるほど子供だが）としか言えなかった。

「え～……ども。　この魔法学園の現校長、白木葉（しらきよう）です。　え～、では早速……」

刹那。　校長の言葉が終わった瞬間に葉月の視界が闇一色に染まった。

（なんだ……？　景色が変わった？）

急な異常事態に、周りに誰かいないかと、辺りを見回しながら愛海の名前を呼んでみるが、返事は無い。　この闇の世界には、自分以外誰もいないのだろうか。　葉月は辺りを見回すが、やはり誰もいない。　さらに言えば、何も無い。　ただただ永遠と続いている暗闇の世界。　そして、たった今気付いた。　体が浮いている。いや、浮いているというよりも、感覚としては水の中にいる感じに近い。

（あの子供……。　ほんとに何者なんだ？）

そう考えるとのとほぼ同時に、葉月の目の前に光が出現し、その中からさっきのパジャマ姿の子供。　もとい、校長『白木葉』が、少し不機嫌そうに頬を膨らませたまま現れた。

「子供とは失礼なんじゃない？　僕はこう見えても５６歳だよ！」

（！？）

ありえない返答が帰ってきて葉月は驚愕した。　この校長の歳のことでじゃない。　『何も言っていないはずなのに返答された』事について驚いたのだ。

「あんた……何をした……？　ここは何処だ？」

葉は葉月なりの心からの訴えを聞くと、心底満足した様ないやらしい笑みを浮かべる。　それすらも愛らしく感じ、妙にむしゃくしゃした。

「知りたい？　はは♪　いいよ、教えてあげる。　君は……１－Ｃ、出席番号１４番、篠原葉月君だよね？」

葉月は言葉にして返す必要は無いと思ったので、軽く首を縦に振った。　その様子を見て校長は満足そうにさらに笑む。

「この闇の中は僕が生徒一人一人と話すために作った『心理鏡』という『思想空間』だよ。　つまり僕の思ったとおりになる世界だね。　ちなみに、『生徒は皆ここに居るよ』」

そんな馬鹿な、と思い、葉月は周りを見回してみる。　しかし先ほどと結果は同じ。　誰も居ない。　やはりこの二人以外には、誰もいない。

「下手な嘘付くな……。　他の生徒をどこにやったんだ！　まさか、逆に僕だけを連れて来たのか？」
「あっはは♪　そんな怖い顔しないでよ～♪　そうだな～、説明するなら、大きなホテルの中に一人一人が別々の部屋に僕と一緒に泊まっていると考えればいい。　同じところでも『部屋』は存在するからね」

葉が楽しそうな、明るい口調でそう説明する。　そこで葉月はすぐに気付いた。

「……てことは……アンタまさか、聖徳太子よろしく、『３００人近くいる生徒と同時に話しているのか』？」
「おや？　よく解ったね。　察しが良い……。その通り、僕はきみ以外の２８６人と話している。　……ふむ、ほぼ同じ時にそれに気付いた生徒がいるね。　良いことだ良いことだ♪」

校長がまた随分と楽しそうな顔をする。　葉月はそろそろ一発殴っても良い頃だろうかと心の中で確認した。

「さて、そろそろ……君の魔法名だけど……」

そう言いかけて、葉月の額にいきなり、だけど優しく自分の額を付けた。　彼の額の熱が葉月の額に伝わる。　まるで親が子供の熱を測るみたいだ。

「君の魔法名は……うん、これがいい」

その瞬間、何かが葉月の頭の中を刺激した。　何かが流れ込んでくる。　それは名前。　魔法名だ。

最初に、『T』。　その次に『E』。　『M』、『P』、『E』、『S』、『T』、『E』、『R』。　その一文字一文字を頭の中でくっつけてみる。

（『TEMPESTER』……騒がせる者……？）

「そう、君の魔法名、『TEMPESTER』。　君はきっと何かを起す。　だから、この名前を送るん……――――っ！！？」

いきなり、葉が笑顔から驚きの表情を浮かべたと思ったら、彼の体が消え失せ、同時に視界の闇も消え、目の前が大きなホールの中に戻った。　そして、そこは異常な光景だった。

辺りを見ていると、生徒達が悲鳴を上げて、席から立って逃げたり、その場にうずくまって怯えている姿が見える。　葉月はそんな彼らの視線の先を見る。

そこに居るのは『ありえないが、ありえる生物』。

犬の様に見えるが、絶対にそれは無い。　頭は三つあり、体は立たなくても大人以上の大きさはある。　犬ではないとしたら、もう答えは一つしかない。　合成獣（キメラ）。

複数の生物を一つに纏めた結果、絶大的な力を持つようになったという、正式名称、『魔力構成式新型人工生物』。　しかも、必要以上に魔力を練りこんで構成されたらしく、通常（おてほん）の物と比べ、凄まじい身体能力を持っているようだ。

今の葉月にはそれが解る。　何故そんなことが解るのかというと、魔法名は個人個人の魔力を察知するためのレーダーにもなるからだ。

目には見えないが、肌で感じられる魔力が、魔力で構成された合成獣の強さを表している。

教師達があの合成獣を捕獲、しかし、生徒には当たらないようにと出来るだけ威力の低い魔法を放っているが、うろたえている生徒達のせいで上手く放てず、放てたとしても、合成獣には当たらず、まったく役に立たない。　それは校長の葉ですら同じだった。　この状況下では、誰であろうがこうなってしまうのは当然だ。

だったら誰があの合成獣（キメラ）を止める？　魔力は当然、力も人間より遥かに強い。　そんな相手に、勝てる確率はあるか？　この場の全員を守る手段はあるか？　答えは、

（あるね）

こんなにも騒々しい中、そういう答えが出せるほど葉月は冷静でいられた。　自身の中で何かが弾け、身体の熱が一瞬にして失せ、すべての感情が無と化した。

怖いとか、恐ろしいとか、反対に楽しいとか、面白いなんて今の葉月の心には無い。　微塵もだ。　ただ、ただ近づくだけ。　時計の長針が短針を追う様に、無心のまま一定のリズムで目標へ向かって歩く。

そんな葉月を誰も止めない。　止めようともしない。　止められない。　止めたくない。　止めてはならない。

生徒達も教師達も葉も気づいている。　葉月の力に。　葉月の魔力に。　葉月が両掌を合成獣に向ける。　その行動だけでホール全体の空気が凍った。

そんな絶対零度の空気を断ち切るように合成獣が人間ではメガホンを使っても出せないほど大きく吼えた。　三つの口から出る咆哮が葉月の髪を揺らす。　しかし、その程度でこの寒冷された空気が元に戻ることは無い。

揺らされる髪下から覗く赤い目（ブラッドアイ）が合成獣の姿を写した。　両手に魔力を集中させ、小さく口を動かす。

「大地よ動け。　姿は龍頭。　数は一。　対象を食らえ……」

それはまるで、眠れない子を寝付かせる優しくて静かな子守唄の様だった。　しかしその『唄』が終わる瞬間。　葉月に襲い掛かろうとしていた合成獣が地面から出現した何かに捕まった。　というよりも、『噛まれた』と表現したほうが正しい。

合成獣を噛んだそれは、まるで龍の頭だった。　恐らくコンクリで出来ているそれが、天井を向きながら合成獣の体を咥えている。

その光景は一つの絵のようにも見えた。　噛まれた合成獣の鮮血が飛び散り、絨毯や近くにいる生徒達の服や肌を汚す。

ホール内の全員が皆、驚きを隠せずにいる。　生徒全員が、教師全員が、姉である愛海が、校長である葉が、全員唖然としていた。

その原因は簡単。　今葉月が発動させた魔術に対してだ。　さらに言えば、今日、ついさっき魔法名を貰ったばかりである葉月が今の魔術を使えたという矛盾に対してだ。

簡単な魔術だったら、さっき本を見たから、ぶっつけ本番でやってみたといえば、一応の説明はつく。　しかし、上級魔法は別だ。

中等部では中級魔法が最後。　高等部の半ばでやっと教わるものだ。　しかも、習得もかなり難しいのだ。　それに今のは、

（……最上級の『遠隔型魔術』……？　うそ……そんなの、ＬＥＶＥＬ７やＬＥＶＥＬ８の術式なのに……）

基本的に魔法使いにはレベルという物がある。　しかし、レベルとはあくまで良い言い方。　嫌な言い方をすれば地位だ。　最大ＬＥＶＥＬ１０まであり、数が多ければ多いほど、『地位（ゴースト）』が高い。

ＬＥＶＥＬ１（ハンプル）、ＬＥＶＥＬ２（スライト）、ＬＥＶＥＬ３（コモン）、ＬＥＶＥＬ４（ゴースト）、ＬＥＶＥＬ５（スピリット）、ＬＥＶＥＬ６（エリート）、ここまでが生徒レベルだ。　実際、ＬＥＶＥＬ６（エリート）に到達する生徒は稀で、基本的にはＬＥＶＥＬ４（ゴースト）止まりが多い。　逆にＬＥＶＥＬ１（ハンプル）止まりという生徒も珍しくはない。

そのまた逆に、ＬＥＶＥＬ６を限界とせず、そのまま突き進んで成長したのが教師レベルだ。　ＬＥＶＥＬ７（ドラグーン）、ＬＥＶＥＬ８（エンゼル）。　これは本当に稀で、天才の中でも一部としか言えないほどのレベルであり、人間の限界点と言われている。

では、残りの二つは何だと言われたら簡単だ。　『人間ではありえないレベル』と考えれば、９割強正解だ。　ＬＥＶＥＬ９（レジェンド）、ＬＥＶＥＬ１０（ゼウス）。

葉月はこの二つにもっとも近いＬＥＶＥＬ７やＬＥＶＥＬ８並の力を発揮した。　入学したての生徒どころか、生徒である時点で、今の魔術を発動するのは非常に難しい。

だからこそ葉は気付いた。　『力を使いすぎた今の葉月に意識が無い』のだと。　それがわかったと同時に、葉月がぐらりと横に倒れた。

慌てて一人の少女が葉月のそばに駆け寄る。　名前は確か『篠原（しのはら）愛海（あいみ）』とか言う名前だった。　先程『ＦＩＮＤＥＲ（気付く者）』という魔法名を与えたのを覚えている。　ふと思い出してみれば、苗字が同じだということに気が付いた。　顔も似ているし、双子なのだろう。

「葉月？　葉月！？　どうしたの？　ねぇ！　起きて！」

愛海の方は自分の弟の体を揺さぶりながら叫んでいる。　弟の方は顔を青ざめながら瞼を閉じて、ピクリとも動かない。

そういう状態のまま揺らされている姿を見ると、余計状態を悪くしそうな気がするが、あんなにも必死な彼の姉の姿を見ると、そう言うのも少し気が引けた。

そんな二人に、葉は音も無く二人の傍にやってくる。　一瞬でだった。　恐らく、魔術の一つだろう。　葉はそのまま、気絶している葉月の腹部に手をやった。

（……一応無事だね……。　体内の魔力が空っぽになっただけか……）

一瞬だけホッとして、自分の弟を心配そうに抱える愛海を見た。

「大丈夫だよ。　命に別状はないし、呼吸も安定している。　でも心配だから、保健室に送ってあげるね」

弟の安心を聞けて嬉しいのだろう。　一瞬だけ安堵の溜め息を吐いてから、腕の中の弟をギュッと抱きしめる。　その後、二人の姿が一瞬にして消え失せた。　『転送魔術』の一種だ。

（体内、及び体外に以上は無かった……彼の魔力も、普通の生徒よりは強いけど、それでもＬＥＶＥＬ３ギリギリ。　……だとしたら、『覚醒種』かな……？　だけど今のは少し違うような……）

さっきまでの事態をそう推理してみる。　顔の筋肉が緩み、口の両端が吊り上る。

（ふふ……さっそく、騒がせてくれたね『ＴＥＭＰＥＳＴＥＲ』……。　今までにないくらい。　それにしても……）

葉は横たわっている合成獣を見据える。　既に死んでいる。　当然といえば当然だが、事態が事態だ。　どう考えたって目の前の光景の矛盾は取り消せない。

（それに、あの合成獣……論文を作るためとかの実験用じゃなくて、護衛とか強襲に使う戦闘用として作られていた……）

合成獣の周りには素材であったコンクリートの塊が散らばってい

る。　葉月によって作り出された龍頭の形を保つための魔力が尽きたのだろう。　そしてゆっくりと葉月を見据える。　すると、ゆっくりと葉の口の両端が吊り上り、その愛らしい顔に似合わない妖艶な笑みが出来上がった。

　何かを企んでいる様な笑みだが、よく見ると全然違う。　彼の笑みは『何かを企んでいる誰かの行動が楽しみだ』という笑みだ。何が始まるのかが解らない今、こちらも何をするのかが決められない。　だからこそ面白い。

（ふふっ……。　長生きすると面白いものが見つかる。　忙しくなりそうだ）

　葉は獅子よりも強い声を出して笑う。　だが強いと言っても、声の大きさそのものは半径一メートル前後にまで近づかないと聞えないほど小さい。

　しかしそれは、そのくらい近づいてしまえば、心臓の弱いものなら一瞬で気絶してしまいそうな悪魔のような笑みだった。

第一：幕開けにケルベロス！！？（後書き）

どうも、初めまして。　そうでない人（いるわけ無い）はお久しぶりです！

正直殆ど初心者でして、決して全く上手くはありませんが、楽しみながらやっていきたいと思っております。

アドバイスや感想などはドシドシ、バシバシください！　やはり参考にもしたいし、もらえると嬉しいですので。

とりあえずはこんな感じで。　今後、色々お世話になりますが、どうぞヨロシクです！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第二：金色の氷　ｐａｒｔ１

２０６７年４月１０日

冷たい水で顔を洗うと表情がひきしまる。　普通はそうだが、意外とそれは個人さがある。

とある少年は今そうしたが、引き締まらない。　今もどこか眠たそうな表情だ。

「……はぁ……」

その表情を見た、少年は嫌気がさした様なため息をつく。　いや、正確には表情ではなく、自分の顔だ。　もっと正確に言えば、自分の双眸と髪だ。

ブルーベリーのような青紫色の髪と、炎。　というよりは、鮮血のような深みのある赤色の瞳。

もともと、この少年の髪と目は最初からこのような色だったわけではない。　しかし、染めたとか色を抜いたとか、カラーコンタクトをつけているとかでもなかった。

そう、これら『魔力式色素異常症候群（通称：ＣＯＣＳ）』によるもの。

葉月の髪と目は、魔力によって変色する時期が遅かったため、彼は自分の元の髪と目の色を知っている。　だから、この髪と目の色が、これらを持っている自分が自分じゃないみたいで嫌いだった。

特に『この目』。　真っ赤（まっか）で真っ紅（まっか）一な真っ暁の目。

見た瞬間で人の血を連想させられるほど、この赤が澄んでいて、見るだけで吐き気がする。

（まぁ、もう慣れたけど……そういえば、何故魔力によって人間の色素、それも、髪や目のみに以上が出たのか、いまだに解明できていないんだっけね……）

どことなく感じた苛立ちを、かすかに鼻を鳴らすことで過ごし、リビングへと戻る。

リビングは、当然の如く廊下と同じフローリングの床。　そして縦長の、やや広いつくりとなっている。

（それにしても……）

昨日のこと。

入学式の途中、正確には魔法名をもらった後、会場に突如現われた合成獣を目にしてからの記憶が、なぜかない。　気を失っていたと予測していいだろう。

その後、目が覚めたときは変に白いの天井が真っ先に目が入った。

次に鼻につく薬の臭い。　体を服越しに包む薄い掛け布団といやに硬いベッド。　プラス、体に痛みは無かったが、異常なほどの疲労感と脱力感が、しばらくの間、葉月をベッドに拘束していた。

保健室での出来事も、何かあった気はするが、それも朦朧としていてハッキリとはしない。　だが、確かあのときに校長が来て、

「今回は、僕の変わりにキメラを止めてくれてありがとうね。　ちょっと大事になったみたいだけど、まぁ教師以外の生徒の半分以上は『ホール内の教師の誰かがやった』って思ってるだろうから、そんな大きな噂ごとにはならないと思うよ。　君も含め、皆もらったばっかりの魔力と魔法名が体になじんでないだろうからね。　……まぁ、それは置いておいて……そんな頑張った君には面白い物をプレゼントあげよう♪」

とか何とか言っていた気がするが……と、廊下とリビングの境界線の働きを持つドアを開け、ため息をつく。
この学園では男子寮、女子寮というものは無く、寮内でバラバラに男女別に分かれている。　これに対して、別にこれといった反論は無い。　例え同じ遼に女子がいたとしても、別に部屋の中で女子と一緒になるわけじゃないから。
一人一部屋じゃなくて、二人一部屋というのも、全然我慢できる。面倒くさいところもあるだろうが、実質的には楽しいと思うから。
だが、目の前の悪夢はどうしても我慢が出来なかった。　文字通り、夢であるなら。　マジで覚めてくれと思うほど、本気で疑問と怒りを抱いてしまう。

『何故女子であるはずの愛海がこの部屋にいるんだ？』と。

あの時の葉の『面白いプレゼント』というのはこれのことだった。
本来なら、葉月と共にこの遼で学園生活をすごすはずだったルームメイト（名前……なんだったっけか……）は、たったこれだけのために他の部屋へ、葉月とは違うルームメイトと共に学園生活を過ごすこととなったと言うのか。
いやというか、いくら『面白いプレゼント』とはいえ、これはさすがに面白すぎじゃだろうか。　暗殺の計画を立てたいくらいに。
とりあえず、そんな気持ちなどを誤魔化すために、というか本当に夢でありますようにと願って、先ほど顔を洗っていたのが……全然ダメだ。　どうやら現実らしい。
時刻は午前十時二十二分。　本来は中学校舎にいるはずなのだが、今年入学した生徒は、この馬鹿広い学園の中を知るために、入学式後の二日間は休日となっている。　今思うと、休日が嫌な日だと思ったのはこれが初めてかもしれない。

いやそんなことよりも、どうにかしてこの姉を追い出せないかと考えてみるが、そんな不可能を可能に変える様な便利な魔法など無いと、すぐに諦めた。

それで、無自覚なことの発端、愛海は、葉月が寮に着たらじっくりと楽しもうと思っていた最新型家庭用ゲーム機「ゲームステーション４」で格闘ゲームを勝手にやっている。

先程愛海が、一緒にやろうよと誘ってきたが、丁重に（嘘だが）断らせていただいた。　理由は、愛海の格ゲーでの実力が、魔力のレベルで言うＬＥＶＥＬ１０（ゼウス）的に強いからだ。

出来れば思い出したくないが、随分前それが原因で泣かされた思い出もあるし、小学校５年生の頃、始めてやるタイプの格ゲーを１ゲームで攻略し、そのあと行われた同じ格ゲーの大会でストレート及びノーダメージで優勝したことという歴史を葉月は覚えている。

（人間一つは取り柄があるって言うけど、それがゲームって言うのはどうかと思うけど……）

まぁ、そういう理由も含め、寮の内での行動手段がなくなったので、どうしますかと心の中で自問してみると、外に出て学園見学をするという手段を心の中で自答した。

「愛海。　僕校内見て回るけど、良い？」

いつもなら勝手に行動するのだが、寮の中に二人だと、何となく許可を取った方がいい気がした（まぁ、取れなくても出て行くつもりだったが）。

「え？　あ、ちょっと待って！　私も行く！」

「は？　今それやって……ってうわ、はや……。　上級者用のザコキャラでラスボス二十秒で倒したよ」

「さ、行こう！　行きたい所があるんだ」

「……」

唖然とする葉月の腕を半ば無理やり引っ張り、部屋を出て、エレベータを使って一番下まで降り、そのまま寮を出た。

何となくだけど、寮を出たときの風景がどうも住宅街に見える。

昨日の帰りの時も同じ感想を抱いていたが、今もそう思える。

葉月たちの寮の両隣に同じ学年の寮が幾つも並んでいるからだろうか。

この学園は普段の生活環境と似させるために、学園内は街を模したような造りとなっていると聞いた。　バチカン市国の４倍を超える面積を持つこの学園を良い方向に活用したやり方だと思える。

この案もやはりあのバカ校長が考えたらしい。　まぁ、バカなりに良い考えだとは思うが、そう考えると何となく眉間に皺が寄ってしまう。

「で、何所行きたいの？」

「決まってるじゃん♪　と・う・ぎ・じょ・う♪」

闘技場というのは、その名前の通り、この学園内の魔法使い同士が、学年関係無く、魔法で闘いあえる場所だ。

基本的にそこは、休み時間とかに生徒同士が覚えたばかりの魔法を試して戦ったり、実習で魔術の訓練をしたり、試験で生徒一人一人が現在どの程度の実力があるかを調べるために使われている。

「何でそんなところに？」

「面白そうだから。　ほかに理由いる？」

「いや……別に」

「じゃ、ホラ！　そんな私をひくような目で見てないで、行こ♪」

再度無理やり引っ張られ、葉月は振り解こうと思ったが、情け無いことに愛海の腕力によって、それすらも適わなかった。

第二：金色の氷　ｐａｒｔ１（後書き）

前回は一気に書いてしまって困ってしまいましたが、今回は一話を三つに区切ることにしました。

書いてて少し思うことは、『セリフが少なすぎ』なのでは？　という結構問題的な部分なのですが、とりあえず、これからもっと改善して行くという事で、今回はこの辺で。

感想、アドバイスなどを心待ちにしております。

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第二：金色の氷　ｐａｒｔ２

数分かけて着いたのは、高等部二年生校舎の裏にある非常に大きなホール。　見た目の形的にはよくある体育館に近い。
中に入ると、そこはやはり広い空間だった。　高さはおよそ８～１０メートル。　横と縦はそれぞれ３０メートルと４０メートルといった所だろうか。　そしてこの建物の中央に広く、まるでコロシアムのように、ギャラリーのおよそ３メートル位下の横２０メートル、縦３０メートル程度の空間に、生徒が二人居る。
二人のうち一人は、おそらく高等部の男子生徒だ。　この学園は私服製なので、判断し辛いが、とりあえず顔と雰囲気でそう判断した。　体中傷だらけで、そうとう辛そうな表情をして肩で息をしている。
そんな生徒を見下すように見ているもう一人の生徒は、

「あいつ……」

葉月はもう一人の生徒に見覚えがあった。　入学式の時に目が合った金髪の生徒だ。　忘れるわけが無い。　というよりも、頭が忘れてくれない。
絶対零度を感じさせる氷のような青白い左目と、彼の金髪に隠れた右目。　始業式の時と同じ、今すぐバイクにでも乗るような格好。
そいつが、肩で息をしている相手に向かって、完全に見下したような目をしながら口を開いた。

「弱いな……。　つまらない……」

まるで機械のように中身が欠けた口調でそう言うと、いきなり金髪の少年の姿が消えた。　誰もがそう思った瞬間、上級生の後ろに風が唸り、同時に金髪の少年が姿を現す。

「「「「っ！！！？」」」」

闘技場の内にいる全員が彼に気付いた時、上級生は何も出来ずに彼に蹴り飛ばされていた。　上級生の体が鈍い音を立て、サッカーボールのように飛びながら、二回バウンドして壁に当たる。

『強化魔法』だと、葉月は推測した。　強化魔法というのは、大気中の元素を対象にせず、自分の体の元素を操る魔法のことだ。体の元素の位置や構造を組み変えることで、ものによっては通常の人間の倍以上に身体能力を上げることが出来る。

普通は中等部一年の最後のほうでちょっと腕力が上がるだけのやつを習うのだが、彼は自己流で習得したらしい。　かなりの才能の持ち主だと葉月は思った。　彼から感じられる魔力の強さは葉月と同じＬＥＶＥＬ３（コモン）といったところか。　入学したての一年ならこれだけでも相当なものだ。

逆に、あの上級生から感じ取れる魔力はおそらくＬＥＶＥＬ４か５位。　いくら彼がすごくてもこのＬＥＶＥＬの差と経験は埋められない。　それが普通なのだが、どう見たって今は金髪の少年の方が優勢だ。

上級生が呻き声を上げながらゆっくりと立ち上がる。　身体のダメージが大きいのか、疲労が溜まっているのかは解らないが、肩で息をしている。　立っているのも辛そうだ。

「ふざけんなよ……俺が、入学したばっかりの一年坊なんかに負けられるかよ！！」

彼がそう咆哮し、両掌を金髪の少年に向ける。

「風よ靡け。　姿は刃。　数は八。　前方を切り裂け」

すると、辺りの風が上級生に集中し、彼の両腕に肉眼で感知できるほどのそれが纏った。

「おい、一年。　バラバラになりたくなけりゃ降参しな」

上級生が嫌らしい表情をして金髪の少年に言い放った。　なんともまぁ、三下の言うようなセリフを吐けたなと、葉月は思った。言ったらなんかこちらまで敵視されそうなので口にはしないが。

金髪の少年も葉月と同じことを思ったのか、小さくため息をついた。　諦めるとか、降参する気は無さそうだ。上級生は彼の心境を読み取ったのか、眉間に皺が寄っている。

「我が脚よ駆けろ。　速度は疾風（はやて）。　我に降りかかる難から逃れろ」

金髪の少年は歌うように、だが速く口を動かした。　同時に上級生が風を纏った両腕を自分の体の前で交差させる。

「残念だよ一年坊！　バラバラになりやがれ！」

上級生がまるでセーフをコールする野球の審判の様に両腕を振った。　同時に彼からものすごい突風が放たれ、それが、空間や床や引き裂いていく。

愛海はワザとらしい悲鳴を上げて、しがみついてきた。　葉月はこれを無視し、ずっと下を眺め続けている。

しかし、風の濃度が強すぎるせいで、彼の姿を見ることは出来なかった。　何となく腹が立ち、小さく舌打ちをする。

（ま、たぶん当たってすらいないね）

そう適当に予想してから数秒経ってやっと風が収まった時、闘技場内はボロボロだった。　上級生の前方の壁や床に巨大な怪物が鋭い爪で引っ掻き回したような痕が付き、荒地のような状態になっていた。

ギャラリーの方は魔法で作られた特別な防壁があるので、下から来る攻撃は当たらないが、金髪の少年は無事ではないだろう。

そう思ったのは葉月以外の観客達だけ。

（いた……！）

他の観客達よりも早く、金髪の少年の姿を葉月の赤い目は捉えた。

葉月の予想通り彼は無傷で、いまは上級生の真後ろにいる。　おそらく、さっきの唱えた術も、『強化魔法』だったのだろう。

上級生が彼の気配を感じたのか、後ろを振り返るが、それと同時に彼は金髪の少年に顎を思いっきり蹴り上げられる。　体が本人の身長くらいまで浮いた。

そしてそれを追う様に跳んだ彼から顔面に回し蹴りまともにくらい、聞くのが嫌になるくらい鈍い音を立てて、悲鳴すら上げずに、まるで水面に向かって投げた小石のように三、四回バウンドした後、数メートル転げまわった。

転がるスピードが次第に遅くなり、最終的には仰向けになって止まる。　そのときの上級生の顔は、右頬がへこみ、目は焦点があってなかった。　どうやら完全に気絶したみたいだ。

「勝負あり……」

葉月がそう呟いた直後、ギャラリー内の観客から歓声が上がった。

金髪の少年はその歓声に興味が沸かないのか、気絶している上級

生を無視して踵を返し、上り階段のある入場へ口向かっていった。
彼がギャラリーに姿を現すと、皆が彼に駆け寄って「すごいね」とか、「天才だよ君」とか言っていたが、それら全てを無視して、葉月の前へ歩み寄ってきた。
愛海が警戒したような顔をしながら葉月の肩を掴んで後ろに回った。　もしかしたら、彼を恐れているのだろうか。　無理もない。
葉月ですら似たようなものを感じていたのだから。
葉月はそんな愛海を落ち着かせるように、一度だけ肩に置かれた愛海の手を優しくそっと撫でた。　すると愛海の手は葉月の肩からゆっくりと離れていった。
後ろにいるので彼女の顔を見る事はできないが、きっと安心したような表情をしているのだろう。　葉月は金髪の少年を見つめ直す。
昨日と状況は違うが、彼の氷の目（プリズムアイ）と葉月の鮮血の目（ブラッドアイ）から発せられる「何か」が交じり合う錯覚を感じる。
不思議な感じがした。　昨日と違って。　コレといった恐怖を感じない。　恐怖ではなく、こんな物が存在するのかという、驚愕だった。
それでもやはり、葉月はそれを表情には出さなかった。　そんな葉月を見て金髪の少年は口を開く。

「……お前、名前は？」
「……篠原、葉月」

いきなり言われたので内心慌てたが、表面では落ち着いて答えた。

「ＬＥＶＥＬ３位（コモン）か？」
「一応校長からはそう言われた」
「……」
「……」

ものの見事に会話終了。
まぁ、元々話しがしたかった訳じゃないから別に良いが、こうなると何か空気が重い。　そう感じていると、金髪の少年がポケットからメモとシャーペンを取り出し、何かを書き始めた。
数秒後、書いたそれを葉月に差し出してきた。　受け取って見てみると、それにはアルファベットと数字の羅列が書かれてあった。

（……これって……）

少し間をおいて考えてみたが、やっぱりメルアドだ。　どうしてコイツが自分なんかにこんな物をよこすのだろうか。　ていうか、持っているのか？　いやそれ以前に、話す相手がいるのか？
そういうことを思っていたら、いつの間にか彼は背中を向けて出口へ向かって歩いしまっていた。

「あ……」

彼が出て行くまでを見送ると、葉月はあることに気付いた。

「名前聞きそびれた……」

我ながら随分と情けないと感じ、葉月はため息をはいて頭を掻く。
そんな葉月の様子を見た愛海は、何故か不機嫌そうな顔をしていた。

第二：金色の氷　ｐａｒｔ２（後書き）

ども～（特に意味はありません。　ただの親近感を持たせるための挨拶です）。　ちょっとお遅れちゃいました。　ていうか、元々遅いのですが。
色々とアイディアは浮かんでいるんですけど、表現方法って難しいんですよね～。
んで、昨日最終話辺りまでを見つめなおした結果、「……どうしよう……」みたいなことになってしまいました。
最後まで付き合っていただけるかた（いるかどうかはこのさい投げ捨てて）これからもヨロシクです！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第二：金色の氷　ｐａｒｔ３

葉月は愛海と共に寮に戻った後、すぐさまリビングのソファに体を預け、金髪の少年に貰った紙をロングコートのポケットから出し、それを何秒間か睨みながら考えていた。

（なんて送ればいいんだろう……）

「こんにちわ」なんて送るのはどう考えてもおかしいし、ひどく坦々とした彼の性格を考えると、返事はこないと思った。

「好きなものは何？」なんて送ったら。　「別に」という曖昧にも程がある答えが返ってきそうだ。　「友達になろう」って言うのは何となく嫌だし、義理もない。

「好きです」って言うのは論外ことこの上ない。　後ろの二つはまず思ってすらいない。　ではどうするかと自分らしくないことを本気で考えてみる。

そもそも他人との会話すらあまり慣れていない彼は、一言（ワンワード）で済ますことがいけないことに、まったく気付いていない。

そんな風に悩んでいる葉月を、愛海がジトーっとした目で見ていた。　ああ、不機嫌だよこの人と適当に解釈する。　そういえば闘技場にいたときもこんな顔をしていた。

「なにその顔、ブスになってるよ」

「女の子に向かってそういう言葉は禁句！」

愛海は自分が今まで座席として使っていた座布団を思いっきり投げてきた。　およそ１２０ｋは出していたであろうそれは、しかし、葉月の左手によっていとも簡単に受け止められる。

「ハイハイ……。　それで、どうしたの？」

座布団を適当なところへ放り投げてから言うとそう言うと何故か愛海は口ごもり、モジモジしながら俯いた。

本当になんなんだうと、葉月はイライラするが、とりあえず、待ってみる。　数十秒立ってやっと愛海の口が動いた。

「えっと、葉月は……えっと……その……」

「？」

「……さっきの子が気になるの？」

「……」

葉月は返答に困った。　正直、気にならないといえば嘘になる。あの少年の存在は葉月に恐怖という感覚を思い出させたのだから。愛海は怯えながら葉月を上目遣いで見つめている。　もしかしたら、あの少年のことが気になるのは愛海の方なのではないのだろうか？

あの時、愛海は怯えていた。　猛禽類ににらまれた小動物、蛇に睨まれた蛙という感覚以上に、葉月と同様、信じがたいものを見てしまった子供のようだった。

愛海が一瞬だけ顔を上げてこちらを見た。　しかし、一瞬だけ驚いた顔をしてすぐに俯いてしまう。　葉月は、いつの間にか自分が彼女を睨んでいたことに気付いた。

葉月はゆっくりと眉間の力を抜き、何か言いたそうな愛海の顔をじっと見る。　愛海は俯きながら上目遣いで葉月を見て、指をモジモジと絡ませている。

「あのさ、どうしたの？」

愛海は、ひゃうっと変な悲鳴を出しながらは肩を震わせ、自分の頬を真っ赤に染めた。　何かやり辛い……。

「あ、あ、あ、あの……私でよければ、メール作ってあげようか？」

「は？」

愛海の言葉は嬉しいが、少し不安だった。

（相手は男だぞ？　……あんまり当てに出来ないけど……）

しかし、自分がやろうとしても、どうしようかが解らないので、とりあえず愛海に携帯を渡してみた。　随分と嬉しそうな顔をして受け取った愛海がやたらと楽しそうにメールの文章をうっている。

何故だろう。　こいつのこういう顔を見ていると、なんだかすこしだけ、本当に少しだけだけど、心が落ち着く。

「できたよ」

「え？　あ、うん……」

何故か少しだけ戸惑ってしまったのを、葉月は頭の中で後悔しながら携帯を受けとった。　表情が緩んでいなかったか、しょうもない心配もしてしまう。

愛海に作ったメールの文章は『名前なんていうの？　さっき聞けなかったから、教えてくれない？　こんなこと言うのは嫌だけど、とりあえずよろしく』とかいてあった。

意外とまともに、おまけにどことなく自分らしく作られたメールの文章を見て、葉月は失礼ながらも呆気にとられる。

「ど、どうも……」

「ううん、いいの。　私がやりたかっただけだから」

何故かまた頬を紅潮させる愛海を見て、葉月は妙な気分になった。
何故コイツは自分のことを思ってくれるのだろう？
拒絶したこともあったし、大嫌いと思いっきり言い聞かせたこともあったのに、愛海はそれら全てを受け止め、ごめんねと自分から謝り、葉月の機嫌を取り戻す。
正直、自分に対してそんなことができる奴は、自分の知っている中ではコイツしかいない。　ていうか、そんな変わり者、コイツ以外いるわけ無い。
そんな優しい心を持っている奴は、自分の知っている中では愛海しかいない。　本当に何でだろう。　ほっといてくれていても、別に傷付かないのに。
そう思うと、余計に解らなくなった。　意図は読める。　自分に喜んで欲しいのだろうと。　でも何のために？　そんなことをして何の得になるのだろうか。　本当に解らなかった。
でも……少しだけ、少しだけだけど、嬉しかった。

「愛海……」
「なに？」

名前を呼ぶのと同時に少しだけ自分の顔の筋肉が緩んでいたのがわかると、一回だけ咳払いをし、表情を整えてから愛海を見た。
少しだけ熱くなった頬が、緊張してぎこちない表情をしていると、知らせている。　口を開いた瞬間をが泳いでしまった事はもうどうしようもない。　なんだか、顔を合わせることが難しく感じる。

「……ありがとう」

愛海は葉月の珍しい謝礼を聞くと同時に表情をぱあっと明るくし、「うん！」と言って勢いよく抱きついてきた。

自分の首下辺りに、妙にやわらかい物が当たり、さらに頬に頬ずりしてきたので拒絶反応が出かけたが、まぁ今くらいは良いだろうと思い、ソファに体を預けたまま、体の力を抜いて天井を見上げた。
そして、誰にも悟られないように、小さく笑った。

愛海が作ったメールを送ってから約一時間がたった。　右手首の腕時計を見てみると、針は7時半を指していた。
返事は未だになし。　葉月に夕食を作らせ、その7割強を食べた愛海は現在入浴中だ。
やっぱり、よろしくってつけたのがいけなかったのだろうか。
それとも名前を聞くことがまずかったのだろうか。
そんなことを少し真剣に考えていると、不意に葉月の携帯が優しい音色の着信音を鳴らした。
急いで携帯の画面を見てみるとメールが一件。　チェックしてみると、やはりあの金髪の少年からだった。

「……」

驚きのあまり言葉も出ず、固唾を呑み、何故か浮き出た額の汗を軽く拭う。　携帯の決定ボタンを押し、内容を確認してみた。

「……何だよコレは……」

メールの内容を見た瞬間。　葉月の全身の力が抜け、ソファの上を力なく滑り落ちた。
内容はあまりにも単純、というより飾り気がなかった。　メールの文章には『光崎神無（みつざきかんな）』としか書かれてなかった。
おそらくそれがあの金髪の少年の名前なのだろう。　葉月は小首

を捻ってしばらくそのメールを凝視した。　何十秒か経ち、

「ま、名前だけでもわかっただけ大漁か……」

おそらく、これ以上メール送っても返事は返ってこないだろうと、葉月は悟った。

「そっか……『光崎神無（みつざきかんな）』か……」

そう呟いてから、携帯電話を閉じ、今はもう着ていない窓際のハンガーにかけてあるロングコートのポケットの中に入れた。

一度だけ窓の向こうに写る少し曇った夜空を見たとき、体の力が抜け、フラッと体が揺れた。　眠い……。　部屋に戻って寝よう。

（アイツはいったいなんなんだろう。　今になっても、不思議な感覚が残っている……）

それは、恐怖でも驚愕でもない。　そうは解っているけど、答えが出せないそんな感覚。

おそらく、意識しなくても脳裏に焼きついた彼の姿はこれからずっと忘れることはないだろう。　それぐらい、葉月（じぶん）にとって意味のある存在だと思うから。

第二：金色の氷　ｐａｒｔ３（後書き）

はい、望くんです！　ええ、大変遅れてしまいました。　高校生はね色々とね大変なの。　なんて言い訳はしません！　本当にごめんなさい！　色々と考えていたら結構難しかったり、矛盾点が出ちゃったりで、もう大変！小説の難しさを実感したつい最近。

えっと、やっぱりまだまだこういうのは慣れていない俺。　できれば出よいので、感想やアドバイスをよろしくお願いします！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
→ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ１

２０６７年４月２０日。　そろそろこの学校にも溶け込めるようになった生徒が増えたこの頃、中学一年校舎の廊下をずかずかと歩く生徒がいた。

名前は斐川泰斗（ひかわたいと）。　まるで猫の様にギラついた黄色い瞳をさらにギラつかせ、それにふさわしく思わせるがごとく青緑色に染めた髪を邪魔にならない程度にバッサリと切っている。

（許せない……！）

彼は今そう思っていた。　斐川は始業式のときに、『あの』校長から『ＣＨＡＳＥＲ（追いかける者）』という魔法名を貰い、同時にＬＥＶＥＬ１（さいじゃく）というレッテルを貼られた。

別に屈辱的ではなかった。　そんなの中学生の半分以上がそうなのだし、上のものに対しては今まで通り、『努力』で勝ち取れば良い。

しかし、あれらは納得いかなかった。　突然現れた魔神に対して怖がりもせず立ち向かって見事討ち勝った青紫色の髪をした少年。

上級生に対して一歩も退かないどころか、無傷で圧勝して喝采を浴びた、左目を隠した金色の髪の少年。

どちらも、歴代の入学生を通しても、例の少ないＬＥＶＥＬ３（てんさい）だという。　今ではさまざまな所から『将来を期待された新人』とも言われている。　なお許せない！

斐川は幼少時代から努力家だった。　その目的は、成果を上げた自分に対する周りからの喝采のためではなく、大した努力もしないで成果を挙げられる、『天才』を追い越すためだった。

努力無しで上手く行くと思っているなら大間違いだと言い聞かせ

てやりたかったから。　だから精一杯努力して、そいつらに挑んでみた。　成果は出た。　勉強もスポーツも、周りの奴らと比べれば遥かに出来るようになっていた。　でも、それで止まっていた。

斐川（じょうじん）にとって、天才という存在はあまりにも遠すぎたのだ。　どれだけ努力しても、どれだけ頑張っても、どれだけ苦しんでも、天才には追い越すどころか、近づくことさえ出来なかった。

でも、いつかは努力は報われるのだと信じていた。　今もそうだ。

努力は天才を負かすと、自信と確信を持っていた。

しかし今回に関してはそうできる自信が持てなかった。　魔法は勉強やスポーツとはわけが違う。　そういうのとは違って、根本的な才能一つでで全てが分かれる。　知ってた。　そんなの入学する前から知ってた。　自分は魔法でも才能は無いだろうと最初から確信していた。　だけど、

（嫌だ！　これからも天才に負けるなんて、絶対に嫌だ！）

階段を上り、数メートル右を歩いたところに、斐川は自分が着たかった場所があった。

１年Ｃ組。　天才の片翼のいる教室。　もう決めていた。　コレで自分のこの学校でのこれからが決まるんだ！

現在時刻１２時４８分。　少年、篠原葉月は本当にぐったりと机に突っ伏していた。　現在の彼の体温は３７度６分。　微熱で片付けるには少し高い。

本当なら今日の今頃は布団でぐっすりと寝ていたはずなのだが、愛海が「一緒に行かないとこれからの家事、全部やらせるよ！」とかなんかメチャクチャな事を言ってきたので９９％強制的に、教室（ここ）に来てしまった。

まぁ、でも今は昼休み。　後残りに時間を適当に過せば、本当に休める。　正直、机に突っ伏したまま5時位までいようかと考えている。　というよりもまず保健室に行けばいいのにと誰もが考えるのだが、不運にも、自分の隣の席に座っている愛海がそれを許さない。

（こいつの将来は社員をいびる女部長とかだ……）

勝手に自分の姉の将来を予想したところで、なんだか頭痛まで追加されてきた。

（いっそ寝ようか……）

何となく少し眠くなってきた。　そうだ、このまま寝てしまえばいい。　もういっそ毒を盛られて死んだ時みたいに。　まぁ経験したことは無いが。

しかし、葉月がそんな考えを持ったとき、教室のスライド式のドアがズバンと妙に良い音を出しながら開けられた。　葉月はその音に反応して飛び上がるように体を起こしてしまう。

ドアを開けた張本人は、青緑色の髪をした少年だった。　なんでかは知らないが、大変ご立腹なご様子だ。　そして、何故か彼のギラついたその目線の延長は、明らかに葉月へ届いている。　え、なんで？

少年がづかづかとこちらに向かってくる。　最終的に自分の席の前まで来た。　やっぱり彼のお目当ては自分のようだ。

「篠原葉月、放課後闘技場に来い。　君と一度手合わせ願いたいんでね」

瞬間。　葉月は水が瞬時に氷になったようにピキリと時間が止ま

ったかと思った。　今自分は何と言われた？
数秒経って、自分が目の前のこいつに勝負を仕掛けられたのだと気付き、躊躇無くためらい無く遠慮無しに、葉月が「ゴメン無理」と言おうとした瞬間、教室内がざわめき始めた。

「え？　誰あの子？　天才君と勝負だって！」
「凄いことだ！　絶対見に行こう！」

葉月は騒ぎ出す教室内を見回した。　勝手なことを言ってくれる。
こっちは熱で今にも倒れそうなのに。　ていうか隣で一番はしゃいでいる愛海を一発シバきたい。
それにまず、このまま誘い通りに行ったとしても、集中力が必要である魔法はうまくは扱えないと思う。　簡単に言えば、行きたくない。　うん、ホントに。

「あのさぁ、悪いんだけど」
「ＮＯという返事は聞かないよ。　天才君がこんなＬＥＶＥＬ１相手に逃げるなんて、誰も許さないだろうしね」

たしかに、そんな感じはする。　今葉月が「熱があるからゴメン無理」と言ったとして、この状況で誰が了承するだろう。　まぁ、簡単に言えば、逃げられないのだ。　酷い物だ。　違う言い方をすれば、皆が皆、葉月を休ませてはくれないという事なのだから。
葉月はその優れた脳をフル回転して色々と回避法を考えてみたが、最終的には心の中で大きく深くため息をついた。　つまり、諦めた。
結構あっさり。

「……放課後ね……。　いいよ、解った」

目の前の少年は待っていましたといわんばかりに、あまり上品と

はいえない笑みを見せる。

「ふ……。　じゃあ、楽しみにしているよ……」

少年は踵を返し、クスクスと笑いながらまだざわめいている教室を出て行った。

彼の去っていく後姿を見て、葉月はふと思う。

（なんであいつ、『僕を怨んでいる様な目で見ていたんだ？』）

彼の表情と目の色を思い出してみる。　彼の目は一度も笑っていなかった。　彼のあの笑みは何かを企んでいる様なではなく、何かを決めような笑みだった。　心の底から。

よく解らない。　この感覚はあの光崎神無を初めて見た時と似ているかもしれない。

そんなことを考えていたら午後の授業のチャイムが鳴ってしまった。　次の教科は……あぁ、体育だ。　見学にはなるが、体を休めることは出来ない。

なんで自分はこういう結果になってしまうのかと、葉月はため息をついた。

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ１（後書き）

第三話に突入です！　遅い？　でもこれが精一杯の速さなんです（泣）。
「ガンバレ俺！」と言いたいところだけど、そんなんで頑張れる人間って現実にどの位いるんでしょうかね？
俺的な推理の中では一人もいないと思います。
でもまぁ、俺は頑張りますよ。　諦めたくないですしね！
では、アドバイスや感想、または評価など、お待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ２

放課後、葉月は目の前の光景にため息をついた。　これで人生何回目の溜め息だろう。　さらに言えば何回幸せを失っているのだろう。　今現在葉月は言われたとおりに闘技場に来たわけであるのだが、何だこれは。

約１０ｍ位の前方に、葉月に勝負を申し込んだ少年はニヤニヤと笑いながらこっちを見ている。　あんなのは無視をすれば気に留めることはない。

（だけど……『あれ』はなんだよ？）

葉月は視線だけをギャラリーへと向ける。　そこには、何かのイベントを見に来たようにびっしりと人で詰まった観客ども。

それと、無駄に元気よく応援している姉が一名。　ウザイと思い、葉月はもう一度深く溜め息をついてから、半目であの少年を睨む。

「なにあれ。　アンタあんなに客集めたわけ？」

「おいおい睨むなよ怖いな～。　それに、集めたんじゃなくて集まったんだ。　自然的にな」

「まぁ、いいけど。　予想通りって顔してるね」

「そりゃそうだ。　なんせ君が俺相手と決闘なんて、あのギャラリーにいる人間達にとってはかなり見物らしいからな」

そんなものなのだろうか。　ふと葉月は考えてみる。正直葉月は自分のことを天才とは思っていない。　まぁ、他に一年生でＬＥＶＥＬ３などいないのだから、多少の才能はあるのだろうとは思っているが。

しかし、目の前の少年と自分に何の差があるのだろうか？　そもそもＬＥＶＥＬが高いといっても、それはあくまで『魔力が高い＝その日休まずに使える魔法の回数が多い』だけなのだ。
魔力の使い方が下手なら、たとえ葉月のようなＬＥＶＥＬ３でもＬＥＶＥＬ１の魔法を１０発前後発動すれば倒れてしまうし、逆に魔力の使い方が上手ければ、目の前の少年のようなＬＥＶＥＬ１が同レベルの魔法を１０発以上発動しても、何ら問題はない。
つまりはそういうこと。　しょせんアイツは自分より少しでも才能がある奴を許せない、学校の勉強が出来なくてグレてしまう不良生徒のような奴なのだ。
すぐに終わらせようと、心で呟く。　こんな奴とかかわるのは一分一秒すら勿体無い気がする。

『互いに、名を我が声に乗せてください』

葉月の脳内に女性の声が響く。　魔術的通信法。　もう慣れたが、あまり良い気分にはなれないものだ。　はっきり言って煩い。
一度軽く深呼吸すると、葉月は自分の名前と魔法名を思い浮かべる。　『ＴＥＭＰＥＳＴＥＲ』。　意味は騒がせる者。

（名は篠原葉月。　魔法名は『ＴＥＭＰＥＳＴＥＲ』）

これを魔術的通信法の魔力に乗せる。　一時置いて彼の名が脳に浮び上がる『斐川泰斗（ひかわたいと）』。　それが彼の名前。　そして直後、再び自分の脳内に彼の『名前』が浮かんだ『Ｃ』、『Ｈ』、『Ａ』、『Ｓ』、『Ｅ』、『Ｒ』。
合わせてＣＨＡＳＥＲ。　それが彼の魔法名。　直訳すると、意味は追いかける者。　皮肉な名前だと葉月は思った。　この言葉はどういう思いを込めて与えられた名前なのだろうか。
しかし、決闘の時間はそれを考える時間を与えてはくれなかった。

魔術的通信法により葉月の脳内に女性の声が響く。

『それでは、これより魔術での決闘を行います。　開始』

「さぁ、楽しもうか、『ＴＥＭＰＥＳＴＥＲ』！！！」

火蓋が切って落とされたと同時に斐川が笑うように吼え、ものすごい速さでに走り出してくる。　およそ１０ｍ程あったはずの距離を葉月が身構える前に詰められ、繰り出されたのは左フック。　単純ではあるが当たればモチロン大きな隙が出来る。

葉月はほぼ反射的に身を屈めて避けたが、そうした矢先、胸部に彼の膝が豪打した。　中学生一年生の力なので骨折することはないが、肋骨がギシギシと響き、息が詰まる。　葉月がよろめいたその隙を狙って、斐川は葉月のこめかみ思いっきり蹴り飛ばした。

葉月の体がまんま蹴られたサッカーボールのように飛び、何回かバウンドしてやっと止まる。　これまでの時間は僅か7秒。

あまりにもの早業の連発に、観客のざわめきも消える。　ざわめきが消えるのとほぼ同時に葉月は蹴られて腫れたこめかみを押さえながら立ち上がった。

（なんだよアイツ……化け物かよ……）

単純にそう思った。　これまでの動きと葉月を蹴った時の力。中学生の力とは思えないほどのものだったが、魔術による肉体改造をした魔力も感じられなかった。

つまり、先ほどまでの動きは全て彼が素でやっていた事になる。

魔術での決闘とは言っているが、当たり前のように肉弾戦で勝負を挑んでくる奴もいるのだ。

それに関しては二者に分かれる。　前者はあの神無のように魔術による一時的な肉体改造を施して、人間ではありえない動きで格闘する人間。　後者はこの斐川のように、魔術の才能が乏しいので体

術でカバーする人間。　魔術の決闘で肉弾戦を好む物は7割ほどが後者だ。
しかし、そういう場合の人間は並大抵の努力をしていない。　それは今自分を満足げに眺めているアイツも同じなのだろう。　でなければ同学年の葉月を圧倒することなど出来ない。
篠原葉月は喧嘩が弱いわけではなかった。　一対一ならほとんど勝てるし、二対一でも負けることはない。　そのくらいの実力は持っていた。
葉月は心の中で前言撤回した。　斐川は自分に才能がないのが理由でひねくれていたのではない。　自分に才能がないのを自覚し、それでも才能がある奴に負けないようにと努力をし、しかし、儚い夢であったかのように負けていった。　そういう人間なのだろう。

（くそ……）

葉月は全身に力を込めて立ち上がった。　そして、まっすぐに少年の顔を顔を見る。　そして、疑問と共に驚いてしまった。

（……なんで……『悲しい顔してるんだ』……？）

視界に映る緑髪の少年の顔は笑顔一色に染まっている。　だが葉月には解る。　解ってしまう。　それは自信の虚空を表しているのだと。　おそらく今彼は満たされているのだろう。　自分を叩けのめせている事に。　だけど、今彼の心を満たされるのはあくまで優越感。
金持ちが駅周辺で横たわっているホームレスを見下すような醜い感情。　そんなものでは彼の心を本当に満たすことは出来ない。
満たせるわけがない。
おそらく彼が本当に求めているのは。　可能性。　努力すれば栄光を掴められるという、道理の様な絶対とは違う、可能性。

最初からそれを探していたのだろう。　だからこそ、彼は葉月に勝負を挑んできた。　だったら、そんな彼に対して葉月が出来ることは

（全身全霊でアイツの可能性に応えること！）

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ２（後書き）

お久しぶりです！　試験中だったので続きが書けず、こんなに遅れてしまいました。　申し訳ございません（そもそも、待っていたかたがいたのかどうかはこの際捨てておきます）
今回とうとう魔法でのバトルが始まったということでバトルの描写という物の難しさを実感しました。
本当に難しいです。　ただせさえ下手なのにさらに下手に見えてしょうがないです（笑泣

さて、ではでは、今回はこの辺で、アドバイスやご感想をお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ３

「ほら、まだ休むなよぉ！」

斐川が再び矢の様な速さで走ってくる。　しかし葉月は全身の力を抜きに抜いた。　そして、重心をやや前にし、左拳を腰に添え、右拳を相手に向ける。

そして右足は前を向き、左脚の爪先はその７０度左方に向ける。

これが葉月が自分で考えた独自の構え（まぁ、実際は独自ではなく、親が趣味で教えた空手の構えなのだが）だ。

斐川との距離は約５ｍ。　今も接近中。

（よし、いける！）

全速力で走ってきた斐川が肉薄してきた。　同時に、葉月と斐川は互いの拳と拳を互いの顔面に打ち付けた。

しかし、葉月は顔面に食い込む拳の衝動を利用してそのまま体を捻らせ、斐川の顔にめり込ませた拳を引き戻しながら、回し蹴りでカウンターを狙う。

それに対し斐川は恐ろしい反応速度で体を沈ませ、葉月の蹴りを避ける。　大きく隙が出来てしまった葉月は、斐川が何か仕掛けてくる前に、軸足の左足だけで床をけって距離をとる。

しかし、それだけでは斐川にとって問題になるほどの距離はとれず、本当に一瞬で距離を詰められた。

（引っかかった！）

葉月はこれを待っていた。　軸足だった左足が着地すると同時に

力を込め、そのまま全体重を前に載せる。　アンバランスな状態でも、肉薄している相手に一気に突っ込めば問題ない。
そう。　葉月がやりたかったのは渾身のショルダータックル。
結果的にほぼゼロ距離になったうえ、すで殴りかかる動作に入ろうとしていた斐川はかわすことができずにまともにそれを喰らってしまう。、
おまけにあちらから全速力で肉薄してきたので、自分から後ろへ跳んで衝撃を和らげることも出来ず、互いの力が交わり、それが全て斐川の体に響いた。

「ぐ……あぁ……」

脚が床に着地したのを確認すると、左の拳を岩の様に硬く握り締め、後ろへ大きくよろめいた斐川の顔面を狙い、それを解き放つ。
瞬間。　パンッ！と拳の音とは思えないような乾いた音が葉月の耳に届いた。　斐川が葉月の拳を寸でで捕らえたのだ。

「惜しかったね」

斐川が葉月の拳を掴んだまま力を入れて、葉月を前へと押していく。

「やっぱり甘いね、君。　思いっきり殴りかかってきたけど、あまり力ないのに思いっきりやったって意味ないよ？　拳の使い方ってのはこうするんだよ！」

言うと同時に、斐川はがら空きの葉月の腹部へ左の拳を叩きつけた。

「ぐっ……！」

その衝撃で葉月は後ろへよろめき、その隙を狙って斐川は連続で葉月の体に拳を叩きつけた。
腹へ胸へ肩へ腰へ顔へ腕へ。　その全てが葉月の体へと吸い込まれるようにヒットする。

「ホラホラホラ！！！！　さっさと反撃しなよ！　天才なんだろ？　凡人を見下せるんだろ！？　だったらお前の力を見せろぉ！！！！」
「くそ！」

葉月は体を右にずらして飛んできた拳を回避すると同時にそれを自分の腕と絡ませる。

「捉えた！」
「なっ！」

斐川が面食らった隙をついて、彼の右手首を左手で掴む。
そのまま自身の体を中心に１８０度回転させて行うのは必殺の背負い投げ。

「うおおおおあ！！！！」

そして、地面へと叩き落とさんとばかりに姿勢を低くして上半身を前に倒す。　心の中で葉月は決まったと思った。
しかし、結果はその期待をあっさりと砕いた。　斐川が地面に叩きつけられる直前に、力を流すような受身を取り、そのまま体を捻って葉月の死角で立ち上がったのだ。

「悪いね。　期待させて」

葉月の死角から放たれた斐川の拳は、もはや止めの一撃としか言えないものだった。
葉月の体が弾かれたように飛び、地面についたときには何度も何度も床をただ転がるようにしか出来ないでいた。　転がる勢いが止まると同時に立った時は、ついに壁に背中を預けるような状態で立つのが限界だった。

（く……そ……）

少年がゆっくりと、歩み寄ってくる。　すごく余裕のある動作だった。　しかし、葉月は前へと歩むことが出来ない。　彼へ反撃するほどの力すらもう無い。
少し動いただけで骨が軋む。　少年はとうとう葉月の前まで歩み寄ると、ゆっくりと口を動かした。

「魔法に関しては天才って言われても、喧嘩は全然か。　がっかり……とは言わないけど、もうちょっと『がんばれよ』」

小さくそう言った。　聞こえづらかったけど間違いなくそう言った。　屈辱的とは違ったが、その言葉は何故か葉月の心に刺さった。
少年は続ける。

「そんな風に立ってないで、何かしてくれない？　魔術とかさぁ。つまらないだろ？　僕は君みたいなやつを叩きのめしたいんだよ。完膚なきまでにね……。　だから！」

少年は葉月の腹部を膝で思いっきり蹴る。　全身にものすごい激痛が響き渡り、吐いてしまいそうなほど息が詰まる。
ついに咳き込んで腹を抱える葉月を、少年は容赦なく、彼の胸倉を掴んだ。　そして彼に向かって吼えた。

「僕はね、才能のある人間なんて大嫌いなんだ！　精一杯努力をして来た奴らを負かして、見下していく、クズ同然といっても間違いじゃない奴らが！」

大嫌い、ほとんど虚ろになっている意識の中で、それだけは葉月の脳と心に刺さった。　その時、何故か頭の中で、ずっと昔に誰かが言っていた言葉が葉月の脳裏を横切った。

『知ってるか、葉月』

誰かの言葉だ。　もうかなり昔に聞いた、遠くてもうほとんどうろ覚えな。　だけど、忘れることはたぶん無いであろう大きい言葉。

『人間は心の底から人間を嫌いになることは出来ないんだ』

戯言としか言えない詩人のような言葉。　だけど、それは今の自分にとっても、目の前にいるこいつにとっても、可能性につながる言葉だ。　葉月は考える。

（人間が人間を嫌いになれ無いなら……斐川（こいつ）が言っていることは……）

嘘ではないだろう。　それはおそらく間違いない。

しかしそれは、本当に嫌いだという『感情』を持っているのではなく、コイツは嫌いだという『意識』が強いだけなのでは？　可能性の話だが、もしそうだとすれば、

「……お前……それ、本心じゃないだろ」

葉月は呟く様に小さく言い放った。

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ３（後書き）

どもども、望さんです！（はぁ？）だんだんボロボロになっている戦闘シーン。マジで戦闘シーン書くのは鬼難しいです！種類問わず本は色々読んでいますが、イマイチコツというのがつかめません。ほんと、どうやって書くんだろうね～？（ここでタメ語）まぁどうせ、物語を書いていくうちになれるだろう！（半分逃避）

さてさて、今日はこの辺にしてと。アドバイスやご感想をお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ４

弱く小さかったはずの言葉に突如、斐川は面食らったような表情を見せて掴んでいた葉月の胸倉を放した。　葉月は立っているのも限界だったのでその場に倒れる様に座り込むが、続ける。

「お前は才能のある奴が嫌いなんじゃない。　羨ましいだけなんじゃないのか？　自分が努力して進んで、苦しんでも追いかけて、それでも追いつけない。　そんな奴らが『羨ましかった』んじゃないのか？」

「な……？」

理解できないとでも言いたいのだろうか。　彼の表情が葉月にそう語っている。

そうだ、理解できなくても良い。　伝われば、せめて自分の思い伝われば、彼がいつかその意味を理解してくれるだろうから。

「どうなんだよ。　……間違ってはいないと思うんだけど？」

「……せぇよ……」

斐川が俯いて呟いた。　何を言ったのか全く聞えなかった葉月は首をかしげた。

しかし直後、斐川が顔を上げ、ただでさえ大きな瞳をさらに大きくして、葉月を睨んだ。　そして

「うるせぇよ！！」

吼える。

「そんなの昔から解ってたよ！！」

叫ぶ。

「そうだよ、嫌いなんかじゃない。　ただそういう風になりたかったっていう願望だよ！」

嘆く。

「何で俺はああいう風になれなかったんだって言う嫉妬だよ！　悪いかよ！！」

喚く。

少年の言ったそれらの言葉は、葉月にとって、ただのやつ当たりでしかない。　だけど仕方の無いことだった。

単に、運良く才能を手に入れた物が、運悪く才能を手に入れられなかった者から怨まれるなど、苦やしがられるなど、妬まれるなど、当然なのだ。

葉月はそれを解っている。　才能を持った者が持つ代償の重さ知っている。　だけど、彼のしていることは矛盾している。　だから、葉月は言う。

「悪いに決まってるだろ！　願望？　嫉妬？　そんなの大いに結構だ！　だけどお前はさっき、僕を叩きのめすって言った。　それって才能ある奴の才能を潰すってことじゃないのか？」

「なんだと……？」

「お前は自分に才能が無いから才能のある僕を叩きのめすらしいが……お前のやっていることは、自分と同じような人間を作ることなんだぞ！」

「……黙れよ……」

黙らない。　黙っていたら、お前は考えを改めないだろう？　そして篠原葉月は、そんなことを見過ごすような人間ではない。

「そんなの意味ないだろ！　おまえが本当にしなきゃいけないのは、そういう自分より才能があるやつと一緒に上を目指すことなんだよ！　なのにお前がやっていることの結末は、誰かに自分と同じような思いをさせる事だけなんだ！」

「黙れえええええええええええええええええええええええ！！！！」

もう自分でもどうしようもない感情を吐き出すような絶叫と共に、少年は歌いだした。

「わが脚よ駆けろ。　速度は旋風（せんぷう）。　我に刃向かうものを圧倒せよ」

それは一見、子守唄に聞える程、優しく耳に響く。　しかし、葉月にはそれが猛者達が歌う、まさに猛々しい軍歌に聞えた。

その歌に反応して彼な体内魔力が動き出す！　彼の脚の構造が変わっていくのが感覚的に見える。　間違いない。　『強化魔術』だ！

「ふっ！」

突如、斐川の姿が消えた。　そう思ったら彼は自分の右側前方にいた。　しかし、それを確認した瞬間に彼は思いっきり脚を振り上げた姿で真上へと姿を移す。　まるで、瞬間移動（テレポート）。　そういうのが相応しいこの速さ。　人間では捕らえられない！

葉月はそんな気持ちと共に思う。

（これが……こいつの努力の結晶なのか……）

斐川が空中から葉月の脳天目掛けて脚を振り下ろす。　強化魔法を受けたその脚から放たれるそれは、極刑の鎌よりも鋭くて強い！

その鎌が、罪人を罰す処刑人のごとく振り下ろされた。

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ４（後書き）

どうも！ガンダム大好きっ子の望（「のぞみ」です）君です（あれ？前言ったっけ？）！
さてさて、バトルはそろそろ後半戦に突入！　何か三話の長さが半端ないのですが、ざっと見、第一話の約２．５倍位あります（バカじゃねぇのお前？）。こんなことがありまくりなので、この先ごと不安ですが、どうぞこれからもヨロシクです！
さて、今回はこの辺で。　アドバイス、ご感想などをお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ５

「くそっ！」

寸でのところで何とか避けたが、斐川の脚が地面に当たったと同時に床が爆発したのかのようにが飛び散る。　木材でラミネートされていたコンクリの破片が葉月の体を殴った。

葉月の全身に激痛が走り、脚の力が一瞬抜けて、バランスが崩れたが、なんとか倒れずにはいられた。

（やりたくないけど……一発逆転を狙うしかない……！）

見えない、そして追えない標的には数で対応するしかない。　正直一か八かの賭けだが、やるしかない！

葉月は口を子守唄を歌うような滑らかなリズムで動かす。

「大地よ起きろ。　姿は槍。　数は二十一。　我が示す場を穿て」

葉月の詠唱が終わるのとほぼ同時にコンクリで構成された幾つもの巨大な槍がものすごい勢いで闘技場の床から生え出した。

「っはぁ！　さすが天才だなぁ！！　そうだよ、そうしてくれなきゃねぇ！！　やっとおもしろくなってきたよ！！！」

葉月はまさに驚くべき光景といえるものを見た。　斐川が地面から次々と飛び出す槍をいとも簡単に避けていく。

客観的に言えば、踊り（ダンス）のようだった。　コンクリ製の槍が飛び出すときは、斐川はもうそこにはいない。　槍が彼に躍らされている

ようにも見える。　ついに槍の本数は葉月の示した数に到達し、もう地面から槍が出ることはなくなった。　結果的に、斐川は葉月の期待を裏切ったのだ。
　顔を歪めたまま狂ったように笑う少年を葉月は奥歯を噛み締め、眉間に皺を寄せてそいつを見る。　正直、今ので終わらせるつもりだった。　今の魔法が全力だったのだ。
　普通ならＬＥＶＥＬ５（スピリット）でも辛い魔法を全力で制御して発動させたのだ。　正直ＬＥＶＥＬ１の魔法でも、もう１，２回位しか撃てないだろう。　しかもマズイことに、頭の中が妙な違和感が溢れ、体がふらついてきた。　ダメージじゃない。　熱の病状が悪化したのだ。　よりによってこんな時に！
　そんな葉月を無視するように、少年は笑いながら言う。

「終わりかい？　あっけないなぁ天才クン！！」

　彼はそれだけ言うと、再び真上へと姿を移す。　さっきと同じ様に右足を思いっきり振り上げた状態で。　そして放たれる極刑の鎌とも言える踵落し。
　先ほどは何とか避けられたが、この状態で避けられるわけがない！

（やられる……）

　そう思った。　正直、本当にそう思った。　この少年にやられる。
　この脚が自分に直撃して、自分は負ける。
　この一撃が当たったとしても、闘技場内では特別な魔法の効力があるため、死ぬことはない。　せいぜい骨折がある程度だ。　でもそんなの関係ない。　こいつに負けるのは嫌だ。　嫌だというよりも、ダメだ！
　こいつは今ここで自分に勝ったら、今の自分の考えを改めずその考えを貫き通すだろう。　それはダメだ。　目の前のものを叩き潰

して上へ行くなんて、間違っている。　自分はコイツの考えを改めさせなければならない。　コイツの考えを止めなければならない。
だから、

（今はだけはダメだ！　こいつの考えをすべて変える！）

葉月は自分の中で何かが弾けたのを感じた。　そして同時に振り下ろされる。　死神の鎌が。

「終わりだぁ！！」

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ５（後書き）

才能ｖｓ努力の戦いは最終局面へ！やっとか……。長かった……。　今度はもう少しカットしようかな？
めんどくさいわけじゃないけど、進まないし……。でも、バトルの描写はもっと上手く書けるようになりたいし……。
どうしましょうかね？（聞くな）
さて、いつもよりちょっと早いけど、今回はこの辺で。
アドバイスや感想などをお待ちしております。

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ６

瞬間。　誰もが斐川の勝利を確信しただろう。　斐川本人もそう思った。

しかし、その誰もが抱いた確信と期待を打ち砕くようなものが、斐川の目の前に立っていた。　斐川の脚を両腕を頭上で交差して受け止めた篠原葉月（しのはらはづき）が彼の前に立っていた。

葉月はそのまま斐川の脚を押しのけ、バランスを崩した斐川の体へ拳を叩き込んだ。　それだけで、たったそれだけのことで、彼の体は数メートル弾き飛んだ。

バン！！と重い音を立てて彼の体が床に着く。　それから呻き声を上げながら床を数メートル転がった。　苦しみに悶えながら吐き気を感じるようになる。

しかし、すぐに起き上がり、葉月へ突っ込む。　もちろん、バカ正直にまっすぐにただ突っ込むのではなく、魔術によって施されたその脚によるフットワークを生かしながら。

反対に、葉月は一歩も動かなかった。　そして、歌うように口を滑らかに動かす。

「我の理想を我に描け。　姿は雷神。　我に刃向かう全てのものを滅せ」

詠唱が歌い終わると、葉月の四肢に電気が発生した。　さらに、彼の背後には十個の雷球が浮かび、円を描くような陣形を取る。

正面から見ると、今の彼のその姿はまさに雷を操る神、『雷神』。

篠原葉月は命ずる。

「行け」

と。
瞬間。　葉月の背後に浮かんでいた雷球が一つ一つ様々が、前後左右上下様々な方向へ動き出した。
「？　なんだ？」
突然現れた奇妙な物体に警戒心が生まれ、斐川は雷球一つ一つに気を配りながらやはり葉月を狙う。　雷球は動き出したものの彼は一歩も動いていない。
「よく解らないけど、今度こそぉ！！」
斐川は葉月の目の前へ、一瞬で接近した。　この距離なら避けられまいと思っての行動だ。　斐川が葉月のこめかみを狙って脚を繰り出そうと足を上げる。
（捉えた！）
そう思った瞬間だった。　バシィ！！　という音と共に斐川と葉月の間に『雷』が落ちた。
「！」
いきなりの事に驚き、斐川は葉月から少しだけ距離をとる。　その隙に様々なところから斐川の回り目掛けて、雷撃が降り注ぐ。
「『操作系魔術』か！　くそっ！」
雷球はまるでそれぞれが意思を持つかのように動き回り、斐川に

鋭い雷撃の矢を放つ。　斐川は多方向から襲ってくるそれを超人的な瞬発力で避けていく。
しかし、前後左右上下様々な方向から出てくる雷撃は避けるのが精一杯で、葉月を狙うのは不可能に近くなった。
そして、

「！」

そして、彼の目の前には四肢に雷を纏い、左の拳を振りかぶった篠原葉月（らいじん）が姿を現していた。　斐川の全身に嫌に冷え切った汗が吹き出る。　それは、負けると思ってしまったから。
それと同時に斐川は篠原葉月が寂しそうに、小さく、そして速く口を動かして、自分に語っているのを見た。　そして、篠原葉月の拳（いちげき）は彼の体を捉え、斐川は例えようもないくらいの痛みと、電撃が全身に流れていくのを感じた。
全身の力が抜けて自分の体が床に倒れ、泥の中へ沈んで行くような感覚を感じる。　それと同時に少し考えた。　斐川は見たのだ。
今仁王立ちになって自分を見下ろしている篠原葉月が自分になんて言ったのかを。　その言葉に、少し笑ってしまった。

（『ゴメン』じゃねぇよ……）

斐川はそこで意識が途絶えた。　この瞬間、葉月と斐川の勝負は終止符を打たれた。

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ６（後書き）

天才ＶＳ努力、やっと終わりました。　初めてのバトル描写にはいったん別れを告げて、これからはいつもどおりの日常生活的な描写を書いていきますのでよろしくお願いします。しかしあれですね。毎回同じことを言っていますが、本当にバトルでの表現は難しいです。いろんな人の作品を見ながら色々参考にしておりますが、それでも自分的には上手くいきません。コツを知っている人がいたら是非教えて欲しいです。では、今日はこの辺で。
感想や評価、アドバイスなどを心からお待ちしております。

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ７

葉月の言った通り、この試合は天才（はづき）の初試合ということもあって、教師生徒関係なくかなりのギャラリーが集まっていた。

そして、試合の終了と同時に観客の歓声が鬱陶しく感じるくらいどっとあがり、すさまじい盛り上がりを見せていた。　学年全体がこの試合に影響されたのだ。

それは戸塚雪奈（とづかせつな）たち生徒委員会（フォースエンジェルス）も例外ではなかった。　しかし、生徒委員会（フォースエンジェルス）の中でこの試合を見に来たのは二人だけ。

仕事を下級生に押し付けてこっそりと見に来たのだ。　普通に生徒会委員失格といわれるくらいの行動だ。　まぁ、とりあえず後で始末書を書いておう。

「どうだった雪奈（せつな）？」

雪奈は隣の眼鏡をかけた黒髪の少年から呼ばれると、膝辺りまでまっすぐに伸びた雪のように白い髪を一度だけ鬱陶しそうに払って、自分の事を呼んだ少年のことを見ずに、下の決闘場とも言える場をじっと見据える。

「どうもこうも、『酷い』ものでしたね。　八百長並みでしょ」

「やっぱりそう思うかい？」

「同学年でどちらかが『覚醒種』だったら、もう決まったような物じゃないですか」

「でもまぁ、おそらくどちらとも知らなかったんだと思うよ。　『覚醒種のこと自体』」

そりゃそうだと雪奈は思う。　覚醒種なんて希少種、生徒の中でも知っているのは生徒委員会と風紀委員会、それとごく小数の生徒

しか知らない。
雪奈だって知ったのは一年前だ。　あんな一年生(ひよっこ)達が知るわけない。
「『生徒会長』はどう思います？」
そう雪奈に呼ばれた眼鏡の少年は、クスッと少し笑ってから口をあけた。
「面白かったよ、二人とも。　すっごく頑張ってた」
クスクスと指を唇に当てて笑いながら言う。
なんだそれは。　勝負なんだから頑張るのは当たり前だろうに。
雪奈がそう思っていたら、生徒会長はちょっと不気味なクスクス笑いをやめて、でもやっぱり微笑みながら
「雪奈、一つお願いして言いかい？」
「？　なんですか？」
とりあえずいい予感はしない。　警戒心を持ちながらそれを聞くことにした。
「付き合ってほしいんだ」
「そういう趣味はありませんよ」
「いやいや。　それはちょっと残念だけど、そうじゃない」
残念という部分に何となく寒気を感じたが、まぁとりあえず流そう。　元々この人はこういう人だ。　そして生徒会長は続ける。
「ちょっと行きたいところがあるんだよ。　一緒に来てくれるかな

？」
「別に良いですけど……アンタまさか……」
「あはは。　雪奈は気付くの早いね～♪　でも、口に出すなよ？　当たっているかどうかの答え合わせはこれからだ」

それだけ言うと生徒会長は闘技場から出ようと足を動かせる。
その一歩後ろの位置を保とうと、雪奈も歩き出す。
今更どうでも言いことだが、生徒会長は最初から最後まで随分と楽しそうな顔をしていた。　おそらく、あの一年生にたいして。
そんなにあの新入生が気に入ったのか？　あんな『小さな才能しか持たない』新入生(こわっぱ)が。
気に入らない。　生徒会長はこの際どうでも良いが、才能のある奴というのはどうも気にくわない。

（いつか、遊んでやるか……）

そう企んで、少し不適に笑ってみる。
笑った人物の名は戸塚雪奈(とづかせつな)。　それは、『ＦＲＥＥＺＥＲ（凍て付かせる者）』という魔法名を持ち、高校一年にして、生徒会副会長。
そして、歴代の如月学園の生徒の中で最高のイレギュラーの『ＬＥＶＥＬ７』(ばけもの)である男の名だ。

名前：戸塚雪奈(とづかせつな)
年齢：１５（１２月１５日生まれ）
性別：男

学年：高等部第一学年
身長：１７０．３ｃｍ
体重：６２．９ｋｇ
性格：個人主義でミステリアス。　葉月以上に素っ気無く、口調もひどく坦々としている。
特徴：真っ白の長髪に蒼い瞳。血の気を感じさせない白い肌。　何故か少し悲しげに見える中性的な整った顔立ち。
　灰色のタンクトップの上にフードつきの白パーカーとダボダボなヴィンテージのジーンズ。
ＬＥＶＥＬが高いので詠唱を必要としないが、タイミングを調整するために魔法を発動する直前に、指を鳴らす（指パッチン）。
魔法名：ＦＲＥＥＺＥＲ（凍て付かせる者）
備考：体温が以上に低い（平均体温３４．８度）。読書が趣味でよく一人で読んでいる。
　生徒委員会（フォースエンジェルス）の副会長であり、如月学園史上最高の強さを誇る。様々な生徒から挑戦を申し込まれるが、大抵無傷で圧勝する。

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ７（後書き）

如月学園内の最強の魔法使い登場！　たしかこんな展開が電撃文庫の作品であった気ｇ（言うな）。前回も言った通り、バトルは終わり、同時に次の投稿で第三話は終了です。　長かった……。ちなみに今回出てきた雪奈君は僕の書いたもう一つの作品の主人公です。

そのお話がこの作品内の中で影響するかは今のところ未定です。

まぁ、多分します。

さてさて、今回はこの辺で。感想、評価、アドバイスなどをお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。

ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください

↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ８

葉月は妙な疲労感と共に重いまぶたを開けると、葉月は今まで自分が寝ていたのだということに気付いた。
背中が触れている病院とかに支給される硬いベッド。　辺りに充満している自分の嫌いな薬のにおい。

（ここは……）

葉月は自分を包む純白のシーツをどけ、妙に熱く感じる体を起こして薄暗いこの空間を見回す。
いや、見回すほどこの場は広くなかった。　この空間の広さは今葉月を乗せているベッドをもう一つ入れてしまえば、満杯になってしまいそうなほど狭い。　突如、この空間の扉がスライドして開かれた。

「やぁ、起きたんだね」

扉を開けた張本人は黒いシックなスーツで身に包んだ、黄色い短髪の青年だった。
どこかで見たことがある。　その青年には見えないほど無邪気そうで子供のような顔と全体的に似合っていない格好。　う～ん、誰だっけ？

「その顔、僕が誰なんだって言いたそうな顔だね」

童顔の青年が苦笑しながら言う。　なんと、バレたか。　どうやら自分は自分が思っている以上に表情に出やすい性質らしい。　青年は続ける。

「君とは二度目なんだけどね、始業式のとき、覚えてないかな？
僕だよ、平野療太（ひらのりょうた）」
「……あ」

微妙にだが、思い出した。　たしか始業式の事件のとき、保健室で少しだけ話をした教師だ。
しかし、正直に言うと始業式の日のことはあまり覚えていない。
愛海は自分が合成獣（キメラ）を倒したんだとか言っていたが、それすらも覚えていない。
それと、

（僕……何時から寝てたんだっけ……？）

そういえば、あの斐川と勝負した途中からの記憶が無い。　そこだけすっぽりと抜けている。　上手く思い出せないなんてものじゃない。　そこだけ本当に空洞になって自分の記憶は消えている。

「あの、僕どうしたんですか？」

思い出せないものを何時まで考えていたって仕方がない。　葉月は目の前に青年に聞いてみた。　すると平野は葉月を驚いたように目を丸くして息を呑むが、それはほぼ一瞬で終わり、すぐに表情を戻すとこの空間の外側を向く。

「それは……本人に聞いてみたらどうかな……？」

平野がそこまで言うと、彼の後ろから眉を吊り上げて不機嫌な表情をした緑色髪の少年が現れた。　斐川だ。

「よぉ……」
「お前……」

何だか気まずそうな顔をしている。　「どうしたんだ？」と葉月は思ったが、直後、彼は驚くべきことを言ってきた。

「勝ったやつに言うのは微妙だけど……大丈夫か？」
「は？」

普通なら、彼が自分のことを心配してくれている部分にも驚くべきなのだろうが、もっと驚くべき点が今はある。
自分が勝った？　負けたのではなくて？　さっきまで自分はここで寝ていたのだ。　それは、負けて気絶したからじゃなかったのか？

「な、なんだよ。　僕が心配するのはそんなに嫌な物なのか？」

斐川が顔を赤らめながらそっぽを向いてぼそぼそと言う。

「いや、僕が勝ったのか……って思っただけなんだが……」
「覚えてないのか！？」

斐川が葉月の乗るベットに飛び掛らんと言わんばかりの勢いで押しかけて、身を乗り出してくる。　よほど信じられないのか、葉月の胸倉まで掴んで。

「うん。　全く覚えていないってわけじゃないんだけど……何時からかな……記憶がぽっかり開いている部分があるんだ」
「なんだよそれ……記憶喪失の類なのか？」
「知らない……で、お前はどうなったんだ」
「そこも覚えてないのか……。　結果だけ言うと、負けたよ。

君の電撃を浴びてね」
「は？」
電撃？　はて、電気系統の術など思えただろうか？　やったことはないし、見たことがあるとしても今の自分のＬＥＶＥＬでは扱えないような物をチラッと見たことがある程度しかないはずだが。
使った覚えも、習得した覚えも葉月にはない。　葉月はこんな調子でいるが、斐川のほうはあまり納得したような顔はしていない。
「……まぁ、いい。　とりあえずお前の勝ちだ。　僕はもう行くよ……」
彼は最後に諦めたような表情をしてため息をつくと、この部屋から出て行こうと踵を返す。　しかし、スライド式の扉を開けようとしたところで立ち止まって振り向き、葉月をじっと見据えた。
葉月は疑問を抱いて、眉をひそめる。　少し間が空くと、おそらく今は重かろうその口を、斐川は開いた
「おまえ、言ったよな。　僕のやっていることは意味がないと」
「あぁ……言った」
それは覚えている。　才能ある奴を潰していこうとしている斐川（こいつ）を正そうと思ったのだ。　斐川は目を瞑って続ける。
「正直に言うと、君の言うとおりだと思う。　僕は間違っていた。
それを気付かせてくれたことにはここで礼をする……ありがとう……」
斐川が頭を下げてそういった。　葉月は正直驚いた。　まさかこいつが自分にお礼を言うとは思わなかから。　それにしても、なんだ

か笑ってしまう。　お礼の口調もそうだが、全体的に姿勢など何だかぎこちない。　相当慣れていないみたいだ。

「何笑ってんだ……そんなに可笑しいのかよ……」

顔を上げた斐川がこちらをジト目で睨んでいる。

「え？　笑ってたか？　ゴメン」

笑ってたつもりはないのにな、と思ったが確かに面白いとは思っていたのだ。　やはり自分は、自分が思っているよりも顔に出やすい達みたいだ。　なんかちょっと残念な気もするが、なんとなく、すこしだけ嬉しかった。

「……まぁいいさ。　慣れていないからな、謝るのとか」

「やっぱりか」

「あぁ。　変だろ、謝るのが慣れていないなんて」

葉月が納得すると、驚くことに斐川が少しだけだが笑いながら返答したのだ。　苦笑いだが、それも笑っているうちに入る。　そうなると、葉月は当たり前のことを考えた。　コイツはただの少年なのだと。　ただ、彼にとって辛い過去があり、それが彼の精神を蝕んでいた。

本質的な部分から離れてしまったのはそのせいなのだ。　本当はただの少年。　嫉妬と屈辱と絶望に負けてしまった、本当は悲しくて寂しい少年。

だけど、今はそれらがない。　斐川は今ではもう本格的に普通の少年に戻ってこれた。　そうすることが自分に出来た。　うん、よかった。

「変じゃないだろ。　そんな奴たくさんいる」
「そうか？」
「多分だ」
「そうかよ」

半ば呆れているような口調だったが、彼の口元は笑っていた。
それは笑っている様にも、諦めている様にも、色々な受け取り方が出来る笑みだった。
その後、数分雑談し、斐川は「それじゃ」と言って去っていった。
それと入れ替わるように、平野が入ってきた。

「どうかしました？」
「風邪薬だよ。　あとお知らせもあるんだ」

「お知らせ？」と、葉月はオウム返しに言って風邪薬を受け取り、水の入ったグラスを受け取った。　平野は、「そう」とだけ言って、斐川が何故か使わなかったベッドの脇にある小さなイスに座る。
とりあえず、葉月はさほど気にしないで薬を口へ運んだ。　そして、胃に流そうと水を含んだ瞬間―

「来月辺りに君の幼馴染の……相馬美久（そうまみく）ちゃんって子がこの学校に来るらしいよ」

含んだ水を、鯨の噴気よろしく盛大に強く吹いた。　おそらく一緒にもらった薬ごと。
そんな葉月を気にもかけないで、平野ははしゃぎながら続ける。

「この学校って、受験で入学するのが普通だけど、その子は親のコネで入ったらしいね。　あれだよね、相馬美久って子、評議員の相（そ）馬帝太郎（うまていたろう）の娘さんらしいね。　でさ、篠原君ってその子となんか関

係あるの？　あれ？　篠原君？　どうしたの、生気が抜けてるよ？」

確かに、そうだろう。　葉月のお口からはボトボトと流れる水（何故か出ている微妙な血を含む）と、なんかタバコの煙よりも細い一筋のもやのような物が出ている。

しかし、そんな状態の中でも葉月の思考はしっかりと生きていた。

（美久が……美久が来る……？　ハハハ……嘘だっ！！）

篠原葉月現在１２歳。　もはやその年齢が享年となってしまうのではないかと葉月は思った。

第三：我は弱なり。　我は強なり　ｐａｒｔ８（後書き）

お久しぶりです！　２週間ぶりの投稿となりました（現在高校一年なので、受験だったわけじゃないです）

今気付いたけど、ギャグも難しい！　なかなか進みません。　「面白く」って意識すると全然話がわからなくなるし、難敵ですね……。

さて、今回はこの辺で。　評価、感想、アドバイス、などを心からお待ちしております。

現在、ボイスブログをやっております。

ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください

→ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第四：小さな鬼と書いて許婚と読む！！　ｐａｒｔ１

２０６７年５月３日２１時４７分。　皆が心を落ち着かせるゴールデンウィーク中。　葉月は今逃げていた。　現実からとも言うが、恐怖からと言ってくれたほうが、今の彼にとっては正しい。
ロングコートを風呂敷のようにして全身を包み、常時持ち歩いている書物を抱きしめ、小さい穴の中で身を潜めている遭難者のように体を震わせながら、彼はソファに座っている。

「で、お前は何で未だに僕の部屋にいるんだ？」

不意に、随分と幼い顔をした淡い緑髪の少年に声を掛けられた。
彼は斐川泰斗。　数日前、とある事情により、葉月に戦いを挑んだ少年だ。
あの頃はすごく棘々しい奴だったが、今では大分丸くなり、葉月の中学生での友達第一号となったのだ。　その証拠に、葉月が居ることに対してあまりよろしくない様な事を言っているが、手には暖かいココアが入ったコップが二つあるお盆を持っている。
ソファの前においてあるローテーブルにそれを置くと「適当に飲め」といって、葉月が座っているソファとはテーブルを挟んで向こう側にあるクッションに座った。

「もう一回聞くが、何で基本就寝時間ギリギリまで僕の部屋にいるんだ？」

葉月はそう言われて、顔を真っ青にしながら答えた。

「アイツがくるんだ……」
「は？」

葉月の呟きに斐川は怪訝な顔をすたが、葉月はそれに気付かずに体を震わせたまま続ける。

「相馬美久って奴なんだけど……そいつが来るんだ……そいつには……ここに来て欲しくないっ！」

搾り出して叫んだ声に斐川は一瞬ビクッとするが、何となく解ったのか。　葉月を可哀相な人を見るような目で見る。

「そいつって……お前の彼女か何かか？」
「お前は何を聞いていた！？」
「だよな。　で、なんなんだよ」
「……許婚だ……」
「は？」

斐川は眉根を寄せてそう言う。　疑問に思っているのだろう。そりゃそうだ。　今時いきなり許婚って言われたら、「それどこのアニメの話（ネタ）？」とか思われるのが普通だ。

「それどこのアニメの話（ネタ）？」

斐川は見事なまでに葉月の予想通りの返答をよこした。　正直葉月は笑いそうになってしまった。　自虐的な意味で。　葉月は重っ苦しい溜め息を吐いてから答える。

「本当の話だ。　相馬美久って言う女は、僕の幼馴染なんだ」
「ほぅ……。　んで？」
「親同士が仲良くって、美久自身も、僕がかなりお気に入りみたいでな、あいつが親に頼んだら勝手にそうなったんだっ……」

「ふ～ん……」

斐川はココアをのんびりと飲みながら葉月の言葉を聞いている。

あんまり興味なさそうだ。　まぁ、そりゃそうだ。　どうせ周りにはのろけにしか聞えなのいだろう。　葉月がそう思っていると、リビングの扉が開けられた。　斐川と共にそちらに目を向ける。

そこにいたのは、学校指定の赤いジャージを着た、細身の少年だった。　髪は腰辺りまで伸ばしているが、凄くボサボサで、手入れをしていないのが伺える。　おそらく、伸ばしているのではなく、切るのが面倒なのだろう。　だらしないのが全面的に出ているのに反して、顔立ちはもはや少女で、ボサボサの長髪だって似合っていると言えば似合っている。

彼は両手にビニール袋を持っている。　学園内の売店で買い物でもしに行ったのだろうか。

「あ、護おかえり」

「うん、ただいま」

「何買ってきたんだ？」

斐川が珍しく友好的な声を出して言う。　彼は夕凪護（ゆうなぎまもる）。　違うクラスだが、斐川の部屋に来るようになると同時に友人となった。人が良く、誰とでも仲良くなれるような人間だ。

夕凪は「明日の飯とかだよ」とのんびりとした口調で答えると、適当な場所にその買い物袋を置き、ひどく疲れたように、こちらに歩んで、斐川の隣のクッションに座った。

そして、こちらを見てニッコリと笑って見せる。

「こんばんわ、篠原くん。　どうしたの？　顔青いよ？」

「……気にしないで良い……」

「そう？」

夕凪は不思議そうに首をかしげたが、どうやら当人はあまり物事に感心を持たない性格のようで、それだけ言うとテーブルに載せてあるココアのカップに手を伸ばした。

「おい、それ篠原に入れたやつだぞ？」

斐川が声を上げて止めようとするが、夕凪はそれを無視して葉月のココアを飲む。　斐川は「まったく……」と呆れたようにため息をついた。

「……しょうがない、篠原なんか他の飲むか？」

「必要ないと思うよ？」

葉月は斐川の誘いに乗ろうと口を開きかけたが、いきなりカップから口を放した夕凪が割り込んだ。　斐川が眉根を寄せる。

「あのなぁ、お前がそれ口付けたから、他の入れようとしてんだろうが」

「そうじゃなくてね」

「「？」」

葉月と非川が同時に首をかしげる。　すると、夕凪はとんでもないことを口にした。

「相馬美久って子が篠原君を迎えに来ているんだよ」

「「早く言え！！！」」

二人で同時に声を上げる。　斐川はただのツッコミだろうが、葉月は心からの叫びだった。

しかし、それら虚しく廊下の方から、「すいません」と言う可愛らしい声と共に、シンプルな柄のワンピースを着た小学校3年生程の少女が、自分の身長と同じくらいの長さを持つ綺麗な青色の髪を揺らしながら現れた。

「葉月は……？」

その少女の登場と同時に葉月は喉が干上がった様な気がしてたまらなかった。　来てしまった。

「美久っ！！！」

自分にとっての天敵、相馬美久が。

「葉月！！！」

少女―美久がこちらと目が合うと目を思いっきり輝かせながら、走って飛び込んできた。

「っ！？」

それを葉月はとっさに、と言うよりは本能的に避けた。　「むぐっ！」という呻き声と共に美久がソファに顔面から突っ込んだのを確認すると、書物をロングコートの大きなポケットの中に入れ、全力で走る。

斐川と夕凪が唖然とした表情をしていたが、気にするよりも前にリビングのドアを思いっきり開けて一目散に廊下を走りぬけ、玄関につくといそいで靴を履き、玄関の扉もさっきと同じ様な感じで空けてから、全力で寮内を走る抜ける。

今更だが、これらの行動は美久から逃げるためのもの（としか言

いようが無い）だが、今から四日後、ゴールデンウィークが終わった後の日、葉月は美久と同じクラスになり、葉月これらの逃走劇はまったく意味がなかったことになる。

第四：小さな鬼と書いて許婚と読む！！　ｐａｒｔ１（後書き）

はい！どうも！俺です！　本当にお久しぶりです！
もしかしたら、俺のこと忘れちゃった人もたくさんいるかもしれません（本当にいそうで怖いｗｗ）。
今回のお話は、この俺にとって初挑戦である、フルコメディに仕上げていきたいと思っています！
本当に初めてなので、出来ていないかもしれませんし、笑えないかもしれません（その部分はちゃんと努力します！）。
ちょっと前、読者様にコメディの基本（？）的なものを教えてもらいましたが、はたして上手く書けるのかどうか。　とりあえず、生温い視線から温かい視線で見守ってください。

さて、今回はこの辺で。
アドバイス、感想、評価などを、お待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第四：小さな鬼と書いて許婚と読む！！　ｐａｒｔ２

「今日転校生来るらしいぜ、どんな子かな？」
「私さっき職員室の前で見たよ！　すっごく可愛かった！」
「まじ、やっべ！　フラグ立ってきたぜ！！」

クラス中の噂話が五月蝿い。　心底そう思ったのは、実は初めてなのかもしれない。　葉月はただ机に突っ伏していた。　金属のデスクの冷たさが妙に気持ち言い。
しかし、その中で一つの疑問を抱えている。

その転校生は美久なのではないかと。

というかそれしか無いだろう。　彼女とは四日前に会ったばっかりだ。　そして、その時美久はここの生徒ではなかった。
だったら彼女が転校してこの学園に来たと、事情を知っている人間なら、そう考えるのが当たり前と言ったら当たり前だろう。

「ね～ね～。　葉月！　転校生って誰かな？」

前の席から愛海が楽しそうな顔をしながら話しかけてきた。　その楽しんでいる顔が、人の不幸を楽しんでいる鏡の向こうにいる自分の顔のような気がして、無性に腹が立った。
葉月はとりあえずそれを、「知らない」とだけ言って、適当に流した。

「私の考えでは、何処かの財閥お嬢様が、この学園に興味を持って、

または思いを寄せている人がいるために、無理やりこの学園に入ってきたんだと思うの」

自慢げに中学生にしては豊かな胸を張りながら、そんな推理論を並べる。

そんなギャルゲー魂一本な設定でたまるか！　と葉月は考えたい及び言ってやりたいところだが、今回来る転校生が美久だった場合、愛海の推理はある意味コナン・ドイルもビックリな推理となってしまうので。　迂闊なツッコミは出来ない。

そんな複雑な思いを溜め息に乗せると、それに反応したかのようにチャイムが鳴った。

律儀にチャイムと同時に担任の女教師がクラスに入ってきた。教師はまだ若くて、大きな丸眼鏡をしている。　長くて豊かな髪は二つに分けて三つ編にして、教師というよりは、一昔前の受験生みたいな人物だ。

担任教師は、出席簿を教団に置いて、もう百点満点を送りたくなるような素敵な笑顔をクラス全体に送った。

「起立！」

クラス委員長の合図と共にクラス全員が立ち上がる。

「気をつけ！」

シャキ！　またはビシッ！　という効果音が似合いそうな程、緊張感に満ちた姿勢をとる。

「礼！」

『『『おはようございま～す！！！』』』

ズバァ！　という効果音が付きそうな程、クラス全員が気合の満ちた挨拶をする。
何かものすごいやる気の満ちたクラスに見えるかもしれないが、実は違う。　これはあくまで、先生に対する『愛』をクラス全体が表した態度であり、やる気がどうこうの問題ではない。
実際、葉月は頭を下げていない。　先生に対しての愛も、やる気があるわけでも無いから。　不意に担任教師と目が合った。　満面の笑顔をしていた。　なのに、彼女の周りの空気が笑っていなかった。

「はい、おはようございます♪」

綺麗な笑顔を保ったまま、クラス全体に返す。　あれが営業スマイルか、覚えておこう。
クラス全体が席に座ると、同時に葉月も席に座った。

「さて、今日は皆さんに大きなお知らせがあります！」

担任のそれと同時に教室がザワザワと騒がしくなる。　葉月は身を引き締めた。　緊張ではない、恐怖からの反応だ。

「入ってきて！」

担任が教室の方を向いて手招きをする。　すると、教室のスライド式のドアがゆっくりと開かれた。

現れたのは、シンプルな柄のワンピースを着た、自分の身長と同じくらいの長さを持つ綺麗な青色の髪を揺らしている小学校2、3

年生程の少女だった。

そう、相馬美久は最初から決まっていたかのようにこのクラスにやってきたのだ。　愛海の推理が名推理となってしまったな……。

教室に足を踏み入れると同時にトテトテと教師の隣まで小走りする。　そして、

「相馬美久です！　皆さんこれからよろしくお願いしま～す♪」

明るくて可愛らしい挨拶と同時にクラス一同（主に野郎共）が喜びの歓声を上げた。　葉月は深い溜め息を吐くのだが。

（ついに来てしまったか……。　まぁでも……）

とりあえず、自分の隣になることは無いだろうと考える。　なんせ自分の隣は全部埋まっているのだ。　前に愛海、後ろに須賀、右に菊地、左に津田がいて、美久が入れる席は無い。　助かったと言えば助かった。

葉月は周りの救世主たちの席を見てみる。

その結果、何故か菊地の席だけ空いていることに気付いた。

（……は？　まさかっ！？）

「じゃ、相馬さんは篠原君の隣に座ってね」

担任の教師が爆発的な発言を葉月、いやクラス全体にぶちまけた。

「は～い♪」と見た目どおりにと言っても良いくらい元気な小学

生の様な返事をする。
しかし、葉月はほぼ条件反射と言って良いくらいにガタンとイスから立って言う。

「先生！　僕の隣には菊地がいるはずです。　いないとしても休んでいるだけなのでしょう？　だったら他にも空いている席はあります！」
「菊地くんはＦ組に移動されました♪」

笑顔という特別付録付きの爆弾発言で即答された。　なんということだ。　しかも、おそらくそれは彼が望んだことではなく、美久の家庭の『権力（ちから）』によって動かされたのだろう。　可哀相に。
自分もだが。　力が抜けてそのままイスにもたれ掛ってしまう。
その直後、美久は自分の席に行くため、これまた見た目どおり小学生の子供のように、とてとてとこちらに走って来て、自分の席の隣に座った。　ご丁寧にニコッと微笑んで。
そのまま担任のお知らせなどを聞いて、数分後にチャイムが鳴った。　全員が礼をして教師は出て行く。

（さて……）

この場合、美久の行動は読み取れている。　さて、トイレにでも行くか。
そう想って立ち上がった瞬間、美久が自分に向かって飛びついてきた。　やはり予測どおりだ。　しかし、とんでもないことに、今はイスが邪魔で避けれない。　となると、

「葉月～♪」

考えていた通り、美久はそのままダイブして抱きついて、葉月を

イスごと倒し、下敷きにした。　床に背中がついた瞬間自分の口から変な悲鳴が漏れたが、考えるまもなく、

『『『葉月テメェ、その子とはどういう関係だ！！！』』』

いきなりクラス全員から殺気を浴びる事になった。　マズイ。

相馬美久という人間は昔からその容姿と性格のせいで、常に他人から護られるような人間であり、彼女に手を付ける男は一瞬で塵と貸してしまうという、とんでもないジンクス（必然の）的なものを起こす迷惑少女なのだ。

いままで葉月が小学時代に起こした膨大な喧嘩の数は、半分が葉月の態度であるが、もう半分はこの美久のジンクスによる物だった。

それにしても、転校初日でいきなりなるとは流石に思っても見なかった。　さすが全員中学生。　思春期突入時年齢。

「どういう関係も何も、幼馴染だ」

葉月はクラス全体に対して呆れを感じながらそう吐き捨てた。

「なぁんだ」と安心を持った猛者たちが一般人物（いっぱんピープル）に戻っていく。

しかし、

「違うわ！　私と葉月は許婚なの！」

「違うわ！　葉月とこの子は許婚なの！」

美久と誰かがいきなりとんでもないことを言ってくれた。　しかしその誰かが瞬時に解ったので、探す手間は省けた。

犯人はうちの馬鹿姉（あいみ）だった。

「この馬鹿姉！　なんでそんな……本当の事を言う！？」

すると愛海は「テヘ♪」とわざとらしく自分の頭を小突いた。

「本当のことだから♪」

だろうな。

詳細を言うと、愛海は自分と美久の間柄を良く知っている。

つまり愛海は、葉月が美久にもっと近づき難くなる様にあえて本当の事を言ったのだ。　なんて策士な悪女なんだ。

そして、

『『『奴を殺せ！！！！』』』』

愛海の言葉が思春期真っ盛りの猛者たちの熱き魂（けがれしソウル）を再び目覚めさせた。　本当に余計なことを。

葉月は急いで美久をどかし、全速力で教室を出て廊下を駆け抜ける。　どかした美久に「あぁん、葉月ヒドイ！！」とか言われたが、そんなのは無視だ。

後ろを振り向くと、美久に恋愛感情を持った猛者共が目を血走らせながら、葉月を本当に殺さんばかりの勢いで襲ってきている。

葉月は自分の足のギアを一段階上げた。

ちなみに、葉月とこの襲ってきている猛者達のリアル鬼ごっこは中学一年校舎外まで使いハメになり、葉月が授業に参加できたのは、昼休み終了時刻5分前のことだった。

第四：小さな鬼と書いて許婚と読む！！　ｐａｒｔ２（後書き）

前回のこれの出来があまりにも悪かったので根本的な部分から書き直しました。
スイマセン、更新じゃなくて。　すぐに次話を投稿するつもりです。
　ちょっと待っててくださいね。
相馬美久はいろんな設定を持っています。　ある意味、作者のお気に入りのキャラとなるでしょう。
では、今回はこの辺で。　今週中にまたお会いしましょう！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第四：小さな鬼と書いて許婚と読む！！　ｐａｒｔ３

放課後、葉月はまっすぐにある所へと向かうことにする。　そのある所には中学一年校舎から歩いて１５分ほどで着いた。　着いたのは高校１年校舎。

モチロン、葉月は高校生なんかに用は無い。　あるのはあの馬鹿校長だけだ。　校長室は、なんとも面倒くさいことにこの高等部一年校舎にある。　ここは中学一年校舎とはかなり離れており、繁華街地区を通らなければならないので少々疲れる。

（それでもアイツに聞き出さないと……）

それだけ重大な件が現在はある。　とりあえず校舎の中に足を踏み入れ、近場にいた適当な女子生徒に校長室はどこかと聞いた（ちなみに、本当に適当に話しかけただけで、決して葉月は女子高生好きなわけではない）。

すると、なんともご親切なことに案内してくれた。　葉月と上級生は数分だけ歩くと、左右に開くタイプのドアを使用した一室に着いた。　ここが校長室か。

上級生に案内をしてくれたことに礼を言うと、上級生は「じゃーねー♪」と明るい態度で去っていった。

「さて……」

次の瞬間、葉月はノックもせずに、ドアを蹴りあけた。　しかし、ドアは思ったよりも軽く、簡単に開くどころか、開きすぎてドアが壁にぶつかった音がした。

中には驚いた表情をしたまま大きなイスに越し掛けている少年と、秘書であろうセミロングの茶色い髪をポニーテールにしたスーツ姿

の女性が同じ表情をして立っていた。
しかし、気にせずそのままづかづかと中に入り、校長用の妙にでかい机に飛び乗り、少年。　否、この学園の校長、白木葉（しらきよう）のパジャマの胸倉を掴んだ。

「ちょ！　篠原君、いきなり何！？」
「アンタ……なんで相馬美久をこの学園に入れた！！」

最初はうろたえる葉だったが、葉月のその一言で全て理解したようだ。　それを表すように、あぁ、と言って自分の手の平に拳を乗せる。

「相馬美久ちゃんのことね、知り合いなんでしょ？　良いじゃない、知り合いと一緒に学園生活を過す。　いいドラマが生まれると思うよ？」
「そんなのはどうでも良い。　何でこの学園に入れたかを聞いている。　転校生の入学枠なんて、この学園には無いんじゃないのか？」
「うん、ないよ」
「じゃあ、なんで！」

すると葉は、右手の親指の先と人差し指を先を合わせた。　まるで関西のほうのヤンキーが金を要求する時によくやるあの仕草みたいになった。
そして、
「お金♪」

文字通りな言葉を口にした。

「この、腐れ外道！！」

葉月は叫ぶと同時に右足だけを床に着け踏み込み、そのまま葉を出口のほうへ全力投球した。　思ったより重かったが、葉月にとっては全然問題ない。

しかし、葉月の手が葉の胸倉からはなれた瞬間。　葉はフワリと浮き、ゆっくりと床に着地した。　人間の技では出来ない。　これは魔法の一種だ。　何の系統かは解らないが。

警戒心を持たれたのか、葉月は秘書の女性に羽交い絞めにされた。

「あははは♪　ごめん、ごめん♪　半分冗談♪」

「半分は金かよ……」

葉月は心底呆れた。　葉が「まぁね♪」と満面の笑顔で言ったが、それは無視する。

秘書は葉に「放してあげて」と言われると、素直に葉月を話した。

それと同時に葉月は、膝の力がガクッと抜けたのを感じると、そのまま跪いた。

「冗談じゃないぞ……」

「とりあえず……どうしたの？」

葉がしゃがみこんで葉月の顔を覗く。　どうやら葉は、葉月の事情のほうは知らなかったらしい。　まぁ、知っててやっていたら今頃一発殴っているところだ。

とりあえず葉月は立ち上がり、葉に話してみることにした。　斐川に話した時とほぼ同じ内容で。

すると葉は、再び妙にでかいイスに腰掛け、こう言った。

「それどこのアニメの話（ネタ）？」

葉月はこれほどデジャヴと言う物が実際に在るのかと感じたことはなった。　ガックリと首が項垂れる。
まぁ確かに、いきなり「許婚です！」なんて信じてもらえるような内容ではないが、連続となると少しきつい。

「ま、冗談はさておき」
「結局冗談かよ！」

心の激情と共にガバッと顔を上げる。　やっぱり一発殴ってやろうかと思ったが、葉の表情を見ると、そんな気持ちはすぐに冷めた。
葉の顔は表情だけニコニコしておきながらも、目元は笑っていなかったのだ。

「実はね、お金というのは本当だよ。　でも、決定したのは僕じゃない」
「じゃあ、誰だ？」

葉は「理事長だよ」と短く言って、彼は机の引き出しから大きめの封筒を取り出した。　葉月は黙ってそれを受け取って中身を見てみる。
中にはＡ１サイズの書類が一枚だけ入っていた。　取り出してみると、紙には殴り書きで、

「入学を認める」

そう書かれていた。　あまりにもの怒りに、葉月は書類を床に叩きつけて机をバン！と叩いた。

「どんだけ自由な学園だよ！」

同じ様に葉も机を叩く。

「知らないよ！　理事長に聞いてよ！　こっちは忙しいんだ！　ていうか諦めてよ！」

「嫌だよ！　あいつがいたら僕の学園生活が不幸の一色に染まる！！」

「あぁ、そのほうが面白いかもね！　僕はそれをゆっくり見るとするよ！」

「あんたそれでも教師か！！」

「えぇ！　これでも教師です！！」

「失礼します」

不意に、葉月と葉のくだらない口論を打ち切ったのは変声期過ぎた少し高めな少年の声だった。　葉月と葉は二人同時に出口のほうへ向く。

そこに立っていたのは、中性的な顔立ちをし、青い瞳を持った少年だった。　腰辺りまで伸ばした髪は雪よりも白く、肌も血の気を感じさせないくらい白かった。　彼が着たヴィンテージのジーンズやパーカーは、彼の持つ唯一の色に見えた。

「やぁ、戸塚（とづか）君。　どうしたの？」

葉は陽気な笑顔で少年を歓迎した。　少年は「障壁解除の件についてなんですが……」と、その歓迎を面白いようには受け取っていない口調で葉と葉月のほうへ歩み寄る。　白髪の少年が机の前にたどり着くと同時に、葉月は反射的に数歩後退して身を引いた。

そして葉月は感じた。

コイツは化け物だと。

理由は簡単。　彼の魔力が全く感じられないのだ。　しかし、魔力が無ければこの学園に入ることは不可能。

ならば、こう考えられる。

『彼の魔力が無いと感じられないほど弱い』のではなく、『魔力を誰にも感じさせない位、魔力を押さえ込めるほどの魔力と操作能力を持っている』のだと。

基本、魔力と言うものはある程度のレベルならば、その大きさが一外（他人）にも伝わるのだ。　もっとも、それが嫌で、大抵の人間は制御して魔力を押さえ込むのだが、それでも魔力は外に伝わってしまう。

反射的に退いてしまったのは、おそらく恐怖によるものだった。

始めて光崎神無（みつざきかんな）を目にしたときとは違う、本物の恐怖だった。

『こんなものが存在するのか』という驚愕ではなく、『なぜこんなものが存在しているのか』という本物の恐怖。　葉月はこの場を立ち去りたくなったが、足がそれを許さなかった。　まるで縫い付けられたかのように足が動こうとしない。

そんな葉月を見向きもしないで葉は笑顔のままでいる。

「あ、その件？　風紀委員会（ジャッジメンターズ）の方に回しちゃった♪」

「……吉良（きら）ですか？」

「っ！！？」

いきなり強力な魔力を感じ、葉月の体が痺れた。　感情に流されたせいで制御が中断され、戸塚の魔力が解放されたのだ。　凄まじ

い圧迫感が葉月を襲った。
しかし葉月とは反対に、なおもニコニコしている葉はどこか他のしそうだった。
「そだよん♪　昨日の放課後に吉良君が来てね。　その件について話し合ったんだよ♪」
「……っ！　解りました……」
戸塚は苦虫をかみ殺したような顔をすると、「失礼しました」とだけ言って校長室をさっさと出て行った。
「……」
葉はしばらくニコニコと戸塚が出ていった場所を眺めていたが、葉月はもう美久のことすら頭に入っていなかった。

見つめられたのだ。　戸塚に。

一瞬だけだったが、彼が校長室を出て聞くとき、間違いなく自分と目が合った。　なんてことも無いように思えるが、彼は自分から葉月を睨んだのだ。　明らかに敵意を持った目で。
しばらく呆然としていると、葉が「どうしたの？」と声を掛けてきた。
「いや……さっきの……」
「彼？」
いきなり嫌な笑顔を見せてくる。　明らか企んでいる様な顔だ。

「生徒副会長の戸塚雪奈(とづかせつな)くん。　更に言えば、怪物だよ。　僕が生み出した三つの怪物の一つ」
「怪物……？」

怪訝な顔をして尋ねる。　怪物。　それはＬＥＶＥＬ６のことだろうか。　確かにそれらは怪物といえば怪物だ。
だが、三つとはなんだろうか。　ＬＥＶＥＬ６とはいえ、たった三人ではない。　高校三年生なら１０分の１はＬＥＶＥＬ６だ。
つまりそれではない。　だとしたら……。
葉月の顔を見ながら、葉は楽しんでいる顔をしながら答えた。

「そう。　それが彼。　この学園に三人しかいないＬＥＶＥＬ７(ドラグーン)の一人」
「ＬＥＶＥＬ７だと！？」

知らなかった。　まさか生徒でＬＥＶＥＬ７にたどり着けるものがいるなんて。
普通ＬＥＶＥＬ７なんかに高校生のような発達しきっていない者がなったら、脳と精神が器に入れる魔力に耐え切れず崩壊(オーバーダウン)してしまうというのに。
例えば、魔力という重石を入れたＬＥＶＥＬという器を、脳と精神という紐。　または鎖で支えるとする。　重石は器の大きさと同時に増え、それと同時に総重量も増量する。　そうすれば、いずれ双方の紐は千切れ、結果、『崩壊(オーバーダウン)』する。
成長しきった大人なら、脳(ひも)や精神(くさり)も頑丈になり、崩壊の可能性は消えてくる。　逆に、高校生(こども)では無理だ。

「まぁ普通はそうだね」

人心朗読術(リーディング)しやがった。　だが葉は気にせずに続ける。

「そこで色々とやったんだ。　まぁ、僕が生み出した怪物達は、元々怪物並みの才能があったんだけどね」

「……」

「そして、僕はこれからも怪物を作り続けようと思う。　そして、次の怪物は君だと思っているんだ」

「僕？」

「そう。　そしてもう一人。　五つめの怪物は―」

「光崎神無(みつざきかんな)」

葉が言いかけたところで、葉月は思いつきでとある一人の少年の名を口にした。　葉はそれを驚かずに予想していたかのように笑みを深める。

「へぇ……何でそう思うの……？」

「いや、そう感じただけだ」

「そう……」

葉がいやらしい笑みを更に深める。　そのままの表情でいたら顔が崩壊しそうだ。

葉月はなんだか居心地悪くなった。　葉の笑いのこともあるが、学園内の怪物だの、自分もそのうちだのと、良い話ではない。　聞きたくなかった。　無言で踵を返し、校長室を出る。

「美久ちゃんのことは良いの～？」

校長室を出た丁度にそんな明るい声が聞こえた。

最後まで嫌なやつだ。

第四：小さな鬼と書いて許婚と読む！！　ｐａｒｔ３（後書き）

宣言通り、ギリギリで次話を投稿できました！
久々に出てきたＬＥＶＥＬ７、戸塚雪奈の存在。　そして、彼のいう吉良とは誰なのか（とりあえず、もう書いてあるので、風紀委員会の人間であることは言っておきますね）。
ちなみに、今現在理事長とかの存在をどう置こうかを迷っています。
　もしかしたら会話中の人物の可能性が……。
なんてことは置いといて。　今回はここまでです。　あ、そうだ！
　名前少し変えました！（とある少年誌の主人公の名前を借りました）
これからも、感想、評価、アドバイスなどをお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第四：小さな鬼と書いて許婚と読む！！　ｐａｒｔ４

それから二日後。

ソファに、まるで何処かの幽霊に精力を底まで吸い尽されたかのようにぐったりとしている葉月を、愛海は前から、美久は後ろから抱き付いて、二人でサンドイッチにしていた。

「だ～め！　葉月は私のものなの！」

「そんなこと無いです！　葉月は私のものです！」

葉月は心を閉ざしていた。　前後から鳴り響く高音のステレオにも反応しないくらい完璧な管理システムを持つ心の核シェルターに身を潜めていた。

今は何も考えたくない。　顔と頭と体に感じる柔らかくて温かい感触に埋もれていても、なんにも感じていない。　愛海に抱きしめられているせいで呼吸が困難な状況だが、それに関しては忘れている。

全ての原因は美久のこと。　別に美久の体がどうしてこんなにも色気が無いんだろうとか、そういう問題ではない（そもそも中学一年生に色気を求めてもしょうがない）。

問題は、『何故か美久が我部屋（この）で学園生活を過すことになったこと』だ。

（ありえない……）

昨日葉から電話がきて、いきなり「美久ちゃんを君の部屋に入れることにしたからね～♪　ちなみにＮＯっていう返事は無しね♪」

自由な学園にも限度があるだろう。　男と女を一緒の部屋に、しかも女性の人口密度が高いなんて、普通じゃない。　もともと普通じゃないのは解っているのだが。

「葉月は私の弟なのよ！」

「その時点いろいろアウトじゃないですか！　葉月は私の許婚なんですよ！」

葉月的には美久も十分アウトだ。　見た目小学二、三年生の少女と見た目もきちんとした中学生の葉月とでいろいろ危ない気もする。

たった１２歳でロリコンの疑いはかけられたくない。

「お前ら……いいかげんに……」

「うぇ～ん、葉月～！　お姉さんがいじめてくるぅ～！」

あまりにもの煩さに心の核シェルターは崩壊し、頭にもきてきたので、いい加減にしろと言いたかったのだが、後ろで抱きついている美久がぎゅ～っ！　と腕の力を強めてくる。

「うおおあああ！？　やめろ美久！　お前自分の腕力を自重しろ！！」

ミシミシッ！　という本当に嫌な音（ねいろ）を葉月の首の骨があげ、それと共に走るとんでもない激痛は、斐川の体術よりも恐ろしかった。

普通、女子高生でも腕力や握力で首を折ることは難しい。　折り方を知っていれば話は別だが。

しかし、この相馬美久にそんな理屈は通用しない。　彼女の腕力は尋常じゃないのだ。
彼女はその小柄でありながら、体重６０キロ程度の大人なら平気で持ち上げるというとんでもない特異体質の持ち主であり、瓦を手刀ではなく、デコピンで粉砕する異質体質の持ち主だ。
原因は彼女の筋肉らしい。　モチロン見ての通り、美久の体はムッキムキなマッチョというわけではなく、むしろ触っただけで折れてしまいそうなほど繊細に見える。
しかし、見た目で人を判断してはいけない。　彼女の筋肉が以上なのは、『量』ではなく『質』だ。　彼女の筋肉は数十倍の密度と柔軟性のある筋肉繊維をもつらしい。　これによりとんでもない筋力を発揮するのだという。
昔、美久が葉月が一人で下校した時、いきなり後ろから抱きつかれた時の衝撃で脱臼したことがある。　今思い出してみても、美久との良い思い出はあまり無い。

「あぅ、ゴメンね葉月……」

素直に腕を葉月の首から放す。　助かったといって良いだろう。
いくら腕力が雷神トール並みに強いとは言え、精神（なかみ）は優しい素直な子供なのだ。

「はぁ……はぁ……気にしなくて良い……」

呼吸を整えながらそう返し、同時にまぁ、言いかと考える。　積極的に抱きついてくるところ。　異例で異質で異常な腕力を持っていることを抜かせば、本当に可愛い幼馴染なのだ。
それに、お互い中学生だ。　不純な恋愛などはありえないだろう。
まずこちらとしてはそんなこと望んでもいない。　一緒に済んでも問題は無い。

しかし、一つ疑問が残る。　現在日時は5月9日。　愛海がこの学園に来たのは。　少なくとも5月3日だ。　そして、この部屋に止まることになったのは昨日。　つまり5月8日だ。　さてここで問題。

『いったい美久はこの間の五日間。　どこで何をしていたのでしょうか？』

「……なぁ、美久……」
「？　なになに？」

可愛らしく小首をかしげる美久。　こう見ると、本当に害は無いように見える。　妙に聞き辛い。　しかし、決心する。

「美久……お前、ここに来る前、どこで寝てた？」
「え……？」

急に口ごもってしまう美久。　何があったお前に。

「何があったか、とりあえず『言え』。　そして愛海という名のボケ、早く『失せろ』」
「うみゅ！　は、はい！」
「ちょっと！　私の扱いがおかしいってば！！」

騒ぐだけだったので愛海に対しては両手で突き飛ばす。　手に嫌な触感と、「ひゃんっ！」という愛海の一瞬の悲鳴も聞えたが、ここは無視します。
美久は葉月が命令口調になったのを恐れて、話す気になってくれ

たみたいだ。

「えっと……校長先生のお部屋になんだけど……あれ？　葉月……なんで魔力を全開（フル）に解放してるの？」

「ちょっとあの校長（ロリコン）の面、思いっきり潰してくる」

「ま、まって葉月！　ごめんね、言葉間違えた！　校長先生が用意してくれたお部屋に泊まっていたの！」

何故そう言わない。　本当に勘違いしてしまったではないか。

逆に言えば、あいつの面を殴る機会がなくなってしまって微妙に残念なのだが。　美久は自分の頭は小突いてえへへ♪　と笑った。

葉月は残念さと呆れでついに溜め息をついた。

「……まったく……っ！？」

突如、凄まじい吐き気と激痛が葉月の体を襲った。

「う……うぁ……あぁあああああ！？」

体の中をグチャグチャかき回されたような感じがする。

あまりにもの激痛に、自分の体が床に落ちたことすら理解できなかった。　愛海と美久が慌てて駆け寄ってきたのが見えたが、それが本当に彼女らなのか確認できる前に、葉月の意識は電源のように一瞬で断たれた。

名前：相馬美久（そうまみく）
年齢：１２（９月９日生まれ）
性別：女

学年：中等部一年
身長：１３１．１ｃｍ
体重：２４．１ｋｇ
学年：中等部一年
魔法名：ＣＨＥＲＩＳＨＥＲ（慈しむ者）
性格：天真爛漫だが、すこし寂しがりで甘えん坊。
特徴：水色の長髪。　背が低く、小学低学年並みの体系であり、めちゃくちゃスレンダー。　シンプルな柄のワンピースをよく着ている。
備考：葉月とは幼馴染であり、親公認の許婚でもある美少女。恋愛に関しては妄想癖があるようで、時々暴走する。　国会議員の娘。
　見た目のこともあり、周りから守られるタイプ。　そのせいか、彼女に近づく、または親しく接した人間は敵対視される。
　しかし、彼女は常人の数十倍の密度と柔軟性のある筋繊維をもつ体を持ち、実際は常人の数十倍の力がある（自覚はしているが、よく忘れる）。

第四：小さな鬼と書いて許婚と読む！！　ｐａｒｔ４（後書き）

お久しぶりです！相変わらず更新の遅い望（バカヤロウ）です！　ネタは浮かんでいるのに、それを上手く文章に出来なくて結構悩んでいます（出来ても、上手くはありませんが）。　もっとぱっぱとできるようになれば一週間に一度のペースに出来るのに、それが出来ないオレは本物のバカ（決定事項）。

さて、今回はこの辺で。
感想、評価、アドバイスなどをお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第四：小さな鬼と書いて許婚と読む！！　ｐａｒｔ５

「またここか……」

鉛のように重いまぶたをゆっくりと開けてみると、そこはすべてをほぼ真っ白に統一した空間。

葉月は小さく、だけどかなり重くため息を吐いた。　毎度おなじみと言うかなんと言うか……。　自分が今いるのは、保健室の患者用に設置された別室だった。

今度から自分に何かあったときはここで目を覚ますということを意識しておこう。

葉月は目だけ動かして辺りを見回してみる。　自分の目に映るのは、患者用ベッドならではのパイプの手すり。　壁のフックに掛けられている自分の黒のロングコート。　そして、見舞い人用に備えられたパイプイスに腰掛けている、３６０度どこから見ても幼い少年にしか見えない変人校長先生。

「何しに来てんだこの変人」

「それが君の人（ぼく）の顔を見た瞬間に発する第一声なの？」

葉月は心の中でため息をついた。　目覚めてすぐにこいつのお顔を拝見することになるとは……。　はっきり言うと、ついてない。

「で、君は何でここに連れてこられたのかな？　いきなりあの小さい子が片手で君を運んできたのはビックリしたよ？」

葉は、葉月の明らかに残念そうにしている顔を見ながら、苦笑気味に言った。

葉の言葉を軽く変換してみるとつまり、自分は美久にここまで片

手で運ばれてきたということになる。
確かに、外見はどう見ても小学2、3年生な美久が葉月を片手で運んでいるという光景はかなりシュールだろう。　そりゃさすがの葉でも驚くのは当然だ。　自分は慣れているが。

「見たことはできれば忘れてほしい。　で、僕がここに連れてこられた理由だが……正直自分でもよく解らない。　美久……ちょっとした事情があって魔力を開放させたんだ。　そしたら、体の中が直火焼きされたような感じになって……気がついたらここにいた。
そんな感じだ」

正直に言うと、実は今でも炎のような熱さが電撃のように葉月の体の中を走っている。　しかし、表情には出さないように必死に誤魔化している。　篠原葉月はプライドの高い人間だ。　自分が苦しんでいる表情を誰にも見られたくはないのだ。
葉は葉月の説明を、目を閉じながら腕組みをして、所々合間に「うんうん」と頷いて、なんだか真面目なんだか不真面目なんだかよく解らないが、とりあえず最後まで聞いていた。　そして一息ついて

「ふむ……つまり君は、『自分の愛しの美久ちゃんが、僕の部屋に寝泊りしたと勝手に思い込んで勝手に嫉妬して勝手に魔力を開放したときに勝手に倒れた』。　ということだね？」

笑顔でそういってきやがった。　葉月はほぼ無意識に拳を握り締めていた。　こいつの言っている事は認めたくないが、たぶん間違っていない。
葉月は怒りとその他を含めた感情を必死に押し殺して葉の説明に耳を傾けた。　葉は葉月の様子には気づいていないようなそぶりで続ける。

「まぁつまりは、君がその嫉妬パワーで魔力を開放したと同時に、君の魔力がそれを経験地として認識してしまった結果、魔力が急増してしまったわけだ」

葉月は葉の説明の一部を無視して、寝起きのせいで、まだあまりエンジンの掛かっていない脳を必死に働かせる。

「……つまり、僕の中の魔力があまりにも早く増量しすぎたせいで、僕のＬＥＶＥＬ（うつわ）と僕の魔力が釣り合わなくなったってことか？」

頭の中で出した答えをそのまま出すと、葉は「そのとおり！」と言って、頭をブンブンと縦に振りまくった。

「さすが天才君だね。　話しやすくて助かるよ。　君の言うとおり、君の体内魔力が余りにも早く君のＬＥＶＥＬ（うつわ）の許量以上に増量したせいで、ＬＥＶＥＬ（うつわ）から魔力（みず）がこぼれて、君の体に影響を及ぼしたんだね。

もともと魔力そのものは人間の体に有害だからね。　小さい器からもれた魔力は、人の体を蝕むんだよ。　現に、今も君は体中が痛いでしょう？」

「……」

そっか。　と葉月は少し理解する。　こいつに誤魔化すことを自分なんかにできるはずがない。　変なプライドを持ち続けていたのでは、この激痛からは逃れられないのだ。

もはや誤魔化す意味を失った葉月は体の力を抜いて激痛が逆る感覚を無視するのではなく、必死に堪えながら、激痛から逃れる方法を知っている人間である葉を、その赤き眼で見据えた。

「教えてくれ、どうやったらこの痛みは消える？」

葉月はこの際プライドを捨てた。　早くこの痛みから逃れたいその一心で笑顔のままでいる葉に対して、必死に懇願した。　葉は葉月の様子を見て、ずいぶんと楽しそうに、すでに笑っている顔の笑みをさらに深くして、

「うん、わかった」

といって、即座に葉月の鳩尾を突き刺すように豪打した。

「っ！？」

葉月は鳩尾に感じた衝動と、こみ上げてくる吐き気を必死に抑えながら、上半身だけを起こしてほぼ無意識に葉の顔面を殴った。

しかし、葉月の拳には伝わった感触はあまりにも軽く、まるで風船を殴ったような感覚だった。　当の殴られた葉は、本当に風船のように、フワリと宙に浮かびながら葉月との距離を取っていた。彼の顔に殴られたような痕は、モチロン無い。

葉月は殴られた部分を押さえながら、笑いながら浮いている葉をにらみつける。

「何すんだ……！」

「あははは♪　まぁまぁ、押さえて押さえて♪　今のが治療だから」

「腹抱えながら笑っている奴の言う事なんか信じられるか！」

「んーじゃあ」と言って人差し指を自分の頬に添えながら葉はゆっくりと着陸する。　そして、その添えた指先を葉月に向けて、

「お体の調子はいかが？」

ニッコリとまるで本物の子供のように微笑んで葉月の様態を聞く。
そこで葉月は冷静になって気づいた。
体が痛くない。　炎のような体内温は平常になり、電撃のような痛みはスイッチをオフにしたかのように一瞬で完全に消えていた。

「……何をした……？」
「モチロン、君の器を現在の君の魔力と釣り合うようにしたんだよ♪　簡単に言えば。　ＬＥＶＥＬ４になったってことだね。　おめでとう♪」
「……」

葉月は心の中で少し悩んだ。　葉の言うとおり、いま自分はＬＥＶＥＬ４になった（らしい）。
嬉しいと言えば、そりゃ嬉しい。　中等部一年の中でこの時期にＬＥＶＥＬ４になった人間なんて、まずいないだろうし、何よりも自分が成長したような気がして、本当に嬉しい。
だけど、一つ足りない。　一緒にこの嬉しさを共感できる人間がこの場にいないのだ。　本来、ＬＥＶＥＬの増加は一定の期間をそって行われる。　具体的な日にち時候などは知らないが、ＬＥＶＥＬ増加の基準は、その人間がその時までに、どれ位魔力が増加しているか。　またはは、そのＬＥＶＥＬに吊り合うほどの成績があるかないかで決まる（他にも色々あるらしいが、葉月は知らない）。
今回の葉月の場合、葉月が変な魔力の使い方をしたこともあるが、もともとの才能と斐川との決闘での経験地もあるうえ、成績に関しても申し分はない。　つまり、今回のことがなくても、葉月は近いうちにＬＥＶＥＬ４になっていたのだ。
だけど、ＬＥＶＥＬ増加なんて、一年にあるかないかの事だ。
一緒に称え合える人間がいないのは、少し悲しい気がする。　ん？
校長？　数に入れると思うか？　一息つくと、葉月はベッドから

降りる。

「ん？　帰るの？」

「……体の調子は良くなったんだ。　ここにいる必要はない。　そろそろ夕食の準備をしなくちゃいけないんでな」

そう言うと葉月はいまだに抱えている複雑な思いをすぐに消去して、壁にかけられた自分のロングコートを手にとる。　そこで

「……え？」

今自分が手に取ったものが異様に軽い気付いた。

「……っ」

まさかと思い、自分らしくもなく慌ててロングコートの中身を探る。　ポケット、袖、裏ポケット、カフス、裾。　ロングコートのあらゆる場所を探してみるが、無い。　アレが無い！

不意に、葉月はクスッという、小さい、だけど大きな意味を持つ笑いを確かに聞いた。　葉月は笑った張本人を見る。　他にいる訳ない。　笑ったのは、見舞人用のパイプいすに座った白木葉。

「おまえ……っ」

「お探し物は……」

葉の手に白く光る粒子が集まる。　それはほかの粒子を吸収するたびに大きくなり、ついに自分の顔程度まで大きくなると、一瞬だけ強い光を放ち、それは一冊の古びた携帯辞書に変わった。

「これかな？」

第四：小さな鬼と書いて許婚と読む！！　ｐａｒｔ５（後書き）

え～と・・・・・・・・・ども、お久しぶりです。
次話の投稿にここまで遅れてしまったことに関しては、モチのロンに理由があります。
たった一言。　パソコンぶっ壊れたｗｗ
ええ、非常に単純です。　しかもバックアップすらとっていなかったという自分に乾杯（笑）
しかも、その少し後に定期試験というわけだから、マジたまらねぇｗ　はぁ・・・・・・・
はい、愚痴はここまでです。
久しぶりの投稿ってことで、更なるレベルダウンをしていないか心配です。
しかもこれの後には第五へと移動するつもりだったのに急遽変更。
　二話後ということになってしまいました。
情け無い自分に・・・・・・乾杯・・・・・・ｗｗ
では、アドバイス、感想、評価などをお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第四：小さな鬼と書いて許婚と読む！！　ｐａｒｔ６

葉は試すように笑いながら、その書物を見せびらかしてくる。それを目に、葉月は自分の中にらしくない何かが浮かび上がるのを感じた。

その名は『憤怒』。

いつも回りのことに強い関心を持たない葉月にとって、それは本当に彼らしくない感情だ。　だが、今目の前にある光景は、自分にとってのこと。　だからその感情は生まれた。

怒りのあまり、葉月はほぼ飛びつくように葉の手中にある書物を奪い取る。　しかし、触れることはできなかった。　葉月の手が、葉の持つ書物を通り抜けたのだ。　つまり、今のは映像。

葉月はそのまま勢いあまってベッドに突っ込んでしまい、葉はその無様な葉月の動作を満足気に眺めながら、手に持つ書物を一瞬で消した。

葉月は弾く様にベッドから離れ、振り向き様に葉の胸倉を掴んで、彼の身を自分に近づける。

「いつ盗んだ！」

叫びながらの問いに、葉は一瞬だけ、だけど間違いなく苛立った嫌悪の表情を浮かべ、手を横に振るだけで葉月の腕を弾いて払いのけた。

軽い動作とは裏腹に、弾かれた衝動は思ったよりも重く、魔力を使っているのだとすぐに判断できた。

「何を言っているんだい？　盗んだんじゃない、取り戻したんだ」

「……なに……？」

一瞬、葉がなんて自分に言ったのか理解できなかった。　葉月は必死に葉の言葉と自分の知っている現実を整理する。

「何言っているんだお前……あれは、僕が入学祝いとして、『役に立つだろうから』って親父からもらったものだ！」

「確かに役立つだろうね……それは魔法の中でも最高位クラスの魔法ばかりを載せた『破掟禁書（フォビドゥンインデックス）』っていう魔導書なんだから、役に立って当然だ。　だけど、君の父親が入学祝にそれをくれたなんて事は、ありえないよ」

「なんだと……」

「『破掟禁書』は、この学園が誇る最高の監査施設の深部に保管してあったんだ。　でも何故か無くなっていた。　この意味、わかる？」

「盗まれたってことか？」

しかしそれはありえない。

葉月の父親は一般人だ。　魔法のことなんか詳しく知るはずが無いし、そんな貴重な魔導書を盗む必要はどこにも無い。　盗んだところで、父に何か得があるわけもない。　だとすれば、何故あれは父の手に渡った？　そもそも、外見だけならそこらの本とほとんど変わらない魔導書を、何故父が『役に立つ』なんて言いきれた？

この二重にも三重にも重なる矛盾。　葉月はわけが解らなくなった。

「なんなんだ……本当に……」

「こっちも同じ気持ちなんだけどね……過剰過ぎないかって思ってた位の警備があっさりと破られちゃうなんてさ……。　あ、魔導書はこっちが預かっておくよ？　いいね？」

「！？　ふざけんな！！」

そうは行かないと、葉月は葉に再び掴みかかるが、彼は葉月の伸びてきた腕を一瞬で掴み、拒むように弾いた。　彼はそのまま葉月の真紅の瞳をまっすぐに見据える。

「悪いけど、今のは命令だよ。　応えは聞くけど、答えは聞かない」

「……」

葉月は今、彼の真の姿を見たような気がした。

今まで葉月は葉のことを、ただ自分が楽しければ良いような、幼児性の子供みたいなやつだと思っていた。　今でもそれに変わりはない。　だけどそれだけじゃなかったのだ。　今の彼は、誰もどうすることができない、本物の化け物へと変わっている。

今の葉月には、その命令に従う以外の行動を許されてはいなかった。

「返してほしかったら、生徒委員会。　風紀委員会。　どちらかに遊びに行っておいで。　お宝探しのヒントになるだろうから」

その言葉を最後に、彼は姿を消した。　風のようにとかではなく、霞のように。　それを最後までただ呆然と見送ると、急に鉛のように重くなった体をベッドに沈ませ、必死に考えた。

（生徒委員会……。　風紀委員会……。　アイツから取り戻すのは不可能。　だとしたら、そこからやるしかないか……）

そう。　自分があの化け物から宝を手に入れようとするなんて無理だ。　虎穴に入らずんば虎児を得ず、そんなレベルじゃない。だとしたら、アイツからあの本を取り戻す方法はひとつ。　アイツの言うとおり、生徒委員会か風紀委員会からヒントを得る他無い。

しかし、それらの委員会に入れるチャンスを得るのは定期試験の

成績が発表されるまで。　委員会には、成績優秀な数名だけが入れるのだ。

（それまでは準備期間だな……）

いまは諦めるしかない。　そう、自分に言い聞かさなければ、暴走してしまう。　それに、

「「葉月！！」」

保健室に飛び込むような勢いで入ってくる少女が二人。　一人は自分と瓜二つだが、自分とは違い、活発さが伺える少女。　もう片方は、もはや３６０度どこから見ても小学校低学年にしか見えない、幼く小柄な少女。

二人とも、息を荒げながらこちらを心配そうに見ている。

「……うるさいぞ二人とも」

「うみゅ……ご、ごめんなさい……」

「ん、ごめ～ん♪」

強く言ったつもりはなかったのに深く反省したように俯いてしまう美久と、それとは反対に全然気にしてなさそうな愛海。　一瞬ぶん殴ろうかと思ったが、気が乗らず、止めようと結果が出た。

（こいつらのお世話をしなきゃな

体の力が抜けてきた。　ベッドに身を預け、ゆっくりと息を吐く。

（それでも、今だけは休みたいな……）

二人の女の子の口論を聞きながら、自分の意識が薄れていくのを葉月はめいっぱい感じて、目を閉じた。

あぁ、こんなにも心地よい……。

第四：小さな鬼と書いて許婚と読む！！　ｐａｒｔ６（後書き）

お久しぶりです！　ずいぶんと長い間投稿できないですいませんでした。　しかし、またしばらくは投稿できないかもしれません。
本当にゴメンなさい。
でも、頑張ります。　こんな小説でも、好きって言ってくれた人がいたから。　マジで頑張ります！

では、感想、評価、アドバイス等等、お待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第五：対なる二つの組織　Ｐａｒｔ１

２０６７年７月１０日

「では、つぎ……篠原葉月君、お願いします」
「……はい……」

自分の名前が呼ばれ、葉月は静かに返事し、数歩前に出る。
今日は定期試験の実技試験日。
如月学園の定期試験は二つに分けられる。　最初に筆記試験を行い、その後、結果発表と共に実技を行う。
筆記試験は７月に入ると同時に終わり、その結果は今日の午前中に発表された。　その時に葉月は、学年第４位というなかなか（自分的には）の成績をたたき出した。　そして、その日の午後である今が、実技試験日というわけだ。
葉月は精神を落ち着かせ、心を澄ます。　そして、一度息を吸い込むと、自身の体内魔力を鋭くする。　イメージは荒野！

「大地よ起きろ。　姿は槍。　数は三十。　我が示す場を穿て」

葉月の静かなる軍歌が闘技場の中で文字通り静かに響く。
次の瞬間、葉月の詠唱から一秒もしない間に体育館のフローリングを貫いて無数のコンクリート製の鋭い槍が天まで突かんとの勢いで生え出してきた！
闘技場内に、クラスメイト（かんきゃく）の「おおー！」と緊張のかけらも無い感心の歓声が響き渡る。
しかし、葉月は

（ＬＥＶＥＬ４ってのも……たいした事ないんだな……）

今の魔法は、自分にとっては最大限に力を発揮できる全地属性魔術の中でも中級の魔法だ。

実際は、入学したての１年生が中級の魔術を使えるだけでも相当なことなのだが、当の葉月自身はまったく満足していない。

はっきり言うと、今の魔術は前日の斐川戦の時に使用した魔術と同じだ。　少しアレンジしたので微妙に違うが、その違う部分と言うのは、槍の数をすこし増やしただけだ。

もっと高等な魔術を使えばよかったのだが、今の葉月にはそれが出来ない。　その理由は彼の手を見れば解る。

彼の手が痙攣しているのだ。

魔術を使うための魔力と言うのは基本精神力だが、体力にも影響は来る。

篠原葉月と言う人間は、喜怒哀楽などの感情が表情に出にくい人間だ。　だから表情では解りづらいものの、実は今の魔術で葉月は相当な体力を消耗している。

「あいかわらず凄いわね。　先生びっくりしちゃった」

横から担任の眼鏡の女教師が何だか楽しそうに話しかけてくる。

葉月は隠すように手をポケットの中に入れる。

この教師は何かと人のみを案じるので、今の葉月の手の震えを見たら、即効で「保健室に行ってらっしゃい」というだろう。　正直、保健室行きはゴメンだった。

「私が魔法覚えたての頃なんてね？　全然ダメで、発動すらしなかったこともあるの。　あ、でもたまにだよ？　何時もじゃないの。でも、篠原君はすごいよ。　私初めて見たよ、一年生でＬＥＶＥＬ５並の魔術が使える子！　まぁ、一年生でＬＥＶＥＬ４っていうのも、初めてなんだけどね」

キャッキャキャッキャとマシンガントークを繰り広げる我が担任の女教師（名前忘れた）。

いつもの葉月なら、鬱陶しいと言う感じに睨みつけるのだが、今回はそれすらも億劫で、「そうですか」と葉月は適当に流した。

（本当に……ＬＥＶＥＬ４になったのかな……？）

葉月は先日、ＬＥＶＥＬ４になった。

理由はよく解らないが、その日、魔力が急増量したため葉月の体に悪影響が及び、その処置と同時にあの校長からＬＥＶＥＬ４の『器』をもらったのだ。

いきなり過ぎて意味が解らなかったが、何はともわれ、篠原葉月はＬＥＶＥＬ４になった。　だから、今回の試験では自分にとって今までで最高の魔法が出来るかもしれないと思っていた。

今回に備えて、斐川とともに魔術の練習もし、新しい魔術、もっと高等な魔術だっていくつか習得してきた（そのたびに斐川は文句を言っていたが）。

なのに、今本番使用した魔術は、今までで一番と言うのには程遠いものだった。　調子が出なかった？　いや、そんなものじゃない。

（くそっ……これじゃあ、生徒委員会（フォースエンジェルス）、風紀委員会（ジャッジメンターズ）にも入れないかもしれない……！）

その両方の委員会は普通の委員会とは違い、立候補ではなく、成績優秀な生徒のみが選び、あちらからスカウトするという形で入る入らないかが決まるのだ。
しかし、今の自分では優秀な成績が得られないかもしれない。せめてトップ3に入らなければ、選ばれる可能性は低いのだ。
葉月は早くあの魔道書を取り戻さなければならない。　だが、そのためにはその二つの委員会のどちらかに入らなければ始まらないのだ。
しかし、彼がそう悔やんでいる間、すぐさま試験結果発表の日はやってくる。

数日後、彼は学年2位という成績が発表された。

第五：対なる二つの組織　Ｐａｒｔ１（後書き）

第五話へと入りました！
もうそろそろ俺がこの小説を書き始めて一年になるんですね……。
俺、成長してるのかな……？
さてそれはさて置き、次の投稿では新キャラの登場です！　ていうか、今回の第五話は今までで一番登場キャラの登場が多いと思いますｗ　まぁ、それでも３，４人くらいですが……ｗ
さ、そろそろ仕事（執筆）しますか！
では、感想、評価、アドバイスなどをお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第五：対なる二つの組織　Ｐａｒｔ２

「心配する必要はなかったか……」

自分の寮のリビングにおいてあるソファに寝転びながら成績表を眺めている葉月は呆れ半分にそうつぶやく。

そう、今考えてみれば、ＬＥＶＥＬ４の自分並の魔法を出せるものなど、一年生の中にいるはずがなかったのだ。　そもそもこの学園の一年生は１０分の９がＬＥＶＥＬ１だ。　ＬＥＶＥＬ２出すらほとんどいないと言うのだから、葉月のようなＬＥＶＥＬ４なんているわけがない。

（アホらし……）

葉月はソファからゆっくりと立ち上がり、軽く肩をならしながら、夕飯でも作るかと台所へと向かう。

冷蔵庫の中身を確認し、「あぁ、やっぱり今日は残り物の詰合わせだな」と呆れ半分に呟きながらそう決める。　そして、食材を取ろうとしたところで、ふと、一つの疑問が頭に浮かんだ。

（一位は誰なんだ……？）

そう。　葉月の成績順位は二位。　つまり一位がいるはずなのだが、如月学園では成績は個人のみの発表となっているため、誰が一位なのかは本人か、その人間と同室の人間以外は殆んどいない。

一位はどんな奴なのだろうと葉月は考える。　計算上、筆記では一位。　少なくとも二位と言うことになる。　実技でも三位以内に入らなければ、学年一位にはならない。

そこまで考えていると、ピンポーン！　と軽快な呼び出しフォンが鳴った。

「？　こんな時間に……誰だ？」

訝しげに首を傾げながら冷蔵庫の戸を閉めてから玄関へ小走りに向かう。　愛海の靴を（わざと）踏みながら玄関のドアを開けると、そこには見たことのない、高等部の生徒と思しき少年が立っていた。

「や♪」

葉月と目が合うと同時に、右手を上げて愛想の良い笑顔を見せる。

その少年は、ボブカットにした茶色い髪と、濃い緑の瞳が印象的だった。　顔立ちは、やや幼さを残すも、整っていて、黒いアンダーウェアの上に緑色のフードつき半袖ジャケットを着、首には首輪の様なチョーカーをつけていた。

「……どなたでしょうか？」

明らか上級生の生徒に対してはさすがに篠原葉月という人間も敬語になるが、尋ね方から解るように、彼は警戒心を持ち始めている。

対して少年は笑顔のまま

「初めまして篠原葉月くん。　俺は風紀委員会（ジャッジメンターズ）の副会長をやっている、高等部一年の吉良黄泉（きらよみの）乃だ」

そう自己紹介する。　葉月は彼の一つの単語に着目した。

（風紀委員会（ジャッジメンターズ）の副会長……！）

間違いなくそう言った。　しかし、もしかしたら嘘かもしれない。
もし嘘だとしても、明らかに彼に得はないが、いきなりそんなことを言われても現実味がない。
葉月は警戒心を解かなかった。

「……風紀委員会が僕に何の用でしょう？」
「オイオイ、そんな怖い顔すんなよ。　別になんかやったわけじゃないだろ？　まぁ、連絡もなしにいきなり来たのは悪かった。　だが、ちゃんと用はあるんだ」
「その用とは？」

「あぁ」と息づく吉良。　何だか言い辛そうな顔をしてその顔を人差し指でポリポリと掻き始める。　ここで葉月は吉良が次に何を言うかを予想する。

「風紀委員会に来ないか？」

予想通り。　だが、念には念をと、葉月は一つの要求を言う。

「……僕が行くとして……あなたが風紀委員会の人間であるという証拠はありますか？」

「あ？」と、この要求に吉良は良い顔をしなかった。　当然だ。
もし彼がそうであれ、そうでなかれ、疑われたら誰だって良い顔はしないだろう。
吉良は「う～ん」と唸り、考えるように指をラインの整った顎に乗せながら、天井を向く。　数秒後、何かが決まったのか、「よし！」と言って、懐から自分の生徒手帳を取り出し、「ほれ」と言って葉月に開いて見せた。　それには、彼の証明写真と、風紀委員会の象徴である、天使と悪魔の翼が交差するという盾の紋章が刻まれ

ていた。
間違いない。　この証拠により、吉良黄泉乃というこの男は風紀委員会の人間であることは確定した。
「これで良いか？」
微笑みながら確認を葉月にとる吉良。　葉月は目線を生徒手帳から吉良へと変えて、頷いて答える。
「はい。　疑ってすいませんでした」
「いやいいさ。　風紀委員会の勲章忘れてきた俺が悪いんだし」
「勲章忘れてきてたのか」と言う静かな呆れを、葉月は内心で呟いた。　実は勲章なんてものがあるのを葉月は知らなかった。　正直、もし彼がそんな物を付けていたとしても疑っていたかもしれない。
「まぁ、とりあえず、君を誘いに来たってことだ。　君の成績。始業式での活躍は、一年生ながらも風紀委員会にも通用するものだしな。　……んで、来てくれるかい？」
「……」
葉月は迷った。　確かに願っていた結果ではある。　躊躇う必要はないはずなのだが、ここまで事が上手く進んでいるとさすがにこれで良いのかとも思う。
「少し考えさせてもらっても良いでしょうか？　いきなり過ぎて……考える時間が欲しいんです」
葉月の申し出に、吉良は悪い顔をしなかった。

「あぁ、いいぜ。　良い返事を期待している」

笑顔でそう言うと、吉良は去っていった。　エレベーターを使って降りていくところまで見送ると、葉月は玄関のドアを閉める。

「ど～したの～？　お客さんだった？」

振り向くと、そこには全裸にタオル一枚の愛海がアイスキャンディーを咥えたまま、何の恥じらいも無く立っていた。　まだ全身が濡れていているのか、タオルが若干透けて、彼女の体がやや露になっている。

（恥を知らないのかこいつは……）

吉良が部屋に入っくることがなくて良かったと心底思う。　自分に似た顔をした人物がこういう姿でいるのは、絶対見られたくない。

「服を着ろ、バカ」

「おや？　照れ隠しなのかな？　お姉さんの裸に近い姿を見ての興奮を隠してツンツンしているのかな？」

「濡れた体で抱きつくな。　服が濡れる」

適当に愛海の体をどけて、忘れかけていた夕食の準備をしようと、冷蔵庫へと向かう。

「そういえば、今日のご飯何？」

「残り物の詰合せ（オンパレード）」

「えぇ～！　やぁ～だ～！」という愛海の絶叫を、葉月は適当な

食材を手にしながら、それを心地よく聞いていた。　篠原葉月という人間は、実はちょっとSだったりする。

第五：対なる二つの組織　Ｐａｒｔ２（後書き）

お久しぶりです。　投稿のたびに久しぶりと言うのもどうかしてますね、ハイｗ

さて、今回記念すべき２０部で新たなるキャラが登場しました！

名は吉良黄泉乃（変な名前ｗ）。

実は、自分の中では結構気に入っているキャラだったりします。

優遇する気はないけどｗ

外見のモデルは電王の侑人。　設定のモデルは禁書目録の垣根帝督（ネタバレするわけじゃないから言いますした）。　両方とも大好きなキャラなのですｗ

では、やや早いけど、今回はこの辺で。

皆様の感想、評価、アドバイスなどをお待ちしております。

現在、ボイスブログをやっております。

ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください

↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第五：対なる二つの組織　Ｐａｒｔ３

２０６７年７月１８日

この日は如月学園の一学期の終業式の日である。
しかし、もうその終業式は終わり、クラスの中では、実家に帰るための手続きを担任に提出するか、夏休みをどう過ごそうかと、友人と適相談し始めているという生徒がほとんどだ。
そんな慌しい連中に囲まれながら、葉月はある事に対して悩んでいた。
そのある事というのは、今から3日前に吉良から誘われた風紀委員会への入会の件だ。
問題はない。　そうは思う。　だが、妙にスッキリはしなかった。
可能性は低いが、校長の葉が一枚噛んでいるという可能性もある。

（やっぱり、事が上手く進みすぎている……）

そう。　いくら自分の成績が良かったとはいえ、正直、ここまで簡単にどちらかの委員会から声が掛けられるとは思っていなかった。
だからこそ悩む。　自分がどうすればいいのか。　それを考えれば考えるほど、眉間にしわが寄った。

「どうしたの葉月？」

ふと、今まで自分の友達と話していた愛海が、心配そうな顔をしながら彼の顔を覗き込む。　悩んでいた顔をした葉月が心配になっ

たのだろう。
普段はアホでどうしようもないくせに、葉月のことに関しては敏感だった。「すごいな」と、葉月は心から自分の姉を称賛した。
声には出さないが。

「いや……うちの姉はどうやったら頭が良くなるかなって思っただけだ」
「酷い！！　ちょっと赤点があったからって！」
「赤点の数のほうが多かった気がするんだけど？」
「あ、美緒ちゃ～ん。　補習終わったらそっちの部屋に遊びに行ってい～い？」

誤魔化す様に友達達のほうへと戻っていく愛海を、葉月は「やれやれ」と思いながら見送る。
ちなみに、篠原愛海という人間の頭脳は、葉月から言えば、いろんな意味で『終わっている』。　お世辞で言っても『頭が悪い』という風になってしまうほどだ。
魔術自体の才能に関しては、実はＬＥＶＥＬ２と、やや恵まれているのだが、彼女はそれを十分に発揮できず、実技でも中の中位の成績。　この学校に入ったのも補欠合格（または裏口）とか言う話だ（さすがに嘘だとは思うが）。

（何でこの学校に入ったんだ？）

素朴な疑問を浮かべながら、葉月は教室を後にした。　下駄箱で自分の上履きと外靴を入れ替え、昇降口で履き替る。　特に寄り道する予定を作らないで、真っ直ぐに寮へと向かうことにした。
太陽は雲で隠れているものの、やはりもう夏であり、メチャクチャ熱い。　汗で長い前髪が顔に張り付き、鬱陶しく感じる。　「そろそろロングコートは脱ぐべきかもしれないな」なんてことを考え

ながら帰り道を歩いていると、声が聞こえた。

（これはっ！）

ただの声じゃない。　歌だ。　それも、『魔力を含んだ特殊な歌』。

「氷よ舞い降りろ。　姿は氷柱。　数は七十四。　目標を消し去れ」
「大地よ目覚めろ。　形は半円。　我に襲い掛かる難から守れ」

誰かがこれを聞けば、それは合唱のようにも聞こえたかもしれない。　その誰かというのも、魔術を知らない一般人（そとのにんげん）を指すのだが。
突如、空から凄まじい速度で氷が降ってきた。　それは、雹（ひょう）、霰（あられ）、霙（みぞれ）、そんなものではない。　比喩でもなんでもなく、言葉のまま、氷柱の雨がふってきた。　同時に、コンクリートは不自然に盛り上がりドーム状に葉月を守るように覆う。

（くそっ、いきなりなんなんだ……っ！）

いきなりの強襲のせいで、あまり強くは魔力を練られず、半径２メートルのコンクリートのドームに守られながら、葉月は氷が何時ここを貫かんかと不安になっていた。
ドドドドドッ！！！　と、まるで雪崩が押し寄せているような音がドーム内に響く。　今のところ貫かれてはいないが、ヒビが生えてきた。　貫く以前に質量と重量の問題があったのだ。　氷柱はまだ振っている。　その度にひびが範囲を広くしてきた。

（マズい！　崩れる！）

そう葉月が確信するのと、ドームが崩れるのは間違いなく同時だ

った。　葉月はとにかくこの場から離れようと駆け出す。　同時に当たりそうだった氷柱を何とか紙一重で避ける。　そして、地面に手をつく。

「大地よ怒れ。　姿は矢。　数は四十一。　一帯を消し飛ばせ」

葉月の歌に地面が反応する。　コンクリートが再び不自然に盛り上がると、直後、無数のコンクリで出来た矢が降り続く氷柱と応酬した。　ガキン！　という凄まじい音を連続で立てながらコンクリの矢と氷柱の雨が相殺し合う。

数秒後、氷柱の雨はおさまり、葉月の視界に移るのは氷やコンクリの破片だらけの道。　そしてその中で憮然と立っていたのは、見たことある人物だった。

その人物は、あたりの光景を見回すと、無表情のまま何度か頷く。

「なるほど。　この俺の奇襲攻撃に多少うろたえはしたものの、無傷……。　これがＬＥＶＥＬ４の一年、篠原葉月の実力か……」

そう呟きながら純白の美しい長髪を邪魔そうに払うのは、その髪を持つにふさわしい容姿を持つやはり美しい少年。

戸塚雪奈（とづかせつな）。

高等部一年生にして生徒委員会（フォースエンジェルス）の副会長の座に居座り、また、この如月学園の中で３人しかいないと言う、ＬＥＶＥＬ７（ドラグーン）の化け物。

「初めましてではないが、一応、自己紹介といこう。　俺は戸塚雪奈（とづかせつな）。　生徒委員会（フォースエンジェルス）の副会長だ」

表情を変えないでそう自己紹介する。　葉月は思わず警戒心を通り越して敵意を持ってしまう。

「いきなり攻撃してくるって、生徒委員会の人間がやることですか？」
「その事に関しては謝罪しよう。　しかし、今ので解った。　お前は一年生ながらも使える人間だと確信した」
「？」
首を傾げる葉月に、戸塚は冷静な口調で切り出してきた。
「篠原葉月、生徒委員会（フォースエンジェルス）に来い。　これは命令だ」
「っ！？」
一瞬、何を言われてかが解らなかった。　そして、理解する前に第三の声が掛けられる。
「おい、待てよ」
後ろからだった。　振り向くと、そこに立っていたのは、茶色い髪をボブカットにした、濃い緑色の瞳を持つ少年だった。
吉良黄泉乃（きらよみの）。
高等部一年生にして風紀委員会の副会長の地位を持ち、三日前、自分の風紀委員会に葉月を誘った少年。
「なぁに、一年坊に魔術使ってんだよ……戸塚ぁ？」
しかし、目の前にいる少年は、その時の面影をまったく残していなかった。　葉月を風紀委員会に誘った時、彼はこんなではなかった。　圧倒的な存在感を、今の吉良は放っている。　その原因は魔力だ。
とてつもない魔力だった。　それは、篠原葉月と言う人間に動くと言う最低限の動作すら忘れさせてしまうほどに。

（まさか、吉良先輩は……）

可能性はある。　これほどの魔力、前に雪奈の魔力のを感じた時と似ていた。

吉良は笑っている。　しかし、何かが笑っていない。　それは目じゃない。　眉じゃない。　口じゃない。　それは、心だ。　空気だ。　存在だ。

戸塚は眉根を寄せながら吉良を見る。

「吉良……」

「おめぇの勧誘ってのは、下級生をイジメることなのかおい？　知っていると思うが、俺は意外と仕事熱心な人間だ。　だから、こういうところ見たらなぁ……黙っているわけにはいかねぇんだよ」

そこまで言うと、吉良はパン！　と両手を合わせた。　すると、葉月がその動作の意味を考えるよりも前に、突如、轟！！　と、凄まじい風が、三人の服と髪を揺らした。　しかし、これはただの風ではない。　魔力が込められている。　魔術によるものだ。

おそらく、吉良が放ったものだと思う。　しかし、彼が詠唱を唱えるところなど、まったく見えなかった。

まさかと思い、葉月は思わず両腕で顔を庇いながら、一つの可能性を考える。

（まさか、『詠唱破棄（スペルキャンセル）』か？）

『詠唱破棄（スペルキャンセル）』。　それは、魔力の消費を増加させる代わりに、いちいち詠唱行わないで魔術を発動させる技術の事だ。

しかし、それは単純なものではない。　何故なら『詠唱破棄（スペルキャンセル）』は、魔力だけでなく、魔術の構成を脳でキチンと組み立て、なおかつ、

発動のタイミングも正確に図らなければ、発動どころか魔力の誤作動による体の悪影響まで起こりかねない危険なものなのだ。
それを意図も簡単にやったのけた吉良の実力は、葉月には底を見ることが出来ない程のものだった。
するとそんな中、どこからか、タタタタタッ！！　っと速く、なおかつ軽やかな足音が聞こえてきた。

「こぉ～ら、黄泉乃ーーーーーーーーー！！！」

突如、いきなり響く甲高い声と共に、スパーン！！　という実に爽快な音が響いた。　同時に、暴風もそれが電源であったかのようにピタリと止む。

（……？）

ゆっくりと腕を顔からどけてその光景を見てみる。　そこには、吉良の頭を思いっきり叩いたのは私ですハイ！　と言わんばかりに右腕を振り抜いた状態でいる長身の少女と、その少女に叩かれたのが一目瞭然のようにうつぶせに倒れている吉良というなんともシュールな光景（じごくえんず）が映っていた。

第五：対なる二つの組織　Ｐａｒｔ３（後書き）

毎度一話一話を書くたびに読者の皆様とはお久しぶりになってしまうことを、心からお詫び申します。
さて、新キャラではありませんが、珍しいキャラの登場です！　戸塚雪奈くん！（御分かりのとおり、読みは『ゆきな』ではなく『せつな』です）
コイツもお気に入りですね。　結構前に書いたとおり、コイツは俺が書く、もう一つの作品の主人公です。（性格全然違うけど）
それと、実は吉良って前に名前だけ出ているんですよね。（性格には苗字だけ）。忘れてました（えぇ！？）
ちなみに、今回の最後の部分には触れません。ネタバレになる可能性があるので。

さて、今回はこの辺で。
皆様の、感想、評価、アドバイスなどをお待ちしております。

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第五：対なる二つの組織　Ｐａｒｔ４

あまりにもの光景に呆然とするしかない葉月。　吉良はそのまま叩かれた少女に蹴って仰向けにされ、さらに、胸倉をつかまれる。

「あんたねぇ、いきなり仕事をサボってどっかいったと思ったら！！　いきなり魔術使ってるし！　何してんのよ！　何やっちゃってんのよ！！　何してくれちゃってるのよ！！！　え！？　もうこれはアレね、死刑ね。　私刑でもいいわ！　とりあえず今すぐ委員会室に戻るわよ！　いいわね！？　ホラ、何とか言いなさい！！」

物凄い早口で喋るまくる少女。　このやかましさに誰かを思い出す葉月だが、そんなものは頭の中で蹴飛ばしておく。　ただ、そんな口やかましさとは裏腹に、吉良の事を叩いた少女は、本来女性に関心を持たない葉月でさえドキッとしてしまうような美人だった。

カーテンのようにかすかに揺れる夜空のごとく煌めくサラサラな漆黒の髪。　ちょっと吊り上ったダークブルーの大きな瞳。　全体的なスタイルも、誰もがうらやむ理想的なものであろう。

服装は吉良と同じ、黒のアンダーウェアの上に茶色のブレザーを着、赤と黒のチェック柄のスカートという、シンプルながらも、それらは彼女の美しさを十分以上に際立たせていた。

そんな彼女にガックンガックンと、まるで初めてロデオマシンにそれも一番強いレベルで乗った人間のように首を前後に揺らされている吉良は、

「のぅ！　うぉ！　ちょちょちょちょ！　真理（しんり）、さん！　やめ……やめて、ちょ、しゃべ、れないから！」

「絶っ対やめない！　三日前の篠原葉月勧誘の時から仕事をサボり

まくっちゃって……もう許さないわ、許せないわ、許されないわ！！　あんたなんかミンチになるほど踏みつけまくって、その後東京湾の魚達の餌にしてあげるわ！」

「ひいいいいい！！？　なにそれすごくグロテスク！！　篠原君助けてくれ！　戸塚も今は一旦休戦！　だからそっぽ向いてないで助けろ」

先までの迫力はどこへ行ったのか、情けない声を上げながら助けを求めてきた。　なんだか本当にかわいそうなので、さすがに葉月も吉良を助けようとするが、

「え？　篠原葉月いるの！？」

先ほど吉良に真理（しんり）と呼ばれ少女が驚いた表情をしてこちらを向いた。　自然的に葉月と目う。

……なんだろう、嫌な予感がする。　何故なら、真理はすでに吉良を離し（同時に吉良が頭を撃って悶える羽目になる）、誰も気付かぬ間に葉月の目の前に来ているのだから。

「ッ！？」

いきなりの事につい身構えてしまう。　目の前のこの女から感じ取れる魔力、少なくともＬＥＶＥＬ５だ。　そして、先ほど吉良を殴った時まで感じられなかった気配。　只者ではないのは明らかだった。

警戒心は絶対に解かない。　彼女の目を見てみる。　彼女もこちらから目線を一瞬たりとも外さない。　そして次の瞬間―

「かっわい～～～～！！！」

物凄い勢いで葉月の体に抱きついた。　彼女の胸が葉月の顔面を覆い、呼吸をさせなくする。

（〜っ！？）

「すっごく可愛い、この子！　え？　この子が、篠原葉月なの！？　うっそ〜……！　顔はモチロンだけど、このサラサラしてる青紫色の髪とか、生意気そうにちょっと釣り上がった赤目とか、すっごく可愛い〜っ！！　この黒のロングコートとか、このこの可愛さを違う意味で際立たせて……もうたまんな〜い！！」

ギュ〜ッ！　と抱きしめる力を強くする真理。　そのせいで葉月の顔がさらに彼女の胸に埋まってしまう。　一生懸命彼女から離れようとしている葉月だが、彼女の腕力はハンパじゃなく、全く離れることが出来ない。

ちなみに、彼女の着ているのはブレザーを抜かせばアンダーウェアのみなわけで、そのせいで葉月の顔に彼女の胸の感触ほぼじかに伝わってくる。　また、なんというか、女の子独特の香りが葉月の鼻孔をくすぐっていて彼の精神を混乱させる。　いくら無愛想で基本異性に興味がない篠原葉月と言う人間も、結局は『男の子』なのだ。

だが、息が出来ないのに変わりはないので、苦しくさのあまり、葉月それらをすぐに意識の外においやってしまう。

「あの〜……真理さ〜ん？　真理さん？　神錠真理（かみじょうしんり）さん！？　ちょ、ちょっと離してあげて！　篠原君の顔が青くなってきてる！　あんた力入れまくってるでしょ！？」

吉良のそんな声が聞こえた思ったら、真理は「え？　あ、ごめん！」パッと離れた。　彼女の体から解放されると、葉月は息を整える。　今まで呼吸が出来なかったからではあるが、別の意味も含め

ての行動だ。
真理はそんな葉月の顔を覗き込みながら両手を合わせて、
「いや〜、ごめんごめん。　君可愛くてついね」
『つい』で呼吸困難にはなりたくないものだ。　そう思いながら真理を見上げたが、真理は既に葉月を見てはいなかった。　彼女が見ているのは、葉月の後方にいる人物。
「戸塚雪奈（とづかせつな）。　あんた随分じゃない。　こんな可愛い子を虐めた上で自分の所に勧誘なんて……ＬＥＶＥＬ７だからって、ちょっと調子に乗り過ぎなんじゃないの？」
一方の戸塚はしかし、真理の言葉に答えず、ため息を吐くだけだ。
真理はその態度が気に入らないようで、
「ムキーーー！！　なによ、なんなのよ、なんだってのよその態度は！！」
完全に怒りを体全体で表しながら騒ぎまくる。　なんというか、おもちゃを買ってもらえない子供のようだった。　そして、戸塚を指差しながら、
「もう怒ったわ！　黄泉乃、殺（や）っちゃいなさい！！」
「ええ！？　いや、自分が何言ってるか解ってますか！？　風紀委員会の仕事は、校内の生徒の監視及び、傷害などの理由の魔術の阻止なわけで、こっちから攻撃したりもはや殺すってのは、いくら戸塚が相手でもダメですって！！」
「そんなの今はどうだって良いわ！！　ほら！　風紀委員会会長の命令よ！　さっさとやる！　やるの！　やりなさい！」

「風紀委員会会長の言葉とは思えないような言葉だな？　神錠」

不意に、どこからか澄んだ声が聞こえてくる。　真理は自分の名前を呼ばれて心底不機嫌な顔をしながら、その声の下方向を見た。

中学一年校舎の方向だった。

そこにいたのは、誰もが乱視用だと解る様な分厚い眼鏡をかけた小柄な少年だった。　柔らかそうな黒髪を短く切り、黒一色に統一された上下の服の上に、医者のような裾の長い白衣を羽織っている。

「夕凪孤鉈（ゆうなぎこなた）……っ！」

真理が歯噛みしながら唸る。　それが少年の名前なのだろう。

しかし、ここで葉月は彼の苗字に違和感を持つ。

（夕凪（ゆうなぎ）？）

夕凪。　葉月の友人で夕凪護（ゆうなぎまもる）という人物がいる。　だらしがないが少女のような顔をした美しい少年だ。　目の前の少年も、性を夕凪というらしい。

もしや兄弟だろうか？　夕凪なんて苗字は珍しいし、可能性はある。　しかし、目の前の少年が自分の知っている夕凪と似ている部分があるとは思えなかった。　顔の輪郭、目、鼻、雰囲気。　どれも似ていない。

そんな疑問を抱きながら、葉月は目の前の少年、夕凪に声をかける。

「どなたですか？」

夕凪は後輩の葉月に対して、軽くだが、礼儀よく頭を下げた。

「初めまして篠原葉月君。　僕は夕凪孤鉈（ゆうなぎこなた）。　生徒委員会（フォースエンジェルス）の会長をやっているものだよ」

答えた夕凪の口調はとても滑らかで、やさしさを感じるものだった。　それが後輩のみに対しての物なのかどうなのかは解らないが。

夕凪は顔を上げ、

「早速だが、君をスカウトしに来たんだ。　篠原葉月君。　生徒委員会に入る気はないかい？」

「え……？」

紳士な態度でそう聞いてくる。　しかし、ここでも葉月は迷った。

このままで良いのか？　こんな簡単でいいのか？　何かあるんじゃないのか？　今のこの状況は、葉月をここまで不安にさせるほど、上手く行き過ぎている。

そこまで考えると、不意に「だめよ！」という声と共に頭にむにゅう、とした物が当たった。　見上げてみると、風紀委員会の会長、神錠真理が自分を抱きしめているところだった。

「この子を勧誘するのはやめなさい、夕凪孤鉈！　この子は風紀委員会に入るの！　入れるの！　入れさせるの！」

なんだか駄々っ子のように言い放つ真理に、夕凪はしかし、表情を動かさない。

「君が勝手にそう言うのは勝手だが、それは結局は本人の意思だ。　篠原葉月君。　君はどちらに入りたいと思う？」

あくまで笑顔で言ってくる夕凪の顔に曇りはない。　大人が小さい子に接する態度と似ているような気がした。

「……」

しかし、そんな態度でこられても、今の葉月に答えは出せない。
どうすればいい、どうしたらいい、どうやればいい。　考えれば考えるほど俯き、追い詰められてしまう。
次の瞬間、葉月の思考を中断させたのは真理だった。

「だったらこうしましょ。　生徒委員会、風紀委員会で代表者を決めて闘技場で勝負するの！　勝ったほうが篠原君を委員会に入れる。
これでどう？」

かなり傍若無人な意見だった。　言った本人は腕組しながら偉そうに胸を張っている。　この意見に夕凪は、

「ふむ……良いだろう。　開始は明日の午後の1時にしようか。
篠原君も、それで良いかい？」

夕凪がやはり笑顔で聞いてきた。
その笑顔に、葉月はさらに頭を悩ませる。

（ここで悩んでいたって、前に進まないことはわかっている。　だけど、もしかしたら校長の……まてよ？）

悩んだところで浮かんだ疑問に葉月は考える。　そもそも校長の手がかかってはいけないという理由はなんだろうか。
もともと、葉月の『生徒委員会か風紀委員会に入る』という目的は、校長の葉に取られた自分の書物を取り戻すという目的のためにある。　つまり、『たとえ校長が今回の件に絡んでいても、葉月の目的には何の支障もないのだ』。

そう。　彼は単に、『アイツの手は借りたくない』『アイツに勝ってやる！』というものに似たような、いらないプライドに干渉されてしまったがゆえに、要らない心配をし続けていたのだ。

（うわ……ぼく相当間抜け……）

あまりにも馬鹿馬鹿しくて、頭を抱え、本気で自己嫌悪になる。
そんな葉月を生徒委員会、風紀委員会の会長同士が不思議そうに見つめる。

「そ、そんなに悩むことなのかな？」
「さ、さぁ？　篠原君？　そ、そんなに悩むことじゃないのよ？」

悩んでいるのではなく、自分自身を呪いまくっているのだが、そんなことをこの二人が知るわけない。
結果。　夕凪の提案通りの予定となり、その場で全員が解散することになった。
葉月は寮に帰る時も、帰った後も、美久と愛海が帰ってきた時も自分自身を罵倒しまくっていた。　篠原葉月という少年が、意外とデリケートな人間であったことが発覚した夏の昼頃。

第五：対なる二つの組織　Ｐａｒｔ４（後書き）

はい、お久しぶりですね！（いい加減更新速度を速めないといけないとは解ってはいます）
内容のことを話す前に、皆様に質問があります。
更新期間の事を聞くわけではありません（自覚してるからｗ）。聞きたいのは、一話一話の長さはこの位で良いのかという事です。
かなり今更ですが、少し気になりました。最近、「短くないかな？」なんて気がしていたので、聞いてみる事にしたのであります（要望などがあれば、出来るだけ答えたいので、よろしくお願いします）。

さて、内容のほうに入りますか。
今回現れた新キャラは、神錠真理（『まり』ではなく、『しんり』と読んでください）。見た目は美人なのに、幼稚な正確な、困った会長さんです。
物凄いインパクトのキャラと言うのが今まで居なかったので、自分なりに作ってみました。いかがだったでしょうか？
そしてもう一人、夕凪孤鉈（捻りもなく、『こなた』と読んでください）。まぁ、何考えているかわからないタイプの人間ですね。本音、これといったコンセプトはありませんｗ（適当と言うわけではないのですが）

あ、ちなみに、この話はこれでおしまいです。

……いやいやいや！違いますよ！？　おしまいというのは、第五の話が終わるという事であって、今回が最終回というわけではありません！　次の第六へと移るだけです！

さて、次のお話は、『学年最強同士の激突』が主題としたお話とな

っております（まぁ、第３と同じく、Ｐａｒｔ２からが戦闘開始なのですが）。

あ、ちなみに、今日俺の誕生日なのです（どうでもいい）。　１７歳になりました！
大人の道まであと一歩ですね！（なんのや）

では、今回はこの辺で。　皆様の感想、評価、アドバイスなどをお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第六：無敵ＶＳ無双　Ｐａｒｔ１

２０６７年７月１９日

昨日夕凪孤鉈が行っていたとおり、午後に試合が始まるそうなので、昼を食べ終えてから闘技場に来てみると、いきなりの凄まじい光景に、一緒に来た、愛海、美久、斐川が、驚き、同時に身を引くのが解った。　葉月も、顔には出していないが、内心、とても驚いている。

「うわ～……すごいねぇ～」

愛海が呑気な声を上げ、

「すごぉ～い……」

美久は素っ頓狂な声を上げ、

「まるで祭りだな」

斐川はあくまで冷静に客観的結論を出す。　しかし、実際彼も驚いているのだろう。　実は、葉月も、顔には出していないが、内心、とても驚いている。

（本当に、なんだこれは……）

闘技場には、凄まじい数の生徒が押し寄せていた。　本来、闘技

場は１０００人以上の生徒を収められるが、それにもかかわらず、闘技場は中等部1年生から高等部3年生までの生徒で満員だった。
自分と斐川の試合の時だって、ここまでではなかった。　そしてよく見ると、中には教師も混じっていたりする。

「や。　今来たのかい？」

驚きっぱなしの四人に、そう、気さくに声をかけてきたのは、生徒委員会会長、夕凪孤鉈だった。　昨日と変わらぬ、黒一色に統一された上下の服の上に医者のような白衣を着ている。
とりあえず、そうだと葉月が頷くと、夕凪はニコニコと笑ったまま葉月の連れてきた面子を、愛海、美久、斐川の順に見回す。

「お友達かい？　初めまして。　僕は、生徒委員会の会長をやっている、夕凪孤鉈と言うものだ」

これまた昨日と変わらぬ、あくまで紳士に、礼儀よく頭を下げながら、彼らに自己紹介する。　生徒会長相手にどう対応しても良いのか解らないのか、三人とも、新人サラリーマンのように「あ、ども」と、会釈し返す。

「この観客の多さはなんなんですか？」

そう聞き出したのは斐川だった。　やはり、相手が生徒会長となると彼でも緊張するのか、かすかに声が上ずっている気もする。
夕凪孤鉈は「おや？」と、意外そうな顔をした。

「知らなかったのかい？　まぁ、いい。　こっちへおいで。　君達の席は最前列に用意してあるんだ。　会長権限でね」

どうやら、この凄まじい人数の中でも自分達の席を取っておいてくれたみたいだ。　最後の言葉が若干気にもなったが、とりあえず葉月たちは、微笑みながら最前列の席へと続く階段を降りていく夕凪に、警戒心も無くついていく。

観客たちに挟まれた段数の意外に多い階段を降りきり、なぜか自分以外に誰が来るなんて言っていなかったのに現在の人数とちょうどの数の最前列の席の一つには、風紀委員会の会長、神錠真理が、腕と脚を組みながら不機嫌そうな顔で待っていた。

「あ、真理さん……」
「！？　篠原く～ん♪」

しかし、葉月の顔を見た瞬間、魚に食いかかる猫のような顔をして葉月に抱きついた。　身長差のせいか、彼女の豊かな胸が葉月の顔面を覆い、彼に呼吸をさせなくする。

「待ってたのよ～♪　私のお気に入りのペットになるであろう君の事を～♪」
（～！？）

ギュ～ッ！　と抱きしめる力を強くする真理。　そのせいで葉月の顔がさらに彼女の胸に埋まってしまう。　一生懸命彼女から離れようとしている葉月だが、彼女の腕力はハンパじゃなく、全く離れることが出来ない。　あれ？　なんかデジャヴ。

「「ちょ、ちょっと！！　私の葉月に何するんですか！！」」

後ろから見事にハモッた二人の少女の声が聞こえた。　そして自分の背中に誰かの手が当たったような感触がした。　おそらく、愛海と美久が自分から真理を引き剥がそうと、彼女の腕を引っ張って

いるのだろう。

「ちょっと、なによあなた達！？」
「そっちこそ！　葉月を離してくださいよ！！」
「そうです～！　葉月から離れてください～！！」
「嫌よって何このおチビメッチャ力強い！？」

美久の馬鹿力が幸いし、真理腕が僅かに葉月からはなれたところで、葉月は真理の暑い抱擁から抜け出した。
昨日よりは開放された時間が早かったので、葉月は昨日以上のダメージは受けなかった。　……なのに、心の奥で何かの寂しさが残っているのは何故だろう。

「いきなり挨拶も無しに相手に抱きつくのは、無作法だと思わないかい？　神錠」

眼鏡の奥の瞳を光らせながら、夕凪が呟く。　真理がムッとした表情で彼を睨んだ。

「悪かったわね。　ていうか、私聞いてないわよ？　篠原君以外にくる子がいるなんて」
「そりゃ、言う気も無かったからな」
「あんたねぇ……」

神錠が肩を震わせている。　もしかして、二人は仲が悪いのだろうか？
如月学園の生徒委員会と風紀委員会は自身の成績向上のため、仕事を取り合っている中なので、互いの組織同士は仲良くないとは知っていたが、個人でここまで仲が悪いとは知らなかった。
すると、口喧嘩中に悪いかもしれないと思ったのか、遠慮しがち

な態度で、斐川が「あの～……」と、二人に話しかけた。　斐川の呼びかけに、会長二人が、「ん？」と、仲良く首をかしげながら斐川のほうを向く。

「さっきも聞いたんですけど、今日俺たち、篠原が闘技場に行くって言ってたから、珍しいと思って着いて来たんです。　そして来た結果がこの人数……いったい何があるんですか？」

この質問に、風紀委員会会長「おや？」と意外そうな顔をし、夕凪弧鉈は「あぁ、そうだったね」と、左の掌を右の握り拳で軽く叩いた。

「篠原君。　吉良君と雪奈のこと、言わなかったのかい？」

「……えぇ……言っていません」

そう。　実は葉月は、斐川達に今回の試合の内容は話していない。言わなかった理由は、単に聞かれなかったからなのだが、今ここで、「言っておけば良かったかな」なんて当たり前なことをちょっとだけ考えてしまう。　でもまぁ、夕凪が説明してくれるみたいなので、気にすることはないだろう。

「ふむ……まぁ、良いだろう。　えっと、斐川君だったよね？　このギャラリーの多さだけどね。　理由は、我が如月学園でも三人しかいないＬＥＶＥＬ７（ドラグーン）である、風紀委員会副会長の吉良黄泉乃君と、生徒（うち）委員会の副会長である戸塚雪奈の試合だからなんだよ」

彼の言葉に、葉月以外の全員が「うえ！？」「ふぇ！？」「んな！？」とそれぞれが驚きの声を上げた。　良いリアクションだ。

斐川が葉月に食って掛かる。

「おい篠原！　ＬＥＶＥＬ７なんて聞いてもいないぞ！？」
「まあ、言ってないからな」
「そうじゃないだろ！」
「まぁ、とりあえず落ち着きなよ。　ほら、そろそろ始まるから」

夕凪にそういわれて、斐川はハッとし、葉月は右手首につけた腕時計を見る。　時刻はそろそろ午後１時へと回る。　まさに、決闘開始へのカウントダウンだった。

第六：無敵ＶＳ無双　Ｐａｒｔ１（後書き）

随分と間が空いてしまいました。ごめんなさい。
アレなんですよね～。大事な部分とかは早くすむのですが、どうでもいい（細かい描写とか）がなかなか埋まらなくて苦戦します。実は、メモの方ではこの話（第六の内容）は半分くらいは出来上がっているのですが、中埋めが辛くてなかなか進みません。そういうのってどうしたら良いんでしょうかね？

実は結構前になりますが、この「呪をもらって魔法学園生活！！」が観覧数１０万を超えました！（現在は１２万超）
これも、いつも（かどうかは知らんが）この作品をご覧になられている皆様のおかげです！本当にありがとうございました！また、ずうずうしいですが、これからもよろしくお願いします！

次の投稿はいつもよりは早めに投稿出来そうです。少々お待ちを。

では今回はこの辺で。
皆様の、感想、評価、アドバイスなどをお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第六：無敵ＶＳ無双　Ｐａｒｔ２

観客席にガラス張りされた魔力の障壁のせいで、観客のガヤは聞こえない。　そんな空間の中で、学園最強の二名が目を合わせあっているのは、檻の中の龍と虎が威嚇し合う光景と似ているだろう。

誰も近づきたくは、いや、近づけないような、近づいてはいけないような空気が、この二人を中心に溢れている。

『互いに、名を我が声に乗せてください』

雪奈の脳内に、そして吉良の脳内にも、魔術的通信法（マギカテル）による女性の声が響く。　雪奈は一息ついてから、自分の名前と魔法名を思い浮かべた。　『ＦＲＥＥＺＥＲ』。　意味は、凍て付かせる者。

（名は戸塚雪奈。　魔法名は『ＦＲＥＥＺＥＲ』）

これを魔術的通信法の魔力に乗せる。　一時置いて吉良の名前が脳に浮び上がった。　そして直後、再び自分の脳内に彼の『もう一つの名前』が浮かんだ『Ｔ』、『Ｒ』、『Ｕ』、『Ｓ』、『Ｔ』、『Ｅ』、『Ｒ』。　合わせて『ＴＲＵＳＴＥＲ』　直訳すると、託す者。　未だにこの名の意味が解ったことはないが、自分が気にすることではなかった。　そんなことを考えていると、吉良が口を開いた。

「そういえば俺とお前がやるのって、実は二回目だよな。　そしてそん時の試合、俺は負けたっけな」

「……」

雪奈は喋らない。　しかし、吉良はお構い無しに続ける。

「あの時、俺はプライドをずたずたにされて傷ついたよ。　なんせ今まで、自分がこの学園で一番だと思っていたからな」

「たかが一度の勝負で順位が決まるわけではないだろう」

「公式のはな。　だが、それを見た奴らなら皆が皆、お前のほうが上だって言うだろう。　テメェが一番。　俺が二番だってな」

「……もしそうだとして、そこまでお前は一番になりたいのか？」

「いんやぁ、実は俺はそんなのにはあんまこだわってねぇ。　正直、興味だってねぇ。　今回の試合も、別に俺はお前にどうしても勝ちたかったから出たわけじゃねぇ」

だがな、と吉良は続けた。

「お前に勝たなきゃいけない理由はあるんだわ」

「何？」

雪奈は眉を顰める。　吉良は気味が良いと言わんばかり表情を見せた。

「テメェと似ているよ、戸塚」

「吉良……」

直後、互いが目の前の宿敵に、完全な敵意を、悪意を、戦意を向ける。　そして、吉良はパン！　と両掌を合わせ、雪奈はピシィ！と左手の指を鳴らした。

それが彼らの魔術（やりかた）。　詠唱を必要としない、学園最強の肩書きを持つ彼らのみに許された、詠唱破棄（スペルキャンセル）だ。

瞬間、二人の背中に、異様なものが生えてくる。

それは翼。

しかし、向かい合う二人の翼はそれぞれまったくの逆の意味を持つものだった。
雪奈の背に生える翼はまるで、蝙蝠、ドラゴン、悪魔。　その全てに共通する、グライダーのような被膜を持った、巨大な二枚の氷の翼。　まさに、無敵の翼と呼ぶにふさわしいものだ。
それに対し、吉良の背に生える二対の翼は、上部の一対が白鳥、ペガサス、天使などに共通する神秘的な輝きを見せる純白の羽毛を持つ翼。　下部の一対が、鴉、天狗、堕天使、それら全てを思わせる漆黒の羽毛を持つ翼。　合計四枚の、無双の翼だ。
二人は自分の持つ翼を微かに揺らしながら睨み合う。　決戦まで、もう十秒もない。　そして、

「……行くぞ」
「ハッ！　黄泉送りにしてやんよ！」

二種の翼が羽ばたく今、学園最強の二人が交差する。

第六：無敵ＶＳ無双　Ｐａｒｔ２（後書き）

ごめんなさい。
前々回あたりに、第六話のＰａｒｔ２で戦闘に入るといっていた俺ですが、ちょっとした都合により、次の更新でで戦闘に入ることにしました（だから今回は早め）。

えっとまぁ、吉良君が言っていたように、実は二人の試合は二回目なんですね（設定のモデルが垣根帝督と言っていたのはこのため）。これはちょっとした複線になっております（なっているかは置いておいて）。

あと、ちょっと早いですが、次の話（※第七話の事であり、次の投稿の話ではありません）は、彼らとは関係のない（いや、なくはないけど）話となる予定です。

それは、「魔立校他校編」です！

実は、設定資料の中ではもう一つの魔立の学校に通う、葉月とは違う主人公が存在しているのです！名前は……まぁ、聞きたい人いたら言います。今はやめときますね（なんとなく）。
まぁ、性格は葉月とまったく違うキャラとなります。あと、一年生ではありません（このくらいならネタバレにはならないでしょう）。

では、今回はこの辺で。　皆様の感想、評価、アドバイスをお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ
－ｌｏｃｋ／

第六：無敵ＶＳ無双　Ｐａｒｔ３

時間はわずかに戻る。
未だに葉月に叱咤する斐川を何とか落ち着かせ、とりあえず二人の入場を待つことになった。　ちなみに席順は通路側から、真理、葉月、斐川、夕凪、美久、愛海という形になっている。
最初は美久と愛海（プラス会長様一名）が、「私が葉月の隣なの！！」と言い張ってとまらないので、二人には離れてもらった。まぁ、恐らく片方だけでも鬱陶しそうなので、これはこれで良かったのかもしれない。
ちなみに、真理が隣になったのは、彼女曰く「会長権限ね♪」らしい。　この学校の委員会長は双方とも変えるべきではなかろうか？

「来たよ」

夕凪がそうつぶやくのと、観客の歓声が爆発のように響き渡るのは、ほぼ同時だった。
あまりにものうるささに思わず葉月は思わず片目を瞑って耳をふさぐ。　うるさいのはよく体験しているはずなのだが、自分の性格上、こういうのは慣れない。
それでも目線は、下の、学園最強を名乗ることが許された二人の魔術師が踏み入れた舞台だった。
これか行われる試合は、決闘を超えて小規模の戦争となるだろう。
その位のものなのだ、ＬＥＶＥＬ７とは。　そんなものから、目線をはずせるものなど、少なくともこの学園にはいないだろう。
葉月自身がそうであるように。
当の本人たちは、魔法名を互いに送り、何か話し合いをしている

ように見えた。　何の話なのかは、こちらからでは解らない。

「彼らのことは考えないほうがいい」

「え？」

不意に、斐川の隣の夕凪にそういわれた。　思わず葉月は斐川越しに夕凪を見る。

彼はこちらを見てはいない。　彼もまた、戸塚雪奈と吉良黄泉乃の戦いの舞台をじっと見つめていた。　しかし彼の言葉は、明らかに葉月に向けられていたものだった。　夕凪は続ける。

「確かに今回の彼らの試合は、会長（ぼくたち）に代わって、君を自分の組織に入れることが目的だ。　しかし、だからと言って、君が彼らに干渉する必要はどこにもない。　権利もない。　そして僕にも、その権利はない」

「……」

初めて会った時から一度も見なかった真剣な表情で語る夕凪に、葉月は返答をしなかった。　出来なかったのはない。　本当にしなかったのだ。

理由はほぼいつもどおり。　必要はないと思ったから。

自分が、どちらかの委員会に入るのは、校長にとられた、古本（彼は破掟禁書（フォビドゥンインデックス）と言っていた）を取り戻すためだ。　彼と親しくなるためじゃない。

（ま、気にはなってるけどね……）

高等部一年でＬＥＶＥＬ７となった鬼才二名の過去。　知りたくないと言う人間はいないだろう。　だが、委員会の会長様が深入りするなと言うのだ。　それに従わないわけにもいかないだろう。

そこで、決闘は始まる。

下の舞台に立つ二人の背中に、異様なものが生えてきた。
それは翼。
しかし、向かい合う二人の翼はそれぞれまったくの逆の意味を持つものだった。
雪奈の背に生える翼はまるで、蝙蝠、ドラゴン、悪魔。　その全てに共通する、グライダーのような被膜を持った、巨大な二枚の氷の翼。　まさに、無敵の翼と呼ぶにふさわしいものだ。
それに対し、吉良の背に生える二対の翼は、上部の一対が白鳥、ペガサス、天使などに共通する神秘的な輝きを見せる純白の羽毛を持つ翼。　下部の一対が、鴉、天狗、堕天使、それら全てを思わせる漆黒の羽毛を持つ翼。　合計四枚の、無双の翼だ。
会場にどよめきの声が上がる。　葉月も、内心舌を巻いていた。
見たことも無い魔術だった。　それどころか、聞いた事もなかった。　あんなもの破掟禁書にも書いてはいなかった。

「な、なんですかあれ！！　夕凪さん！！」

「自分らしくない」なんて気にすることもせずに声を上げて夕凪に聞いた。　夕凪以外のメンバーが全員驚いた顔をしたが、葉月はそれには気付かなかった。
夕凪は掛けている眼鏡のブリッジを中指で軽く押し上げて、薄く微笑む。

「『あれ』は、彼らのオリジナルの魔術だ」
「オリジナル……！？」

夕凪のあっさりした言葉に、葉月は愕然とした。　他の面子も同じような反応だった（会長様方を除く）。　『オリジナル』なんて、そんなあっさり言えるほど簡単なものじゃない。
オリジナルと言うのは、一般的に見られるアレンジとは全く違う。
オリジナルと言うのは最初の魔術の属性、魔術構成式、魔力の練り方など、それら全てを自分で考えなければならない。
そして、それが法則に基づいているかどうかも問題になる。　基づいていなければ、やはり魔力が体内で暴走し、体に悪影響が起こるのだ。
そんなことが簡単にできる。　ここまで出の葉月の感想は、

（どんだけ化け物なんだ……）

これにつきた。　正直な感想だ。　まだ試合が始まっていないと言うのに、ここまで心が躍っている。　見たい、早くみたい。　そんな感情が、心の中で暴れている。　もともと、校長の葉に聞かされていたころから、一度は見てみたいと思っていたのだ。　篠原葉月と言う人間がそれほど感情が高ぶらせるのも、無理はない。
そんな心のせいで、唇がわずかにつりあがっているのに、手は震えているのに、果たして彼は気付いているのだろうか。　おそらく気付いていないだろう。　なんせ、未知の世界とも言えるものが、これから始まるのだから。
そう、試合はもう始まる。　この際、もはやどちらが勝者でも、自分がどちらの組織に入るのなんて、葉月は気にしなかった。
学園最強同士がぶつかる。　それが見れればもはや十分だった。
そして今、二種の翼が羽ばたいた。

二人が上空へと舞い、先手を打ったのは雪奈だった。　彼は指を鳴らすことで一瞬にして自分の目の前の一定の空間を氷結させ、さらに氷柱へと変換させて放つ。
吉良はそれを旋回して避けると同時に両掌を合わせ、風の刃を１０つ放った。　雪奈は再び指を鳴らし、円形の氷の盾を何枚も生む。
層の様に重なった盾は、空中で刃と何度も何度も相殺した。
直後、雪奈は上昇し吉良の真上を取り、拳を突き出すような動作と共に指を鳴らし、巨大な氷柱を放つが、吉良は再び両手を合わせ、同じくらい巨大な風の刃で、氷柱を真っ二つにする。
しかし、雪奈はそれを利用し、氷柱を無数の弾丸へと変換し、吉良へと再び放つ。

「お前の得意分野（エキスパート）は氷系の魔術だ」

それに対し吉良は、その無数の氷の弾丸を、風の刃を風へと変換させる事で弾きながら語る。

「そして俺の得意分野（エキスパート）は風系統の魔術。　別に相性が良い訳じゃねぇが、悪くもない」

だがな。　と吉良は続ける。

「俺の得意分野（エキスパート）は風だけじゃねぇぜ！！」

叫ぶと同時に、吉良が、パン！　と再び両掌を合わせる。　すると、彼の前に光る何かが現れた。　それは、一秒もしないで砲丸くらいの大きさになると、音速を超える速度で雪奈めがけて放たれた。

「っ！」

放たれたそれの正体は、『真空電子（プラズマ）』。　空気を圧縮することで熱を持たせ、原子を陽イオンと電子へと分解させたものだ。　雪奈は右に旋回してそれを回避する。　彼が今までいたところに電子の尾が引かれていた。

「っ……！」

雪奈が指を鳴らすことで放たれた無数の氷柱は、しかし、吉良の生み出した竜巻にクッキーのように簡単に砕かされる。

ならばと、再び指を鳴らし、闘技場の地面を凍らせると、同時にそこから、巨大な霜柱が天を貫かんという勢いで突き出てきた。それは竜巻を貫通し、それの後ろにいた吉良の翼の一枚を粉砕させた。

しかしそんなものは、彼が魔力を練れば、空中で体制を崩す前にほぼ一瞬で再生してしまう。

「ヌリィよ、戸塚ぁ！！」

パン！　と両掌を勢いよく合わせると、目に見えるほどの濃度の高い風の刃が、彼の右手に螺旋状に集まる。　キーン！　という金切り声を上げるそれは、確実に雪奈の体を抉り、削り、引き裂く凶器だ。　翼を羽ばたかせ、凄まじい速度で雪奈に肉薄すると、それを彼の体へ叩き込む。　雪奈はそれを身を逸らして避けるが、吉良の攻撃は終わらない。　吉良は螺旋の刃を何度も何度も繰り出してくる。

雪奈は吉良の攻撃をかわすと同時に、指を鳴らし、丸い氷の盾を生み出した。　しかし、次に来た追撃をそれで防ぐものの、螺旋の刃は、盾の内側から爆発のような勢いで破裂した。

「くっ……！」

「ちぃ……！」

衝撃により、二人とも弾き飛ばされるが、お互いに翼を羽ばたかせ、すぐに体制を整えると、雪奈は氷柱を、吉良はプラズマを牽制として放つ。　二人の間でそれらが交差し、雪奈と吉良はそれらを回避するため、同時に上昇する。　二人が放った魔力の塊は、今まで彼らのいた場所を通過し、魔力の障壁にぶつかると一瞬で消滅した。

「おらぁ！！」

いつの間にか接近していた吉良が、翼を上手く動かしながら身を捻って蹴りを繰り出し、雪奈は腕をクロスしてそれを受け止める。

逆の足で繰り出された蹴りも上手く交わすと、その脚目掛けカウンターの要領で蹴り、弾いた。

そのせいで吉良が体制を崩すのとほぼ同時に指を鳴らし、刹那、自分の左腕が氷に包まれる。　それは氷のガントレットとして彼の腕を覆い、まさにメビウスの拳となって吉良の体を捉える。

「っ！　ぐっ……ほぁ……」

「……」

呻きながらそのまま落下するしかない吉良は、ドガァ！　と、強い音を立てながら床に倒れた。　翼も力なく倒れ、彼の体を掛け布団のように包む形になる。

「ぐ……おぉ……」

力を込めて立ち上がる吉良に、雪奈はしかし、容赦しない。　指を鳴らし、吉良の両手を氷で覆い、地面に張り付かせたのだ。

「なに！？」
「詠唱破棄は絶妙なタイミングがなければ行えない。　お前が『両掌を合わせた音と僅かな痛覚』でタイミングを図り発動していたことは知っているからな。　有効な手段だろう？」
「てめぇ……」

そして雪奈は、両手の指を鳴らし、剣山の様な氷山を生み出す。
正面にズラリと並ぶそれら全ては、人体など易々と貫くだろう。
棘だらけの氷山はあまりに巨大で、回避することは不可能だと誰でも解る。　吉良は歯噛みし、雪奈はただ宣言する。

「終わりだ……吉良！」

途端、まるで支えの無くなったシャンデリアの様に氷山が落下する。
そして、その落ちてくる氷山を、吉良は笑いながら待ち受けていた。

「なにがかな、トォヅカク～ン？」

ダァン！　という、強い音が響く。　それは、吉良が足で床を強く踏んだ音だった。　瞬間、彼の魔力が轟！！　と、彼を中心に爆風のように広がる。

「なに……！？」
「こういうやり方もあるんだよ！」

突如、二本の竜巻が氷山を柱のように支え、次の瞬間、氷山を粉々に砕いた。　同時に竜巻も強力な風へと変換され、雪奈を吹き飛

ばし、魔術の施された壁に激突させる。
そして、吉良は歌う。
「炎よ揺らめけ。　姿は灯火。　数は四。　冷気に打ち勝つ糧となれ」
小さな、ライターの火より少し大きいくらいの火が四つ。　それらはまるで、磁石にひきつけらるように、主の両手を縛る氷へと集まると、氷の表面だけを溶かし、吉良の両手を解放した。
吉良は具合を確かめるように手首を回す。　手のちょっとした違和感に気付くと、彼は嫌な顔をした。
「もう一歩で霜焼だったぞ……。　ったく、やっぱＬＥＶＥＬ７同士の試合なんて、やるもんじゃねぇな」
めんどくさそうに言いながら背筋を伸ばす。　すると、彼は上空に居る雪奈（しゅくてき）を見つめ、笑う。　それは、挑発的にも、挑戦的にも見えた。
おそらく、相手も同じなのではないかと、吉良は予測する。　お互いの体は武者震いし、心は昂り、血は滾り、神経は研ぎ澄まされている、と。　そして吉良は、白と黒の四枚の翼を羽ばたかせ、宿敵のいる宙へと舞い上がった。
雪奈と目が合うと、吉良は手を合わせて唸りを上げる螺旋の風の刃を手に。　吉良と目が合うと、雪奈は指を鳴らして籠手の様に肘から下を覆う、巨大な氷の爪を形成した。
しかし、二人は動かない。　まだその時ではない。
「戸塚……」
「あぁ……」

突如、ピシィ！　という音がした。　それは、先程雪奈が出した霜柱にヒビが生える音だった。

そして、そのゴングに、二種の最強が再び交差する。

「「第二ラウンドだ！！」」

第六：無敵ＶＳ無双　Ｐａｒｔ３（後書き）

ちょっと（？）今回は更新が遅くなりました。ごめんなさい。だけど、その分今回は内容を多めにしました。

さて、今回はとうとう始まった、雪奈と吉良の戦闘。
学園最強同士の戦い、できるだけ派手にやろうと頑張ったのですが、うまく表現できているでしょうか？そこら辺の感想はぜひ欲しいです。

では、今回は話せる内容があまり無いのでこの辺で。
皆様の感想、評価、アドバイスを心からお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第六：無敵ＶＳ無双　Ｐａｒｔ４

（なんなんだ……これは……）

試合が始まって三分弱。　それが、篠原葉月のこの試合に対する感想だった。

目の前で繰り広げられている戦闘があまりにも現実離れしていて、もはや香港映画のようなコメディにも見えてくる。

「すごいな……」

隣で斐川がそう呟いた。　同時に、戸塚と吉良が氷の爪と螺旋の刃を振り回しながら交差するのが見えた。

彼のほうを見てみると、斐川は目を大きく開いて、その試合の光景を凝視していた。　まるで、初めて夜空に咲き誇る花火を見た子供のように。

「俺ではきっと届かないＬＥＶＥＬ７同士の戦闘。　……なんか、あの二人が戦っている空間は、異世界にも感じるな」

「あぁ、確かにな」

「どんな感じなんだろうな、そこまで魔法を駆使して戦えるなんて気分は。　オレには想像も出来ないよ」

「……」

彼の口調は実に淡々としたものだった。　しかしだからこそ、たったこれだけの会話で、なんとなくだが、葉月は斐川の心境が解った気がした。

彼は、葉月と比べれば、自分には魔術の才能は無いに等しいと感

じているのだ。　彼は今もＬＥＶＥＬ１。　たった３年ちょっとで、目の前で戦っている戸塚雪奈や吉良黄泉乃みたいになれる自身が無いのだろう。　だから、『異世界』なんて、言葉が出てきたのではないだろうか。

「できなくて当然よ」

綺麗で澄んだ、しかし冷たい声が隣から聞こえた。　声の主は斐川ではない。　彼とは反対の隣、神錠真理の声だ。　斐川と共に葉月はそちらを向く。

「あいつ等はね。　天才的な才能はもとより、血反吐吐くまで努力した、まさに化け物なの。　斐川君、ＬＥＶＥＬ１でしょ？」

「っ！」

斐川の目の色が変わった。　彼にとってコンプレックスである部分を触られたのだから、当然だ。

「君、委員会の間じゃ有名なのよ。　天才君に挑んだ無謀な凡才って、ね」

ギリリッという音が小さく聞こえた。　斐川が歯噛みした音だと、葉月はすぐに気付いた。　思わず真理を睨む。

「やめろ！　必死になって努力している人間を、そんな風に言うな！」

つい声が大きくなったが、ここは試合中の闘技場。　一人が騒いだ程度で、常に万人が騒いでいる中では、特に注目も集まることは無かった。

真理は、虚空を見るような目つきで激戦を繰り広げるＬＥＶＥＬ７達を見ながら、

「努力どうこう以前に、スタートがＬＥＶＥＬ１の時点で、あいつらに並ぶことは、無理よ。　次元が違うの。　それと、話は変わるけど、篠原君。　君は恵まれてるのよ」

「恵まれてる？」

「そ。　うちの黄泉乃ものね、入学してきたときはＬＥＶＥＬ３（コモン）だったのよ。　その時は良いとして、アイツが、またあなたと同じように、年内でＬＥＶＥＬ４（ゴースト）になったの。　そのときの周りの反応、どうだったと思う？」

「？」

思わずキョトンとして首を傾げてしまう。　斐川に目線を向けてみるが、彼もまたわからないと、首を軽く振った。　横目でそれを見ていた真理は小さく鼻で笑った。　しかし、馬鹿にしたようではなかった。　どちらかと言うと、何かを哀れんだような、そんな笑い方だった。

「答えはね、同級生には距離を置かれ、上級生には目をつけられるようになったの。　『化け物』としての扱いを受けてね。　酷かったわよ、あれは。

ある日ね、『一年の癖に生意気だ』とかそんな理由で上級生に、学園内でも普段誰も通らないようなところに連れて行かれて、一方的に魔術での猛攻を受けたの。　だけど黄泉乃は逆に、その５人はいた上級生達全員を半殺しにしたのよ。　どんだけよって話よね」

クスッと、真理の顔から笑顔がもれた。　まるで、出来の悪い、だけど愛している弟の話をしている様に。

「それで、かなり危なかったところを、ギリギリで風紀委員会が止めたんだけど……やめに入った時のあいつの私を見る目、今でも覚えてる。　今すぐ殺すぞって目だったな……というより、目に映るもの全部壊してやるって目だったのかな……」

「……」

葉月も斐川も、ただただ、その話を聞いていた。　いや、聞いていたと言うよりは、ゆっくりだが、冷たく、重く、低く語る真理に何も返す言葉が無かった。　だから、必然と全部聞く形になったのだ。

真理はそこで深く息を吸い、

「わかった篠原君？　君は恵まれている。　才能だけじゃなくて、環境も、ね」

「……」

最後に子供諭す様な美しい微笑を見せた真理に対し、葉月は何も答えずに、二人の最強が交差し続けるその空間へと目線を戻した。

だが、真理とは反対側の葉月の隣に座っている少年が、彼の視界の隅で俯いているのだけは、なんとなく、心に残った。

第六：無敵ＶＳ無双　Ｐａｒｔ４（後書き）

ちょこっと早めの投稿です。　試験明け記念ってやつです（内容が戦闘ではないのが悲しいですが）

とりあえず、ちょっとした行間です。　吉良の過去についてですね。
　とりあえず大まかに書いたので、近いうちに本格的にキャラクター一人ひとりの過去の話を書こうと思っています。

次の投稿で戦闘を再開します。　そして急展開！！（まで行けるかな？）

さて、今回はこの辺で。皆様の感想、評価、アドバイスをお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第六：無敵VS無双　Part5

「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」」

シュズァ！！　と言う音を響かせ、二人の刃と体と翼が交差する。
雪奈と吉良は魔力の壁にぶつかる直前で身を翻した。
お互いずいぶんと息が荒い。　一体どのくらいの時間が過ぎたのだろうか。　実際時間はそれほど経っていないのだが、自身にそう感じさせるほど、二人の戦闘はすさまじいものだった。

「くっ……！」

微かな痺れを感じる左腕を覆う氷の爪を見て、雪奈は舌打ちをした。　彼の氷の爪が欠けてきているのだ。　当然、原因は吉良の螺旋の刃との度重なる激突によるものだった。
そんなもの当たり前、といえばそうなのだが、重要なのはそこではない。　重要なのは、『雪奈が持つ氷の爪のみが刃毀れしてきている』ということなのだ。
吉良の風の螺旋の刃。　そう、物質である氷の刃と物質でない風の刃とでは、切れるのは当然、前者のみだ。　ウォーターカッターで包丁が真っ二つになるのと同じようなものだ。
吉良は「相性が悪いわけではない」とは言ったが、それはあくまで、ただ発動ち合うだけの魔術戦の事だけでのこと。　こういう、互いの得意な魔法で作った武器で戦う白兵戦では、意味が異なる。

（やり方を変えるか……）

雪奈は右手の指を鳴らし、氷の爪を、双振りの日本刀へと変える。
当たり前の如く素材は氷だが、魔力を練った氷の強度は、鉄に近

い。　切れ味は本物には及ばないものの、決して鈍物ではない。
それ程のものを見ても、吉良は笑った。
「そんなものが何になる！」
「今よりにはましになるだろう」
互いが再び翼を羽ばたかせ、刃を交わせる。　ガキィ！　という本来ならありえない音が鳴り響いた。
再び始まる何度も幾重にもぶつかり合う刃と刃。　片方が刃を振るえば服を切り裂き、もう片方が刃を振るえば髪を切り飛ばす。
「……」
雪奈は一瞬だけわずかな距離を置き、すぐさま距離をつめると同時に右の刀を振るう。　それに合わせるように、吉良も螺旋の刃を振るった。　ガキン！　という音がして、刀の刀身が半ばから折れる。
「ふっ……！」
「はぁっ！」
次に左の刀を振り下ろしたとき、吉良は払う動作と共に螺旋の刃でそれをまた破壊する。　しかし、それが狙い目。　氷の刀を破壊した吉良のボディはがら空き。　雪奈はそこを狙って蹴りを放つ。
「ごっ……！？」
まともにくらい、吉良の体が面白いくらいに後ろへ飛んだ。　そこへ、雪奈は指を鳴らし、容赦なく無数の氷弾を放つ。　それに対し、吉良は螺旋の刃を肥大化させ、氷の弾丸をすべて弾き、そのま

ま螺旋の刃を竜巻へと変換させると、それを水平に放った。

「っ！？」

範囲が大きすぎる。　避けきれないと判断した雪奈は、指を鳴らして翼を肥大化させ、自分を繭のように覆わせる。　それとほぼ同意に竜巻が雪奈を飲み込んだ。

無数の刃によって氷が削れていく音が雪奈の鼓膜を叩きまくる。

ある意味それは、警報ともいえた。

「ぐ……おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

雪奈は翼の長さ、質量を変えると、それを思いっきり広げ、竜巻を打ち払う。　視界が変わり、彼の目に最初に映ったのは、

「やるじゃねぇか」

「っ！？　吉良……っ」

見下した笑みを浮かべた、白と黒の二対の翼を持つ少年と、その少年を護る、または仕えるようにして存在する四本の光る竜巻だった。

真空電子（プラズマ）。　それがアレの正体。　しかしそんな情報、今の雪奈にとっては何の役にも立たない。　なぜなら、今の彼には、あの竜巻を打開策がないのだ。

雪奈の魔術は、大気中の水分を氷結させて発動させるため、汎用性こそは高いものの、実は威力そのものはそこまでではない。　たとえ、巨大な氷壁を作り出しても、あれを防ぎきれる自信はない。

（……）

それでも、雪奈は指を鳴らし、巨大な氷壁を作った。　まるで彼と吉良の境界線のように床から天井にかけて、張り巡らされた壁は、しかし、まるでクッキーか何かのように一瞬で破壊され、四つの光る竜巻は雪奈を飲み込もうと襲いかかってくる。

そして……。

第六：無敵ＶＳ無双　Ｐａｒｔ５（後書き）

初めまして。お久しぶりです。こんにちわ。略して『はじおひこん』！（なんじゃそりゃｗ）

今回は短めでゴメンなさい。ぜんぜん展開が進まないので急遽こういう形になってしまいましたｗ

さて、雪奈はどうなったのでしょうか？次回が気になる展開になり、ここで今回は終わります。

しっかし、この後の展開（メモ帳の話です）……いったい誰が主人公なんだ（葉月です！／目立たない主人公でゴメン！）？

他校編もちょっとですが、少しずつ書いているところです。お楽しみに。

あ、この後の展開は、ボクのもう一つの作品、『哀をください』に関連することでもあるので、お暇があれば、ぜひ読んでみてください（せ、宣伝じゃないんだからね！）ｗ

では今回はこの辺で、皆様の感想、評価、質問、アドバイスなどをお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。

ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください

↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

第六：無敵VS無双　Part6

視界がぼやける……全身が痛い……。　ほぼ大の字になった状態で闘技場の天井を見上げている雪奈は、意外と冷静にそう心の中で呟いた。

四本の光の竜巻（プラズマ）に飲まれた雪奈は、全身を焼かれ切り裂かれついには地面に叩きのめされ、いまやもう、起き上がる気力も体力も、正直に言って残ってない。

（俺の、負け……か……）

不思議だ。　負けたのに全く悔しくない。　いや、そもそも、自分は勝ちたいなんてこと思っていたか？　それ以前に、自分は何故戦っていた？　篠原葉月を自分の委員会に入れるためだ。　だが、それは夕凪が望んだことであって、自分が望んだことではない。

バカみたいだ。　これじゃあ、勝てなかったのなんて当たり前じゃないか。　そういえば、あの時は何故勝てたのだろう？

（そうか……コレが信念か……）

あの時は、単なる実力試しで、ただ吉良が雪奈のお互いに特に信念がなかった。　実力は拮抗していて、ただ、ちょっとした偶然で雪奈が勝ったのだ。

（そういえば、どうやって勝ったんだか……）

勝った方法すらも思い出せない。　そんなだから、自分は負けるのだろうか？　ホント……本当に……バカバカしい……。

「戸塚ぁ……お前はよぉ……こんなもんじゃなかったはずだよなぁ……？」

ギャリッという、氷でも踏んで砕いたかのような音と共に、冷たく聞こえる少年の声。　それの主が誰かなのかは、確かめるまでもなかった。

「墜ちたなぁ……堕ちたなぁ……落ちたなぁ！　オイ、戸塚。　今のお前最っ高に情けないわ」

「……」

吉良の罵倒するその声に、雪奈はこれといった感想は抱かない。しかし、そんな冷静さも、次の言葉で打ち砕かされる。

「そんなんだからお前は理紗を守ることが出来なかったんだよ！！」

「ッ！！？」

彼が口にした少女の名前を雪奈が耳にしたとき、ピシッ！　という、何かの音が彼の中で聞こえた。　本来無表情の彼が出すことは無い、動揺した表情をみせた雪奈に、吉良は続けた。

「俺が今の理紗の様態を知らないと思ったか？　理紗は事故のショックで記憶が喪失ではなく破壊され、今あいつは病院生活を送っているんだろう？　だからてめぇはここでアイツの記憶を取り戻すための魔法をここで手に入れようとしているんだろ？」

「……」

雪奈は答えない。
それは、それが事実だからだ。　吉良の言う、理紗。　それは、雪奈にとって鬱陶しくも、腹立たしくも、そして、愛おしくもある少女の名前だった。
あの時の傷は自分の体にも、心にも、脳裏にも鮮明に残っている。
忘れるものか。　彼女が事故のショックで自分のことを忘れてしまったときの衝動も、また同様。

「だからなんだ……俺は、アイツをそうしてしまったからこそ、罪を償い、あいつの記憶を取り戻そうとしているだけだ。　文句あるか」
「文句あるに決まってんだろうが！　てめぇのしていることは、ガキがおねしょの痕をごまかす様なものと同じなんだよ！！」
「ッ！　違う！！　ぐっ！！？」

激情相手に殴りかかる勢いで起き上がろうとしたが、何時の間に近くまで来てたのか、吉良に即座に肩を踏み付けられ体が地面に束縛される。　起き上がろうとするも吉良の足はまるで深く刺さった杭のように動かない。

「てめぇは自分が理紗にしちまったことを無かったことにしてぇんだ……責任から逃れてぇんだよ」
「う……あぁ……！」

目を伏せて歯を食いしばって唸る。　それは、違うと言えない自分が情けなく、悔しく、すべてを拒絶したいという、彼の感情表現だった。
違う……ちがう……チガウ！！　そんなんじゃない……っ！　俺は、そんな……違う、違うんだ！！！！！

「う……うおお！！！！！！」

突如、雪奈の絶叫が響き渡った。それは、何もかもを遮断するはずの魔力の障壁の先を越え、観客の心をも驚愕させた。

「っ！？」

思わず、吉良も身を引いてしまう。しかし、それは目の前の敵が放った咆哮に対してではない。そんなもので、学園最強の一人である彼は退かない。

彼が退いた原因は、雪奈の魔力だ。絶叫と共に放たれたそれは、強力ではなく凶力で、強靭ではなく凶靭な大いなる物だった。

そして、

雪奈の体が、凍り始めだした。

否、彼の体を、氷が覆い始めているのだ。

そしてそれは、雪奈の体を覆うだけじゃおさまらず、一定の形を模りながら、徐々に体積、質量を増やしていく。

最終的に出来上がったのは、巨大な氷山。いや違う。それは、太い短めの足に、それとは対称的な細く長い腕があり、長く伸びる尻尾から頭部まで、全体的に爬虫類を思い出させるフォルムをし、背中に生える巨大な翼は、広げれば裕に１０メートルは超えそうだった。そして、それの氷の体の中で眠っているように動かない雪奈は、まるでコアのようにも見えた。

そう。　その姿はまさしく、比喩でもなんでもなく、『氷のドラゴン』だった。

第六：無敵ＶＳ無双　Ｐａｒｔ６（後書き）

「ねぇ、おにいさん……あんた何時になったら今月の更新をしてくれるんだい？」
「すいません大家さん。ちょっと、このあとの展開のことを考え中でして……」
「また、それかい！？……しょうがないね、一週間以内に更新するんだよ……？」
「は、はい！ありがとうございます！」

……なんだこれ？　まぁ、おれの心境というか、最近の状況なのですが……。

えぇ、今回も一ヶ月かかってしまいましたよ。文章というか、構成自体は出来ていたのに、中詰めでいつも時間がかかってしまう。バカの代名詞、俺。
待ってくださっている人たちは本当にゴメンなさい！もっと努力して見せます！

さて、今回の雪奈の暴走。　彼はいったいどうなってしまうのか？
　無敵ＶＳ無双の結果は意外な方向へ！？
次回を待ってください！（最後だけ敬語な件ｗ）

では今回はこの辺で。
皆様の感想、評価、アドバイスをお待ちしております！

現在、ボイスブログをやっております。
ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください

↓http://www.voiceblog.jp/nightlock/

「……何だ、これは………？」

学園最強の一人、吉良黄泉乃は目の前の、異例で、異質で異観で異常で異形で異様な異物に、唖然とするしかなかった。

吉良は、魔術に関しては、戦闘技術だけでなく、教師にも負けないくらいの知識を持っている。　しかし、目の前の現象に関しては見たことはもちろん、触れたことも、聞いたこともない。

そして、目の前の『それ』が、頭部の二つの『目』を赤く光らせ、動き出した。

「ギュォアオオ！！！！！」

天に向かって、巨大な氷の龍が吠える。　その衝撃に吉良の全身の筋肉がいきなりドライアイスをぶち込まれたかのように固った。最強であるはずの彼がこのようになってしまうほどのものを、ギャラリーから見ている人間たちは、今この光景を目にどう思っているのだろうかと吉良は考えた。

こんな未知の現象から生まれた未知の物に、何かが心から体全身を駆け巡る。　恐怖ではない。　相手は、姿形は違えど、旧友であるあの戸塚雪奈には、違いないのだから。　そのくらいの冷静さと理解力を、学園の頂に立つ彼は持っている。

どちらかというと、こみ上げてきた感情は………そう、怒りに

近いものだった。

「戸塚……てめぇはそんな姿になってまで、自分がしちまったことから目を背けてぇのか？」

俯いたままギリィッ……と、吉良は歯を食いしばり、拳を握った。

「てめぇ……どこまで堕ちれば……どこまで腐れば気が済むんだ、ボケがあああああああああああああああああああああああ！！！！！」

感情をむき出した咆哮と共に、両掌を合わせる。

その行為は、言うまでも無く彼の魔術発動の合図。　再び彼の背中に白と黒の二対の翼が生え、空気を叩き、氷龍の頭くらいの高さまで飛び上がる。

「さっさとめぇ覚ませ。　そんで、理紗ん所に戻れ！」

再び合わされる掌。　それによって生まれるのは、四本の光る柱。

否、プラズマの竜巻。　それが一斉に、まるで得物に襲い掛かるハイエナのように氷龍へと襲い掛かる。

しかし、

「ギュアオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！」

「なッ！！？」

咆哮。　それだけで、プラズマの竜巻がザアァ……と、強力な風に吹かれた巨大な砂山のように全てかき消された。

当然、今の龍のそれは、単なる叫び声じゃない。　莫大な量の魔力を注ぎ込んだ衝撃破だ。　だがそれだけでは、今起こった現実は

説明しきれない。

「うそ……だろ……！？」

吉良でさえ、ただ驚くことしか出来ない。　だが、すぐに感情をコントロールして、他の手を考える。

「ギャオオオアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「ッ！！？」

その途中、再び放たれる咆哮と共にすさまじい勢いで振り回される腕に、吉良は反応が遅れた。

速い。

避けられないと確信し、吉良は掌を合わせ、空気の壁を作り、これを防ぐ。　しかし……

「な……にぃ……！？」

龍の腕はその空気の壁を吉良もろとも殴り飛ばした。　空気の壁がまるで風船のように一瞬で弾け飛び、吉良の体も魔力防壁へと衝突する。

「がっ、はぁ……！？」

強力な衝撃に内臓を圧迫され、壁に衝突したときの痛みは、もはや例えられるようなものではなかった。　強力な吐き気はいたっては、地面に落ちたときに耐えられず文字通りの血反吐を吐いてしまう。

（何だ、今のは……？　『ただ腕を振り回した』だけで、俺の防御

壁だけでなく、俺自身にまで攻撃を与えただと？）

ありえない。　吉良の作った壁は、単なる物理攻撃で破壊されるような魔術ではない。　それどころか、魔術による攻撃だって、大抵のものは防げるもののはずだ。

（それが……あの程度の攻撃で……っ！　ふざけんな……ふっざけんなああああああああああああああああ！！！）

たとえ目の前のものが怪物であろうと無かろうと、それが吉良のプライドを傷つけた事に変わりは無い。　それ故吉良は、自身の燃え上がるような怒りを感じる冷静ささえ失っていた。

パァン！　と掌が合わさる音。　そしてその手を地面にたたきつけた。

「こい！　シルフィード！！！」

その行動と彼の声に反応するかのように、同時に幾何学的な文様が地面に浮かんだ。　それは、『召喚魔術』でとあるものを『召喚』するために吉良が最初から作っておいた魔陣だった。

『召喚魔術』。

文字通りというべきか、この場にないものを別の場からここへ移す、一種の『移動魔術』の事だ。

しかし、普通の移動魔術とは違い、今のように魔陣が必要なのだが、吉良はそれを頭の中で全て構成し、魔術によってそれら全てを地面に描いたのだ。

生まれたばかりのそれが、すさまじい光を発すると、魔法を知るものならでは常識の、『ありえないが、ありえる生物』が、まるでホログラムビジョンのように出現した。

今にも飛び掛りそうな体勢で出現したそれは鼬（いたち）。　だが、モチロ

ンただの鼬じゃない。　前後の足に生えた爪は恐ろしく鋭く強靭で、長い尾の先は９０度曲がり、毛が高質化して構成されたのであろう、巨大な鈍色の鎌が出来ている。　大きさに関しては、頭から尻尾を含めると裕に３メートルを超えそうだ。　その姿はまるで東洋の妖怪、『鎌鼬』。

名をシルフィードと言う。　それは、吉良が鼬を媒介にして作られたキメラの名前。　西洋の大精霊の名前に恥じない戦闘能力を持ち、尻尾の鎌は、１０センチほどの鉄板をも斬り捨て、さらに吉良と同等、またはそれ以上の魔術もこなす。　まさに吉良の『切り札』というわけだ。

（あまり使いたくはなかったんだが……そうは言ってらんねぇ……）

吉良はシルフィードを従えながら翼を羽ばたかせる。　これで、一気にケリをつける。

第六：無敵ＶＳ無双　Ｐａｒｔ７（後書き）

よかった……やっと更新できた……。

ごめんなさい……待っていた人、いたら本当にゴメンナサイ……。

今回はラストスパートその一ですね。ハァ……斐川の話よりもはるかに長いとか……。

実は、この作品にはヒロインがいます……いや、むしろ何でいねぇんだよとねｗ

つまり、この作品には、まだヒロインすら登場していません。（なんちゅうこったｗ）

次のお話（第七のこと）はヒロイン登場か、他校編か……あれ？前もこんな話したような……。

現在、ボイスブログをやっております。

ＵＲＬは貼っておきますので、お暇があれば、遊びに来てください

↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

では今回はこの辺で、皆様の感想、評価、質問、アドバイスなどをお待ちしております！

第六：無敵ＶＳ無双　Ｐａｒｔ??

「俺だけ違う学校か……」

小学校の卒業式。　当たり前の如く慣れないピシッとしたスーツの類を着た茶色の髪を持つ少年は、卒業証書が入った筒でポンポンと、肩を叩きながら苦笑でそういって見せた。

そんな彼の言葉に目の前の、最近流行の魔力感染症でも珍しい、雪のような白い髪を背中辺りまで伸ばした少年が、同じような表情をして答えた。

「まぁ、魔術って言うのは、まだ色々と不明なものも多いからな。むしろ、俺は俺はうらやましいぜ」

「そうそう。　あ～あ……私も行きたかったな～」

続いてどこか不機嫌そうに答えたのは、少しウェーブのかかった亜麻色の長い髪の毛と、小動物のような目の癖に、猛禽類のような鋭さを感じる栗色の両目が印象的な少女だった。

彼女も卒業式のため正装である。　もちろん、隣の白髪の少年も（というか、白い髪と対称的な黒色の正装は、なんだか喪服のようにも見える）。

「へっ、そうだな！　魔術は基本、魔法学園のみの秘密事項だ！お前らとは違う世界を見にいってやるさ！」

「も～、ずる～い～！」

へへっ！　っと笑ってみせる茶髪の少年。　その顔に少女は、む

〜っ！　と、プンスカと冗談半分に茶髪の少年をポカポカと殴り始めた。　その行動が可笑しかったのか、彼は頭を抱えながらも笑いながらそれを受け止めている。　確かに可笑しい。　とても日常的で、なんだか見て和める程微笑ましい光景だ。

「……」

だが、白髪の少年は笑わなかった。　笑えなかった。　この光景の違和感。　あんなに楽しそうなのに、どこか辛そうな、茶髪の少年の『何か』。　そう。

白髪の少年は気付いていたのだ。　彼の気持ちに。

きっと彼は、自分たちと違う学校へ行くことになることが、悲しいのだろう。　それなのに笑っているのだろう。　きっと彼は、彼は寂しいのだろう。　なのに楽しいふりをしているのだろう。

彼がそうしているのはおそらく。　いや、間違いなく、自分たちに心配させないため。　しかし、やっぱり無理があるのだろう。

だってほら、悲しい表情（かお）が出てる。

角度的に彼女に見えないのはある意味不幸中の幸いだろう。　だが、彼女は勘が良い。　すぐに気付くだろう。

だから、その前に……。

白髪の少年はバッと無理やり茶髪の少年の腕を引いた。

「おい、少し顔貸せ」

「え？　お、おい！　ちょ、いてぇって！」

「ど、どうしたの！？」

二人とも当然驚いた顔をしたが、無視してそのまま校舎裏へと連れて行く。　は日陰になっている。　木もたくさん植えてあるため他の人間には見えないだろう。
ちょうどついた時に茶髪の少年は白髪の少年の腕は振り払った。
だが、その顔には安堵と、申し訳ないと語っているかのような。表情に満ちている。

「悪い……」

ここに呼び出された意味は自分で解っているのか、最初の言葉はそれだった。

「いや、こっちもいきなりで悪かったと思ってる」
「いいさ。　……それよりも、やっぱ顔に出てたか？」
「あぁ……なぁ、やっぱりお前……」
「言うな。　それにしても、お前に隠し事できないのは最初っから最後までだったな……」

白髪の少年の言葉を静かにさえぎってから、茶髪の少年は呆れたような、というよりは、まいったというような笑みを浮かべる。

「俺さ、お前もだろうけど……やっぱ俺、あいつのこと、好きなんだわ」
「あぁ……」

彼の言葉に頷くしかない。　悲しみをまだ知らない少年は、彼がどういう思いで自分に話しているかを理解し切れていない。　だけど、辛いのだろうというのは伝わったので真摯に受け止めることは出来た。

「だけど、俺はお前らとは違う学校に行く。　魔立の学校は全寮制だから、しばらくはお前とも、あいつとも会えなくなる。　だからよ……」

「……」

喜怒哀楽に満ちた茶髪の少年とは違い、この少年は悲しみを知らない。　だけど、辛さは知っている。

今の自分が出来る彼の今の気持ちに対する解釈は、自分と彼女と共にはぐれるのが辛い。　特に彼女とはぐれてしまうことに関しては、胸が締め付けられるのに近い衝動にかけられているのだろう。

彼のこの気持ちを近いすることは出来ない。　だけど、彼のこの気持ちを受け取ることは出来る。

茶髪の少年は白髪の少年をまっすぐに見る。　向き直る。　そして、告げる。

「雪奈。　お前に、理紗を『託す』。　何が何でも、あいつを守っていてくれ……！」

第六：無敵ＶＳ無双　Ｐａｒｔ??（後書き）

今回は少し早めに更新できました！やった♪

えっと、今回のお話は、解りましたでしょうか？
これを見た人は、一応解っていると思うので、言いますが、今回のお話は、雪奈と吉良の過去のお話。そして、俺のもう一つの作品。
『哀をください』よりちょっと前のお話となっております。

ちなみに、このお話は、最初もっと後に作る予定でした（第六の最後あたり）。だけど、そろそろ吉良の魔法名の理由を公開しておこうかな～。なんて思ったので今回この話を投稿しました。

次回の更新も出来れば、今回くらい早く（いや遅いけどｗ）投稿したいと思います！

それでは、今回はこの辺で。
皆様の、感想、評価、アドバイスをお待ちしております！

あ、ボイスブログをやっているので、もし良かったら遊びに来てください↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｖｏｉｃｅｂｌｏｇ．ｊｐ／ｎｉｇｈｔ－ｌｏｃｋ／

休載のお知らせ。

まずは謝罪を。

本当に申し訳ございません。

このようなことになってしまったのを深くお詫びいたします。

理由のほうですが、この前、というより、前々から何度も何度も読み返して、「ここおかしくないか？」「台詞が少ない」「もっと盛り上げられるはずだ」などの部分が多々どころかいくつもあったこと。また、ストーリー的にも追加設定をいくつか加えようと思い、まことに勝手ながら、「全部見直して書き直す」ことに決めました。

雰囲気は少々変わるかもしれませんが、気になるほどではありません。ストーリーそのものを変えるつもりはございませんので、安心してください。

連載再開は『年内』を予定しております。変わることはないと思って構いません。

また、アクセスのほうを見たのですが、こんなにも長い間放置に近い状態なのに、何名もの方がごらんになっているという事実を知り、本当に嬉しかったです。

再開するときはもっと面白い『呪をもらって魔法学園生活！！』に仕上げていきたいと思います！
ちなみに、この記事は一応残しておきます。再開する前に、どんな作品かを知ってもらうためにです。

では最後に、
本当に申し訳ございませんでした。
今年中に皆様とまたお会いできるように頑張ります！

では、乱文、失礼しました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0022d/

呪をもらって魔法学園生活!!

2010年10月9日12時20分発行